

第 二 回

高 野 山 大 学

チベット仏教文化調査団報告書

は じ め に

高野山大学長 中 川 善 教

昭和52年に結成された高野山大学のラマ教文化調査団は、その年6月下旬からラダックにおけるラマ教文化調査を行ったのであるが、翌53年3月にチベット仏教文化研究会と名称を改め、組織を強め本格恒久のチベット仏教の調査研究機関とし、この研究会の企画に依って第2回の調査団を結成して、6月15日から8月3日に亘る50日間、現地調査が行われた。この度はラダックのレー地域とザンスカール地域との二斑に編成され、レー調査隊はアルチ寺院の壁画の写真撮影と、前年度に調査の及ばなかった寺院の調査を主目的とし、静慈円講師を隊長として、修士課程二年の小林暢善（密教学）同一年の塚本佳道（仏教学）同じく長田実生（仏教学）OBの坎宥行（密教学）南門明定（密教学）の6名。隊員何れも調査の他に、小林君は渉外、塚本君は会計、長田君は写真、OBの坎師は装備、南門師は測量を分担。小林塚本の両君は前回に続き二度目である。ザンスカール調査隊は、その地域の寺院の調査と、兼てカルギル・ザンスカール・レーのルート調査を主目的とし、越智淳仁講師を隊長とし、OBの酒主照之（仏教学）二上寛弘（仏教学）と三回生の常多昇（仏教学）の四人で編成され、酒主師は記録、二上師は装備、常多君は渉外・会計を分担、越智隊長と常多君は前回に続き二度目の隊員である。ザンスカール隊は高地調査の故もあって、隊長を除いて何れも山岳部部員である。

レー隊は予定の如くアルチ村に於て、昨年の調査を踏まえて自炊生活をしながら、壁画の撮影などに成果を挙げたのであるが、学術的な成果の外に、その地の人々との間に暖い交流を深めたことは、尊い生きた成果といえることができよう。それともう一つの成果として、現地に着いて直ぐにというのは不可能な様子なので、来年調査の折に護摩供を修せられたき希望を託しておいたところ、アルチよりレーに向う途中のリキルのゴンパで、アルチより同行のラマの斡旋に依って、はからずも護摩供の修行が実現したことである。護摩は息災法に依って修せられたようであるが、作壇からの始終を八ミリにスライドに撮影され、猶護摩次第も請来されているから、従来文献に依る外はなかったチベットの護摩供の実際を、明らかにすることができたのは幸であった。

ラダックの首都であるレーの南西にあたって、大きなヒマラヤ山脈に添って走る高地の中に、ザンスカールという区域の村々が有る。四千メートルに及ぶ高地である。スリナガルでレー隊と袂を分ったザンスカ

ール隊は、偶然サニの集落で結縁灌頂に会っている。これらの記録は調査隊の報告書に明らかにされるであろうが、予定の如くレーからザンスカールを通過して、デオサイ山脈中のカルギルに至るルートの調査も行われた。高地における月余の調査活動のためであろうが、越智隊長は飯朝のあと郷里へ行く途中発病、急性肝炎のため3箇月の病院生活を余儀なくされ、11月17・18の両日種智院大学での密教学会学術大会に於て、成果を発表することができなかった。一日の昼と夜で温度差17度という、4000メートルの高地に於ける調査が、如何にきびしいかを物語るものであろう。

レー地方に於ても、殊に今年初めて調査の手を伸したザンスカールに於ても、多くの調査すべきものを残している。現地は急速に開発が進められようとしているという。開発が進むということは現地の状況が変わるということである。折角の小チベットにおける調査を挫折せしめることなく、貴重なこの調査研究の続行されることを仏天に祈りたい。

最後になったが、昭和52年に続いてこの度の調査にも、金剛峰寺当局より資金の助成を戴いたことを深く感謝し、併せて今後の一層の法眷をお願いしたい。

(チベット仏教文化研究会々長)

目 次

はじめに	中 川 善 教
第二回海外学術調査団調査総括	越 智 淳 仁 5
ザンスカールの密教調査	越智, 二上, 常多 7
ザンスカール調査日誌	酒 主 照 之 25
レー地域における前回未調査寺院	静 慈 圓 32
リキル寺の息災護摩について	塚 本 佳 道 38
アルチ寺院の曼荼羅	
悪趣清浄曼荼羅について	小 林 暢 善 48
アルチ寺院の仏壇壁画考	長 田 実 生 53
アルチ寺院の伽藍・堂宇の実測	
付 マンダラ分布図および実測表	南 門 明 定 58
アルチ寺院の壁画撮影備忘	
付 アルチ各堂壁画スライド索引	坎 宥 行 64
日 程 表	72
装備・食糧・医療について	75
第二回チベット仏教文化調査団収支報告	85
団 員 名 簿	86
寄 付 者 御 芳 名	87
研 究 会 彙 報	88
編 集 後 記	90
地 図	

第二回海外学術調査団調査総括

越 智 淳 仁

今回の学術調査団は昨年ラダック地域における第一回ラマ教文化調査団の予備調査を受けて、同地域の本調査に当たるとともに、前回、次回にはぜひとも調査したいと考えていたラダックの南側に位置するパンジャブ・ヒマラヤの東山麓に広がるザンスカール地域の予備調査とに当たった。

団員の構成はラダックのレー周辺を調査するレー調査隊と、ザンスカール予備調査隊とに二分した。そして今回の研究調査の終始を総括する意味で、前回のラマ教文化調査団の一員に加わり、調査した経験をもつ越智がその責任者となった。レー調査隊は本学密教学科の静慈圓講師が隊長を務め、前回の調査経験をもつ小林、塚本両院生、及び三人の随喜参加組を加えて計6名で構成した。又、ザンスカール隊は越智が隊長を務め、1971年の第1次ネパール学術調査隊の隊員でもあった本学山岳部のOBでもある酒主、二上(随喜参加)両氏と、前回の調査団で渉外等に充分力量を発揮した常多君との4名で構成した。

レー調査隊の研究調査においては、以下の点が主要な調査成果であったと思われる。

レー調査隊の調査の目的は、アルチゴンバの壁画撮影と云う密教美術の基礎資料の蒐集であった。こ

のゴンバ(寺院)には悪趣清浄系の普明の曼荼羅(sarvavid-maṇḍala)や、智拳印を結んだビルシャナを中尊にもつ金剛界系の曼荼羅等が多数あり、インドの密教史及び美術史に貴重な資料を提供している。この報告書の中の小林暢善隊員の報告は正にこの悪趣清浄系の普明の曼荼羅をテーマとした研究報告であり、又これは彼の修士論文のテーマの一環でもある。又、静隊長の報告は前回未調査に終わったゴンバ調査の成果であり、これは前回の調査をより充実させたことになった。又、ルキル・ゴンバでの息災護摩の記録ハミリフィルムとスライドとは、今まで知ることの出来なかったチベット密教の護摩の実際と興味あるシーンを研究者に与えてくれる。中でも曼荼羅の墨打ちはブダグフィアの大日経広釈等の中で詳細に説明されているが、それ等とこの実際との比較研究も今後の興味ある研究テーマとなろう。又、ゲールクバ(ルキルゴンバ)の息災護摩の儀軌と護摩に使用した五穀や資具等も蒐集して来ているので、これ等の資料による今後の研究が待たれる所である。この報告書の中の塚本佳道隊員の報告は、このルキル・ゴンバの護摩に関する研究報告である。

以上の様に①密教美術の基礎資料としてのアルチ

・ゴンパの壁画撮影 ②前回未調査のゴンパ調査
③ルキル・ゴンパでの息災護摩の記録フィルム及び儀軌、資具等の蒐集、の三点にレー調査隊の成果を要約し得ると思われる。

ザンスカール調査隊の予備調査の成果は、以下の点にあらう。ザンスカールは車が奥地まで入れず、ほとんどが馬か徒歩によらねばならない。こう云う状況下でスル溪谷の上流のランドン・ゴンパから、ザンスカールのパドゥン村のルンナク川の上流にあるパドゥン・ゴンパまでの全行程の途上にある全てのゴンパとラカンの予備調査が出来た事と、智拳印のビルシャナは発見出来なかったが、転法輪印を結んだビルシャナや、阿闍を中尊とする曼荼羅や普明の曼荼羅が管見出来得た事、サニ・ゴンパのカニカチャルテンの調査、及びパドゥン村の石仏調査等であり、パドゥン村の五仏に関してはA・H・フラ

ンケの説を訂正しておいた。これ等の予備調査の研究成果は次回の本調査を待って完成されるであろうが、この報告書の中では、ザンスカールの密教調査と題して越智、二上、常多の三名の合同研究報告として発表しておいた。したがって詳しくはその報告を参照されたい。酒主隊員にはザンスカールの調査日誌を担当してもらい、カルギルからパドゥン・ゴンパの往復の調査日誌を報告してもらった。又、報告書の最後には常多隊員によるラダックとザンスカールの $\frac{1}{250,000}$ の地図を折込んでおいたので随時参照されたい。

以上が今回の学術調査の成果と報告である。この様に、今回の調査団が無事その任を果し得たのも、隊員各位の怯まぬバイタリティーと責任感と使命感及び向学心とによるものである。この点を特に明記して拙い総括としたい。

ザンスカールの密教調査

越智，二上，常多

今回のザンスカールの学術調査は予備調査と云う事になっていた。そこで我々は今回の学術調査をどの様に押し進めるかについてかなり時間をかけて討議した。その結果、出発地から目的地（最終地）までを完全にあますところのない様に調査して、次回の本調査にバトンタッチしようとする事に決定した。したがって最終地の決定は日時の許すかぎりとする事にしてスル溪谷の最初のゴンパ、ランドゥンゴンパから調査を開始したのである。ランドゥン・ゴンパで、リンシェ・ゴンパの情報を得たが日程的に許されず、又、このゴンパまでは往復一週間もかかるとともに、渡渉が困難であるため断念し、もし帰りに日時が許せば訪寺すると云う事で次のゴンパへと歩を進めたのである。

以下ランドゥンからバーカルツェ・ラカンまで我々が歩いて調査した順に報告をして行くことにする。

この報告書は壁画及び尊像の写真撮影を担当した二上隊員とドゥカン内の面積や尊像の名称等を記録した常多隊員、そしてゴンパの宗派、寺伝、仏教文献等の調査と隊員全員の研究活動の掌握に努めた越智とが合同研究と云う形で報告することにしたのである。この三名の他にも、八ミリカメラで記録をとった酒主隊員がいるも、彼は主に調査日誌を担当し

てもらっていたので、この報告書には無関係ではないけれど、この報告書と別にザンスカールの調査日誌を発表してもらうことにして、この報告書からは彼の名前を削除したのである。

ここにこのザンスカールの報告書が成ったのも、隊員全員が一丸となって困難な目的に立ち向った献身的な努力の賜物であり、それ以外の何物でもないと痛感するとともに、無事この任が果たした事に安堵を覚える。

- (1) ランドゥン・ゴンパ (rañ ldum bsad sgrub hdsam gliñ rgyan)
- a) 宗派 ゲルツクパ
 - b) リンボチェ ガーリのリンボチェ、テンジンチョギャル(ダライラマの弟君)
 - c) 僧数 約50名
 - d) 創建年代 約250年前
 - e) 創建者 ガーリ・ツァンのロブサンゲレクエーシェータクパ



〔調査〕標高4400mのペンシラ峠を境に北西側はスル地域、南をザンスカール地域と呼んでいる。カルギルからスル溪谷を南下してパルカチ村まではモスリムの宗教圏内であり、村々には煌びらかなモスリムの寺院が建てられている。これとは対照的にパルカチ村を過ぎるとチベット仏教圏であり、道端には小石が高く積みあげられ、そこにタルチョが立てられて、これより先は仏教圏であることが明示されている。

カルギルから130km南下したスル川の上流にランドゥンゴンパと云う最初のゴンパ(寺院)がある。この寺院はジュルドー村とタシトンデ村の中間に位置し、川原の真中の小高い丘の上に美しい姿をとどめている。

この寺院はゲールクパに属するラダックのリキル寺、ザンスカールのトンデ寺、リンシェ寺、ムネ寺、ブクトル寺、カルシャ寺とともに、ダライラマの弟君、テンジン・チョギャルの持ち寺である。

ドッカン(集会堂)は正面南向き、1300×900



cm。堂内正面奥に釈迦座像(座高約3m)、その左にツォンカパ像がある。正面左手には赤色と黄色のツェパメー(無量寿)にはさまれて、白色のビルシヤナ(vairocana)が転法輪印を結んで座している。

又、正面左の壁にはこの寺の創建者リンポチェ・ロブサンゲレックエーシェータクパ(blo bzang dge legs ye 'se brag pa)の祖師像の壁画とその左手前に小さなチョルテンがある。正面右手の壁画の前にはカーラチャクラのヤブユム像(歡喜仏)や、千手十一面観音等の像がある。これ等の像の前に小さな仏像が幾つかあるが、特に四臂の観音座像の金銅仏はすばらしい。



堂内左壁にはラサ版のカンギュールを納めたパルカン(経函)があり、そこにはラサ版カンギュールとともに60帙ほどの蔵外と30幅ほどのタンカがあった。ドカン入口の左右の壁には四天王と六道輪廻図の壁画があり、中庭にはチェワンナムゲー王のチョルテン一基がある。このチョルテンにはこの寺の開祖であるロブサンゲレーエーシェータクパの

棺桶 (spur khañ) が納められていると云う。その他にもルンマカーネンチェンドルジェーの御座所 (堂内正面右) や多くの壁画, 小チョルテン等があって, みるべき三依処は多い。

(2) リンシェ・ゴンバ (glin sed)。

未調査

- a) ゲルックパ b) ランドゥンゴンバと同じ
c) 約100名

このゴンバはランドゥンゴンバから東へ, 我々の足で往復1週間ほどの所のリンシェ村にあり, 立派な寺であると聞く。

(3) タシトトレ・ゴンチュン・ラカン (bkra 'sis mthon legs mgon chun or gon ched)

- a) ゲルックパ b) ランドン・ゴンバの末寺
c) 1名 d) 約30年前



〔調査〕ランドゥン・ゴンバの少し先のタシトトレ村の緑の野原の上であり, 現在ランドゥン・ゴンバの僧が一名管理にあっている。ドゥカンは南東向, 470×580cm。仏像は堂内にツォンカバと弥勒菩薩との二体のみ。典籍は八千頌般若 (bris ma) や菩提道次第論 (lam rim) の注釈書等のインドで出版されたものが6帙あまりみられた。

(4) アブラン・ラカン (a bran)

- a) ゲルックパ b) カルシャ寺の末寺
c) 1名 d) 新しい



〔調査〕標高4400mのペンツェラ峠を越えたザンスカール地域での最初のゴンバ。ペンツェラ峠から流れ出したストッド川 (stod) が南下し, このストッド川に沿ってザンスカールの村々が点在する。ペンツェラ峠からアブラン村までの間には小さな村が幾つかあるが, それ等の村々にはゴンバもラカンもない。ドゥカンは南向。530×460cm。中尊は千手十一面観音。その他ドルジェチャン等の小さな仏像が6体ほどあり。堂内の左に十万頌般若 (16帙 bris ma) を納めたパルカンがあり, 壁画は全くなく, 全て新しいタンカで堂内を荘厳している。

(5) ハミリン・ゴンバ (ha mi gliñ)

未調査 (ラマ不在の為)

- a) ゲルックパ



(6) スキヤガム・ゴンバ (skya gam)

- a) ゲルックパ b) カルシャの末寺?
- c) 1名 d) 約20年前



〔調査〕ドゥカンの中尊は十一面観音。他に釈迦像2体、ツォンカバ、十一面観音、ジキツェッド等の壁画、十一面観音のタンカ1幅あり。典籍はナルタン版の十万頌般若16帙。ツパドマサンバヴァのナムタル等の蔵外も数帙あり。

このスキヤガム村の対岸にバーカルツェ村があり、この村にもラカンがあるとのも事であったが未調査。

(7) レマラ・ラカン (re ma la)

- a) ゲルックパ b) カルシャの末寺
- c) 1名



〔調査〕ドゥカンは南東向。460×530cm。中尊十一面観音。壁画正面にはグルリンポチェ、ツォン

カバ、左右の壁には釈迦と祖師像とが描かれている。典籍は手写(bris ma)の十万頌般若(16帙)。村の中にくぐりぬけのチョルテンがあり、その内部の天井に曼荼羅あり。チョルテンは南東向。



(8) クウテ・ゴンバ (kuhu phred) (dgañ ldan sgrub nas dgon pa)

- a) ゲルックパ b) カルシャの末寺
- c) 1名



〔調査〕ラマ不在。マンダ村の北山腹にあり、岩壁にへばりつくように三層の小さな建物がマンダ村から小さく見える。又、横の岩棚から水が湧いている。ドゥカンは東向。410×235cm。中尊はパドマサンバヴァ。

(9) ペー・ゴンバ (phye) (bkra 'sis hgan)

- a) ゲルックバ b) カルシャの末寺
c) 2名 d) 約1500年前と云う?



〔調査〕 ペー村のすぐ上の山腹にあり、一階は倉庫、二階がドゥカンと僧坊になっている。本堂は南向。700×720cm。中尊は弥勒菩薩座像。正面奥に十一面観音、釈迦、弥勒、ドゥルマー、中尊の左に十一面観音とチョルテン一基、右に正観音、十一面観音、チャクドル、中尊弥勒の後両脇に釈迦と十一面観音マングラのタンカあり。壁画は全体的に比較的古い。典籍は *lalitavistara* (大遊戯経) 等の大乘経典が数帙と蔵外の典籍も若干あり。

〔10〕 ランタクシャ・ゴンバ (*ran thag 'sa*)

- a) ゲルックバ b) カルシャの末寺
c) 1名



〔調査〕 ラマはカルシャに帰って不在。ドゥカン

は550×550cm。中尊は釈迦如来。左に弥勒。右にバドマサンバヴァ、十一面観音。左右の壁画は釈迦如来。

〔11〕 トゥンリ・ラカン (*duñ ri*) 尼僧寺

- a) ゲルックバ b) 2～5名(尼僧)



〔調査〕 我々が調査に訪れた時、ちょうど尼僧達10名程が堂の入口で酒宴を開いている真最中であつた。調査は早々切りあげさされ、堂を追い出されて、ザンスカールでも珍しいネチャン(米酒)をふるまわれた。ドゥカンは400×500cm。中尊十一面観音。左側に大きな弥勒菩薩像。右にツォンカバ像。その他にグルリンポチュ等の小像あり。この堂内の壁画は比較的古い。典籍は十万頌般若等数帙あり。

〔12〕 トゥラハン・ゴンバ (*brag dkan*)

- a) ゲルックバ b) カルシャの末寺 c) 1名



〔調査〕 ラマ不在。トゥラハン村の裏手山腹にある。ドゥカンは南西向（入口は南東）280×360cm。正面左よりツォンカバ、ドルジェチャン、釈迦像等あり。典籍はmdo sde bskal bzan ba 等数帙。他にタンカが16幅ほどあり。

〔13〕 カサル・ゴンパ (khañ gsar 又は kha gsar)

尼僧寺

未調査（ラマ不在の為）

a) ゲルックパ



トゥラハン村からストッド川（ドダ川ともいう）沿いに山林を通過すると右手対岸にサニ・ゴンパとピピティン・ゴンパとパドゥンの村が見え出し、正面にはカルシャ・ゴンパの姿が遠く豆粒程に見える。そのあたりから、左手山腹の高所にこのカサルゴンパがのぞめる。ドゥカンの前には8基のチョルテンがあり、畑の中に通り抜けの大きな古いチョルテンが一基ある。水はゴンパの裏手の山腹にある溝ぞいに山上の雪解水を引き使用しているが、この頃には水も涸れて人の住めぬ状態となっていた。

〔14〕 テーツェンリン・ゴンパ (bde chen glin)

(snañ ba thal gyi hphags pa)

a) ゲルックパ c) 2名

〔調査〕 カサル・ゴンパへの登口の谷間を溯ると山腹に増築中の小さなゴンパがあった。ドゥカンの前室では60才ほどのラマ僧がしきりに読経に耽っていた。ここでツァンパとブッジャーとの昼食をいただく。ドゥカンは南向。340×330cm。中尊は十一面観音。その左手前に木製の欄干の上に五仏が描かれているものがあり、他に釈迦、パクパ等の小仏像が数体安置されている。壁面にはツォンカバ、サンワツッパレ、チャクドゥクパ等があり、典籍はラサ版のものが数帙と蔵外が15帙ほどあるが、スンブンもゲールラブもないとの事。

〔15〕 ドルチェゾン・ゴンパ (rdo rje rdson)

尼僧寺

a) ゲルックパ c) 尼僧13名



〔調査〕 ランミ村から4km程谷沿いに登った山腹に立つ。ドゥカン二字。上のドゥカンは南東向。480×570cm。中尊は二階まで達する弥勒菩薩像。左に十万頌般若と右にツォンカバ像一体。壁の四面は千体仏の壁画でうめつくされている。ドゥカンの手前の入口広場には息災の護摩壇が設けられていた。これはラダックのリキル・ゴンパの護摩壇と同一のものであった。下のドゥカンでは入口正面に十一面観音像の壁画があり、左手の壁は千体仏。右手の壁

にはナルタン版の十万頌般若が納められたパルカンがあり、その奥にはドルジェチャンの像が一体安置してあった。このゴンバでは我々が調査に訪れた時には、下のドゥカンで72才の長老の尼僧を中心に酒宴の最中であり、我々のゴンバ調査も早々に切りあげさせられた。

〔16〕ランミブラン・ラカン (lan mihi phu hran)
(co mo bu ran)

- a) ゲルックパ b) ドルジェゾンの末寺?
c) 1名



〔調査〕 ラマ不在。ランミ村の中心にあり、ドゥカンは北東向。485×385cm。堂内正面中央にチョルテン一基。左に弥勒、右に十一面観音像。右壁にラサ版の十万頌般若を納めたパルカンがあり、そのパルカンの中央仏は釈迦。堂内の壁には釈迦やツォンカパの壁画があり、典籍は padma mthan yig 等が数帙あり。

〔17〕ユラン・ラカン (yul glan)

未調査

- a) ゲルックパ
ランミ村とカルシャ村の中間にあり。

〔18〕チューチーシャル・ゴンバ (bcu gcig shal)
尼僧寺

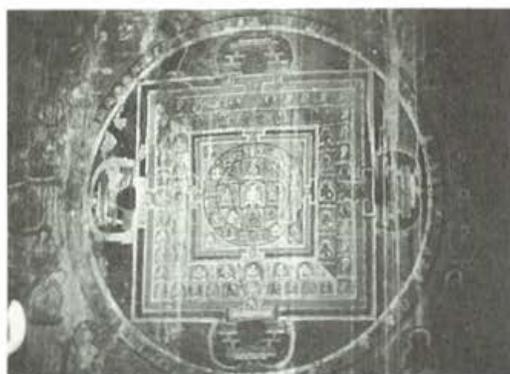
- a) ゲルックパ c) 尼僧1名
d) リンチェンサンポ(十一世紀)の創建という。



〔調査〕 カルシャ・ゴンバの左側、細い谷間を一つ隔てた小高い山腹の上にこの尼僧寺院がある。尼僧は不在であったが、カルシャ村のロンポ (blon po) スナムワンチュク (bsod nams dban phyug 35才) 師に案内していただいた。この寺院は11世紀のリンチェンサンポ(ラダックのアルチ・ゴンバの創建者とも云われる)の創建と伝えられるだけあって、チョルテンや、堂内の壁画には見るべきものが多い。

ドゥカンは東向で凸型の堂。535×505cm。正面に大きな十一面観音像(約350cm)が2階まで突抜けている。正面と右側は下側が少し床高(75cm程)になっていて、右壁の左側にデチョメのヤブユムを中尊とする曼荼羅、右側にドルジェジキチェドを中尊とするヤブユムの曼荼羅が描かれている。又、左壁奥には定印の釈迦を中尊とする普明(sarvavid)のマンダラがある。

更にここにはチョルテンが三基ほどあるが、現在山羊小屋に使用されている古い大きなチョルテンの内部天井とその四方には、阿閼(剝落)を中尊とす



(ドクカン内部 左壁奥 sarvavid mandala)

る金剛界系の五仏の曼荼羅が描かれている。又、左上にも古いチョルテンがあり、その内部天井の中央に青色で触地印を結んだ阿閼が一尊描かれているが、他の四仏は描かれていない様である。この他にも昔は阿閼等の五仏が描かれた壁面をもつ古い大きな建物もあった(ロンボの話)が、今はその敷地跡を止めるにすぎない。典籍は十万頌般若はなく、菩提道大次第等のベチャが10帙ほど、他にタンカが数幅みられた。

[19] カルシャ・ゴンバ (dkar cha, dkar 'su)

(dkar cha byams pa gliñ)

- a) ゲルックバ b) ガーリのリンポチェ
- c) 150名 d) 900年前
- e) バクパシェーラブ



〔調査〕 伝記によれば、ザンスカールで一番大きなこのゴンバはザンスカールの翻訳官バクパシェーラブ (hphags pa 'ses rab) が建て、ドデリンチェン阿闍梨が現在の様に大きくなされたと云う。このゴンバはペンツェラに端を発するストッド (stod, 通称 Doda Riv) 川とルンナク (luñ nag, 又は lingti tsarap) 川との合流点から少し下ったザンスカール川の左岸にある。バクパシェーラブが創建してから400年間はサキャバの宗義が継承されていた。しかし、その後ツォー (stod) のシェーラブサンポ ('ses rab bzun po) がジャムグンラマ (hjam mgon bla ma) の宗義にそってゲルックバに改宗したと伝える。改宗してから現在までに約500年が経過していると云う。このゴンバにはドクカンが二堂とゴンカンが一堂ある。ゴンバの入口には通り抜けのチョルテンが二基あり、その内部天井には各々異った曼荼羅が描かれている。

古いドクカンは三層の中にあり南向。1.100×1.240cm。三層の最下位のドクカンには、正面中央



に十一面観音像。左にチョルテン一基と右に石に浮彫りした十一面観音(八臂)があり、その右端に二階まで達している大きな弥勒菩薩像(高さ約5m)がある。四方の壁には比較的古い壁画がある。即ち正面の左端からはサキャパンディタ、ツォンカバ、釈

迦等。右壁には四天王等。南壁の左端からは不空成就、阿弥陀仏、十一面観音、ドルジェチャン（左右の脇侍としてティローパとナーローパ）、弥勒菩薩等が描かれている。又この堂の上階にはナムタルカンと称される小堂があり、そこには *hphags pa 'ses rab gyi pha rol tu spyin pa rdo rje gtsod pa she bya ba bshugs so* 等の若干の版木と古い壁画があった。

新しいドクカンは南向。1,050×1,100 cm。



堂内正面には十一面観音が中央にあって、その両脇にジョウオーリンポチュと釈迦が安置されている。又、正面の左右の端にはラサ版のテンギェル（200帙）を納めたバルカンがある。堂内右奥にチョルテンが一基ある。このチョルテンはこのゴンバの中興第一世であるドデリンチュン阿闍梨の墓であると伝えられている。又、このドクカンの上階にカンギェルカンとリンポチュのシムチュンとがあり、カンギェルカンにはナルタン版のカンギェルが納められ、シムチュンには額に入った二種の曼荼羅があった。

次にゴンカンに行く。この堂は南東向。560×890 cmで、前室とゴンカンとからなっている。前室には釈迦像が安置され、奥のゴンカンには正面左から順にツンロップ祖師像一体、チョルテン二基、釈迦、ツォンカパ、無量光、観音（六臂）、小さな金

銅仏等が多数ある。更に正面向って右側の壁の奥にもう一部屋あり、その中にも仏像がお祭りしてあると云われるが、秘仏で調査出来なかった。これ以外にもこのゴンカンの中にはクトル (*dgu gtor*) 祭（チベット暦11月28, 29日）に使用される多数の種々の面とか、錫杖や護摩の大約、小杓等も置かれている。このゴンバの案内を親切にもカルシャのロンボがして下さった。この地域にはこれ以外にもツツヂェンボのラカンとか、リンチュンサンボ創建と伝うラカントボ (*lha khan khra bo*) 等もあるが、今回の調査には漏れた。

(20) サニ・ゴンバ (su ni)

- a) カーギェバ（ドクバ）
- b) 現在バルドン・ゴンバのリンポチュが管理している
- c) 5名（バルドンから派遣）
- d) カニカチルテンは今から一千年前の創建と伝う
- e) パドマサンバヴァの創建と伝う

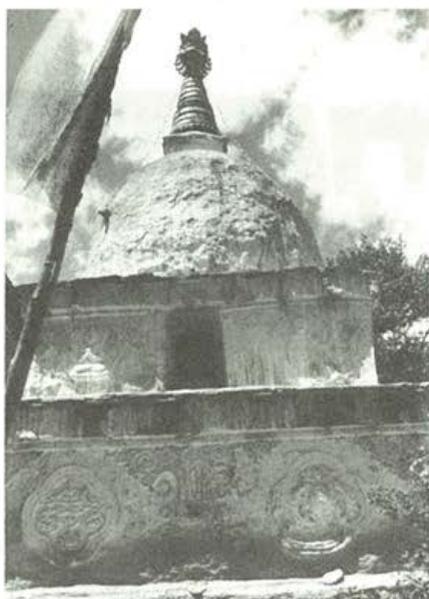


〔調査〕ランミ村からトゥンリ村まで引き返し、トゥンリの橋を渡って対岸のサニ村へと向う。ランミからサニまでは我々の足で四時間程の行程である。この村のサニ・ゴンバはパドマサンバヴァの創建と伝えられ、ここには約一千年前の創建と云われるカ

ニカチョルテンがある。このチョルテンは悉地を生ずる八基のチョルテンの一つであると云われ、寺伝によれば、昔、ヘールカが大自在天を教化した時、八国の八つの共同墓地に八人の地母神の依処として、悉地を生ずる八基のチョルテンが表われた。その時の一つであると云われている。その八基のチョルテンとは、

- ① mañ ga ta (magadha) の bde byed チョルテン
- ② sin gala の ripotala チョルテン
- ③ bal po (Nepal) の bya run kha 'sor チョルテン
- ④ señ ne gliñ の geñu don チョルテン
- ⑤ li yul (Turks) の gomasala gandha チョルテン
- ⑥ za hor (Bengal) の bde byed gshon nuñi チョルテン
- ⑦ u rgyan gnas (Uḍḍyāna) の gsañ bañi gand-hola) チョルテン
- ⑧ kha che (Kashmir) の kanika チョルテン

である。



又、このチョルテンはナーローパ(A. D. 1016～A. D. 1100 Nārōpa)が33才の時にナーランダに行き、ナーランダ寺の仏教哲学論争に加わって成功し、その後8年間その地位を確保するのであるが、41才頃ティローパーに師事する様に啓示を受けて辞職し、以後ティローパーを探し求めて苦しい旅が続く。やゝとの事で師に巡り逢い、師が死ぬまでの12年間師事する。ナーローパ自身は84才(A. D. 1100)で此の世を去るが、彼の死骸はザンスカールのこのカニカチョルテンに埋葬されていると云う。このチョルテンの^{ガン}龍には中央に釈迦、左に観音、右にドルチェートツパが安置されている。高さ約6,7mのこのチョルテンは、インドのデチェンダル(bde chen rdal)墓地のそれと同様だとアーガマに記されているとも云う。

このチョルテンの正面にギャムツォ・ラカン(250×500cm)があり、内部の壁にはパドマサンバヴァの伝記が浮彫りで描かれている。



又、このチョルテンの北側にはナーローパの堂があり、中には吉祥ナーローパのお像が安置されている。この堂はチベット暦の六月中旬に年一回開廟されるだけで、それ以外の時は鍵がかけられ固く封印されている。



ドゥッカンは南東向、1,800×1,500cm。正面にカンギュルカン。左壁(西側)奥にテンギュルカン。右壁(東側)奥にゴンカンがある。このカンギュルカンの中央にはチョーリンポチェ像、その左右にナルタン版のカンギュルあり。ドゥッカン正面の左より観音、釈迦二体、弥勒像と続き、カンギュルカン入口上部の梁に四色に色分けされた七仏の壁画あり。さらに右へ十一面観音、パドマサンバヴァ、釈迦像、次にテンギュルカンの中央には釈迦像、その左右にナルタン版のテンギュル、又、ゴンカンの内部は金線で描写された壁画で埋めつくされ、この堂宇の中にはチャージーバ・ゴンボとテムチョク等をお祭りしてあった。更に吹き抜けになっているドゥッカンの二階廻廊の周囲にも古い壁画がみられるが、剥落が激しく、現在新しいパネルが掛けられている。

このドゥッカンの二階にチュクラッカン(学問堂)もあり、パドマサンバヴァの像とマルバやナーローバ等の多数のタンカが掛けられていた。

このサニ・ゴンバを訪れた時、折しもチャワン(phug dban 灌頂の一種)の儀式が始められる所であった。この儀式はサニ村のゴンバの側の野原に固定された石組の灌頂壇で、バルドゥン・ゴンバのリンポチェが執り行っていた。この灌頂壇はこの地域に見られる護摩壇と似ており、その寸法は縦470

×横480cm、背部の高さは210cm。方位東南向であった。ここに集まった近郷の人々の中で一際目を楽しませてくれたのは女性のラダック衣装である。祭りか何かでもなければ、これほどのラダック衣装の集いには遭遇出来るものではない。



またゴンバの裏手には弥勒等の石仏が8体ほどあり、タルチョを立ててその聖地を固持している。又、この村には小さな湖があって魚を飼っているが、不殺生戒を守って決して殺したり、食べたりしない。この湖と魚はゴンバが管理しており、湖にはタルシンが立てられて聖地としている。



(21) ビピティン・ゴンバ (pipi tin)

a) ゲルックバ c) 1名



〔調査〕 パドゥン村から北西向にカルシャ村を対岸に望む小高い丘上に大きな真白いチョルテンを見せながら建っている。ドゥカンは南西向。700×500cm。ドゥカン内部の正面には十一面観音が中尊として安置され左右にグルリンポチュと弥勒、その前にツォンカバ、釈迦、ロブロンクル等が安置されている。吹抜けの二階には十万頌般若（手書き）が納められている部屋があり、その上はチョルテンになっている。又、本堂裏手に大小のチョルテンが二基あり、ゴンパの下に西側にはチョルテンが三基並び、マニ塚が南北に延びている。このチョルテンの一基内部にはマンダラが描かれていた。

〔21〕 パドゥン・ラカン (dpul bdun)

未調査

a) カーギュバ



パドゥン村の中央小高い丘の上であり、下には新古の数基のチョルテンあり。

〔23〕 パドゥン・ラカン下のチョルテンと石仏調査

1) チョルテン調査



（古いチョルテン）

〔調査〕 パドゥン・ラカンの下には多くのチョルテンがあるが、ほとんどは崩壊寸前である。その中、ラカン下の民家の立ち並ぶ中にあるチョルテンで、通り抜けになっているチョルテンが大小二基ある。この二基とも天井内部にマンダラが残されており、剝落はかなり激しい。この中、大きなチョルテンに描かれているマンダラは中尊が阿閼で、その囲りを八尊（四仏、四菩薩か？）が囲繞している。又その四隅を四天王が守護している。このマンダラと同系列のものが、カルシャのチョルテン、テーツァ村のチョルテン、バルドゥン・ゴンパの壁画、マルキン村の付近にあるチョルテンとビピティン・ゴンパ下のチョルテンにそれぞれ認められた。これらのマン

ダラの中尊は白と赤と青のものがあり、パドゥン下のこのチョルテンのマンドラが、これ等のどれに属するかは剥落がひどく変色していて今の段階では決定出来ない。

小さなチョルテンには触地印を結んだ青色の阿閼を中尊とするマンドラが描かれている。このチョルテンはカルシャ・ゴンパの隣のチュクチーヤル・ゴンパのそれと同系で、かなり古いものである。他にこの系列に属するものとしてパドゥンの南のムネゴンパのさらに南のスマンラ (sman bla) の他にもクンリクと阿閼のマンドラが描かれているチョルテンがあると聞く。

2) パドゥン村の石仏調査



〔調査〕 パドゥン村から川添いに少し下ると川端に大きな岩が二つあり、一番大きな下の岩に金剛界系の五仏が浮き彫りにされている。この五仏は五明勝 (ngyal bu rigs lma) と呼ばれている。中央のビルシャナ (Vairocana) は他の左右の四仏よりも後背が高く大きい。頭には三角の突起が三つある宝冠を頂き、手には転法輪印を結ぶ。蓮台の下には二頭の獅子が彫られ、獅子座に安住する中尊であることを示している。このビルシャナに向かって左側には、宝冠なく、手は左手を臍に上向けてつけ、右手をたらし触地印にした阿閼 (Akṣobhya) が安住し、蓮台

の下には二頭の象 (未確認) が彫られている。更にその左側には、宝冠なく、手は左手を臍の所で上向にしてつけ、右手を与願印にした宝生 (Ratnasambhava) が安住し、蓮台の下には二頭の馬 (未確認) が彫られている。向ってビルシャナの右側には、宝冠なく、定印を結ぶ阿彌陀 (Amitābha) が安住し、蓮台の下には二羽の孔雀が彫られている。その更に右側には、宝冠なく、施無畏の印を結んだ不空成就 (Amoghasiddhi) が安住し、蓮台の下には二羽の金翅鳥 (garuda) が彫られている。この五仏については既に فرانケが「西チベットの歴史 (A. H. Francke: A History of Western Tibet, 1977年 に S. S. Gergan と F. M. Hassnain によって "A History of Ladakh" と表題を変え、Critical Introduction をつけて再版されている。) この中で、この中尊を弥勒仏としているが、これは間違いであろう。弥勒仏はこの岩では五仏が彫られているその五仏の向って右側に岩壁一ぱいに大きく彫られているのがそれである。又、ラダックとザンスカール地域で弥勒 (Maitreya) を中尊とする五仏の壁画や、曼荼羅にもお目にかかったこともなく、したがって、この記述はこの地域の住民に聞いて書いたフランケの誤りではないかと思われる。

又、この岩の川面にもチョルテンや、諸仏が彫られているが風化の為か何尊であるか判明しなかった。

更にこの岩からパダグンよりのすぐ隣の岩にも立った姿の五仏が彫られている。この五仏はこの岩の川に面した側に中尊は三角の突起のある宝冠を頂き、手は左手をだらしとたらし、右手は胸の前で親指を上にして掌を内に向け、左手はだらしと垂らし、親指を外にして掌を前方に向けている。この岩の五仏は全て同一の印相を表している。



又、中尊とそれに向って右の二尊の蓮台の下には順に二頭の獅子、二羽の孔雀、二羽の金翅鳥が彫られているも、中尊の左側の二尊の蓮台の下には二頭の馬と象が彫られているかどうか、肉眼では確認出来なかった。この様に五仏が立った姿勢で描かれている形式は、ラダックのシェーゴンパの下の岩壁に既に発見されているが、その五仏と比較すると美術的にも図像学的にもかなり劣るものであり、印相も全く異なる。シェーゴンパ下の五仏の印相は、中央ビルシャナは智拳印 (bodhyagrī), その他四仏の印相も、阿闍——触地印、宝生——与願印、阿弥陀——一定印、不空成就——施無畏であって乗物もビルシャナ——獅子、阿闍——象、宝生——馬、阿弥陀——孔雀、不空成就——金翅鳥とされ、印相も乗物も儀軌どりのものである。

このパドゥンの下の二つの五仏を比較してみると下の坐った中尊転法輪印のビルシャナを持つ五仏の方が美術的にも、図像学的にも優れたものであり、ここの原地人の話しでは、この五仏はリンチェンサンポの時代 (958~1055) に彫られたと伝えられているようである。この地域にはそれ以外にも四角の石柱の四面に一尊ずつ彫られたものや、長方形の石表に一尊が彫られているものが最近堀り出されているが、その彫られた年代は不明で、尊像の中には

ラダック衣裳の尊像もみうけられ、一見新しいもの様である。この二つの石柱は五仏の大岩の近くの平地にタルチョを立てて、そこに安置されている。

Q24) スタクリモ・ゴンパ (stag ri mo)

- a) カーギュバ b) スタクナ・ゴンパのリンポ
 チェ (ラダック) c) 30名



(調査) パドゥン村の山手 (南側) 中腹に建っている。ザンスカールのバルドゥン、サニ、スタクリモ、ゾンクルゴンパ等のカーギュバの寺院は、ラダックのスタクナ・ゴンパの系列に属し、ザンスカールでの地域的分布では、ストッド川 (通称ドダ川) とルンナク川の南岸に集中している。ストッド川の東岸にはカーギュバの寺院は一ヶ寺もなく、ルンナク川の対岸にもカーギュバの寺院はない。

このパドゥン村はザンスカールの中心地であり、交易の為バザールが開かれ、スリナガルからカルギルを経て近代文明がどっとおしかけてきている。ここの住民はモスリム系が多く、他の村々とは例外的に住民の過半数が回教徒である。又、この町では英語がかなり普及しており、かえってチベット語が通じない奇妙な現象に驚いたりもした。又この町にはツーリストオフィスや、レストラン、ダックバンガロー、学校等があり、学校では現地語の他に英語や

チベット語による仏教等が教育されている。

スタクリモ・ゴンパにはドゥカンが二ヶ所あって、上のドゥカンは東向550×500cm。入口内側に四天王の壁画、堂内にナルタン版のキャンギュール、中尊は釈迦で、その左右がドルジェチャンとシャーキヤシュリ。中尊の手前にパドマサンバヴァ、観音、チャクナドルジェがあり、左壁に十一面観音像一体が安置されていた。

下のドゥカンには、前室に十万頌般若を納めたパルカン(経函)があり、中尊はパドマサンバヴァ。奥のドゥカン正面には左端から弥勒像、パドマサンバヴァ、ガクワンナムゲー、釈迦、十一面観音等が安置され、壁画も古いものが多い。前室とドゥカンの大きさは同じで800×600cm。

(25) トンデ・ゴンパ (ston sde) (mar pa gliñ)

- a) ゲルックパ b) ガーリ・リンポチュ
- c) 60名 d) 950年前
- e) マルパ(mar pa)



〔調査〕パドン村からワイヤ三本と蔓で出来たつり橋を渡って北東ヘルンナク川を10km程下ると、トンデ村の右(南)山腹に大きなゴンパが建っている。このトンデ・ゴンパはカーギュパの開祖であるマルパ(1012~1097)の創建と云われ、正しい名前を

マルパリンと云う。寺伝によれば、その後、シャークヤサンポと云うトンデ村の人が現在の様に大きくなり、ゲチュエンルドゥブペーサンポ(rggal mtshan klu sgrub dpal bzan po)ラマが文殊の化身であるツォンカパ(tson kha pa 1357~1419ゲールツパの開祖)の宗義を受け継いで今日にいたっていると伝えられる。

このゴンパにもドゥカンが二ヶ所あり、上のドゥカンは南東向。710×670cm。壁画は新しく、33仏や釈迦を中心としたもの。その奥にキャンギュルカン(370×670cm)があり、中央にはツォンカパ等が三体安置され、その左右のパルカンにはナルタン版のキャンギュールが納められている。そのパルカンの右端に四臂の十一面観音、千手観音、ジキジェット、ランチュクスンのヤブユム等が安置されている。又、この堂の西側にもう一つのキャンギュルカン(南東向435×590cm)があり、ラサ版のキャンギュールと手書の十万頌般若等がある。

次に下のドゥカンへ行くと、ここは南西向。700×540cm。正面中央に八臂の十一面観音その左右に蔵外を納めたパルカンがあり、囲りの壁には壁画が所狭しと描かれている。蔵外文献としては密宗道次第(snags rim)、菩提道次第(lam rim)等をはじめとして重要なものが25帙ほど認められた。

(26) ハルダエン・ゴンパ (bar gdan)

- a) カーギュパ b) スタクナ・リンポチュ
- c) 約50人 d) 400年前



〔調査〕 パドゥンから約10km程ルンナク川をさかのぼると川の右岸の大きな岩の上にこのゴンパがある。このゴンパはデワギャムツォ王子が創建なされたと云われている。我々が訪れた時にはリンポチェはサニ・ゴンパのチャワン祭や、スタクリモ・ゴンパのニュンネ (bsñun gnas, smyun gnas 齋戒) 祭の為にラマ達とともに留守で、若いラマが一人留守番をしていた。

ドゥンカンは南東向、830×1170cm。入口に四天王の壁画。堂内中央部の左からドルジェチャン、ガクワンナムゲー、マルメージェー、釈迦、シャーキャウッスン、バドマサンバヴァ、正観音、その前にナーローバ、マルバ、ミラレバ像等が安置されている。その左右にパルカンがあり、ナルタン版のキャンギュルが納められている。右側の壁の前にはチョルテンが四基あり、その壁には四種類の曼荼羅が描かれており、内1つはヤブユムの曼荼羅、他は一尊を五仏がとりまくもの、他は中尊を八仏がとりかこむ曼荼羅である。この中の一つは、パドゥン下の大

きなチョルテンに描かれていた曼荼羅と同系列である。

次にゴンカンに行くと、堂は南東向、670×510cm。クトル祭に使用する種々様々な面が天上の梁に所狭しと掛けてあった。又、壁画は古く、薫香煙で真黒になり、写真撮影は出来なかった。

我々調査隊はザンスカールで初めてテント泊でないゴンパの僧坊の中での夜を明かす機会をこのゴンパで得て、ラマの手厚い持て成しを受けた。

〔27〕 ティルクンサ・ラカン (rtar khun sa)

a) カーギュバ



〔調査〕 サニ村の西山腹にある。ラマ僧は不在。本堂北向、500×400cm。ドゥンカン正面の左側よりミートッパ、釈迦、ガクワンチェリン像。他にチョルテン一基。壁画あり。

〔28〕 シラツェ・ラカン (si la tse)

未調査

〔29〕 アティン・ラカン (a tin)

- a) カーギュバ b) バルドゥンの末寺
c) 1名



〔調査〕 ドゥカンは南東向。500×500cm。中尊は十一面観音。左右にパルカンがあり、十万頌般若が納められていた。そのパルカンの中央に各々パドマサンバヴァと釈迦が安置され、壁には祖師等の壁画あり。チベット暦の5月15日にクトル祭、6月15日にニユンネ祭が催されるとの事であった。

〔30〕 ゾンクル・ゴンバ (rdson khul) (na rohi sgrub phug rdson khul)

- a) カーギュパ b) スタクナ・リンポチュ
c) 20名 d) 990年前



〔調査〕 ペー村が対岸に見える所までストッド川を溯ると左手に谷間があり、ストッド川へと谷間の川が流れ込んでいる。その谷間を4kmほど溯ると崖の下へのこみにゴンバが建てられているのが見える。この谷筋はウマシラ峠(標高5330m)へと繋がり、

その峠を越えてキシトワール・ヒマラヤに達することが出来る。

このゴンバはナーローバが修業なされた重要な修行場所の一つであり、この修行窟にはナーローバの足跡、成就水、剣等がみられる。

下のドゥカン。堂は南東向。750×520cm。中尊は十一面観音、その左右にチョルテン各二基。壁画はなくタンカが掛けられている。

上のドゥカン。堂は南東向。800×510cm。正面左側よりラマ・ノルブ、クンガチュルク、カルマパ、シェーパードルジェ各尊像。更にミラレパとマルバ等のタンカが掛けられている。隣にシムチュン(リンポチュの部屋)があり、多数の金剛仏がある。又、この部屋には象牙で造ったサンバラのヤブユム像と、水晶のチョルテンもあり、秘蔵物の一つである。

ナーローバの修行窟は上のドゥカンの奥から階段を登って行くと狭い洞窟に出合う。南東向。360×350cm。この洞窟の向って左側にナーローバの足跡があると云う。洞内には小さな仏像が安置され、洞からゴンバの屋根に出るとその真上の岩盤にナーローバの剣が刺さっている。この洞窟の入口手前にある部屋にはパルカンがあり、そこには蔵外の伝記等が多数あり、残念なことにはその内容を調査することが出来なかった。又、典籍で蔵内のカンギェル、テンギェルは無かった。

〔31〕 バーカルツェ・ラカン (bha dkar rtse)

未調査

- a) ゲルックパ

ハムリン村の対岸。このゴンバはランドゥンゴンパのラマが管理しているとの事であった。

以上31の見出しの下に約1ヶ月間で調査を終了した。調査箇所29のゴンパ(ラカンも含む)の内、6ヶ所の未調査はあるものの、その未調査の全部が小さなラカンであり、ランドゥン・ゴンパからカルシャ・ゴンパまで及び、ゾンクルからバルダエン・ゴンパまでの行程はそのルート上あますところなくゴンパ調査を終えることが出来たのである。これは約1ヶ月で450km程を徒歩で調査したことになる。

〔参考文献〕

チベット密教壁画

写真・井上隆雄 駸々堂 昭和53年

金剛界曼荼羅について レー周辺寺院の調査報告

松長有慶「密教学研究第10号」

日本密教学会 昭和53年

LADAGS RGYALRABS CHIMED STER
(HISTORY OF LADAKH) in Tibet ;

Yoseb Gergan, S. S. Gergan

New Delhi 1976

An introduction to History, Monasteries,
Castles and Buddhism in Ladakh by
THUPSTAN PALDAN

1976

A History of LADAKH; A. H. FRANCKE
with Critical Introduction and Annotations
by S. S. Gergan & F. M. Hassnain

New Delhi 1977

The Cultural Heritage of Ladakh; Vol I
Snellgrobe & Skorupski

Prajna Press, Boulder 1977

LADĀK A. Cunningham New Delhi 1977

ANTIQUITIES OF INDIAN TIBET;

Vol. I, II A. H. FRANCKE

New Delhi 1972 (Reprint)

BRONZES OF KASHMIR;

P. PAL New Delhi 1975

THE LIFE AND TEACHING OF

NĀROPA; H.V. GUENTHER OXFORD 1963

ザンスカール調査日誌

酒主照之

6/22(晴) [カルギル $\xrightarrow{\text{ジープ } 67\text{km}}$ パニカル]
カルギル(11:20) — ミンジ(11:40) —
ランタン(11:45) — チュンチェ(12:00) —
— サニスコ(12:15) — サングラ(12:20)
— タンボタン(12:25) — ハルナ(12:30)
— サンカルツェ(12:50) — サンクー(昼食
13:10~14:10) — 橋(スル川 14:25) —
— サーラ(14:35) — マンドンブリッジ
(スル川 14:50) — タンプ(14:55) — ブ
ルトックツェ(15:00) — ユージュルタン(15
:30) — マイダ(15:35) — 橋(スル川支流
15:40) — テースル(15:45) — パニカル
(15:50)

カルギルでジープを更に一台調達。パニカルまで
650ルピー。カルギルからパニカルまで67km。
途中、目に入るのは回教寺院だけである。パニカル
では政府の管理するダック・バンガローに宿泊。カ
ルギルで調達したジープは帰った。替りに荷役用の
馬を5頭雇った。1頭につき1日25ルピー。前金
として200ルピー手渡す。馬方2人がつく。パニ
カルの高度(高度計による)3,100m。気温(19
:30)11°C。川の水温5°C。

6/23(晴) [パニカル $\xrightarrow{18\text{km}}$ パルカチ]
パニカル(10:05) — タンゴル(スル川を渡
る 橋10:50) — パルカチ(11:30)……以上
ジープ。 パルカチ(11:50) — 昼食(12:20
~14:20) — シャルサン(14:55~16:10)
— パルカチ(17:00)……以上徒歩。

隊員はスリナガルからのジープを使い、荷役用の
馬がそのあとを追うことになった。シャルサンで隊
員の1人が高度の影響で嘔吐をくりかえす。近くに
テントを張り、隊員2名が後続の馬との連絡をとり
にパルカチに戻る。馬と荷物はずっと遅れていた。
パルカチに着いたのは7時近かった。結局、全員パ
ルカチに引き返した。テント泊が始まった。昼食時
の気温33°C。それでも日蔭にいと肌寒い。

6/24(晴) [パルカチ滞在]
休養日。高所に少しでも慣れるため、付近の丘を
散歩する。この地方では代表的な山であるクン峰が
間近に見える。

6/25(晴) [パルカチ $\xrightarrow{16\text{km}}$ シンモダンサ]
パルカチ(10:00) — テーチャー(昼食12:
50~13:15) — ゲルマトンゴ(15:00) —

シンモダンサ(15:45)

パルカチからシンモダンサまで集落はなかった。ずっと川沿いに続く道は所々に残雪が覆っている。また土砂崩れも数ヶ所見られた。パルカチの先の氷河の見える所ではじめてタルチョーを見た。シンモダンサは兩岸の開けた牧草地で、ここから蚊に悩まされた。

6/26(晴)〔シンモダンサ $\frac{22\text{ km}}{\text{}} \text{ジュルドー}$ 〕

シンモダンサ(8:45)——ジョモトンゲ(9:45)——シャルパ(10:50)——ラタブサ(11:10~45)——昼食(12:20~13:00)——ツォーリーサ(13:30~55)——川の渡渉(14:45~15:05)——オルナ(15:45)——ヨッマジュルドー(16:00)——橋(建設中16:35)——ジュルドー(17:00)

シャルパに石を積み上げたチョルテンが2基。ツォーリーサを少し過ぎたところに簡素なマニ塚があった。ジュルドーは15軒程度の集落で、家々にはタルチョーがはためく。この一帯は川の合流点で広い川原になっている。目指すランドン・ゴンパは川原のはるか彼方に小さく見えている。乗用の馬を4頭雇った。ジュルドーの高度は3,700mを指していた。

6/27(晴)〔ジュルドー $\frac{9\text{ km}}{\text{}} \text{タシトンレ}$ 〕

ジュルドー(9:40)——ランドン・ゴンパ(12:00~16:50)——タシトンレ(キャンプ地 17:30)

ランドンゴルパまで川が幾重にも分岐して流れている。水は非常に冷たい。ゴンパの近くになって、乗用の馬が着いた。馬でゴンパへ。丁度、昼の勤行

中であつた。タシトンレのキャンプ地は集落から少し離れている。タシトンレは15軒の集落である。

6/28(晴)〔タシトンレ $\frac{20\text{ km}}{\text{}} \text{ペンツェラランゴ}$ 〕

タシトンレ(9:30)——橋(9:55)——渡渉(10:00)——サムカシ(昼食12:15~13:50)——橋(14:55)——橋(15:10)——チョルテン(16:00)——ペンツェラランゴ(16:40)

タシトンレのゴンパ付近から、進路を南にとる。サムカシの手前より、長くゆるやかな上りが続き、峠(ペンツェ・ラ)へ至る。サムカシで高度3850m。また、ペンツェラランゴでは4,410mを指していた。峠はほぼ平坦で、チョルテンの付近から、どこが最高所なのか見当がつかない。湖が幾つかあり、道端に見える湖はタツォ(馬湖)、ランツォ(牛湖)と呼ばれている。湖の近くにテントを張った。気温(19:00)9°C。

6/29(薄曇のち晴)〔ペンツェラランゴ $\frac{16\text{ km}}{\text{}} \text{デンドゥンサ}$ 〕

ペンツェラランゴ(9:50)——峠の下り(10:00)——川原(峠を下りきった地点11:30)——フォロキョク(建設中の橋 12:00)——渡渉(12:15)——ボックス(12:40)——渡渉(13:20)——渡渉(13:45)——デンドゥンサ(14:00)

ペンツェラランゴの気温(7:30)5°C。峠から一気に下りにかかる。すぐ右手に大きな氷河が見えてくる。峠を下りきったフォロキョクから平坦な道が続く。キャンプ地のデンドゥンサまで集落はなかった。不思議なことに峠を境にして蚊が姿を見せなくなった。

6/30(曇のち晴)〔デンドゥンサ^{25 km}クシュル〕
デンドゥンサ(7:50) — ギャラドゥ(8:30)
— 橋(建設中 9:45) — オマタンゼ(昼食11
:10~12:45) — チブラ(14:30) — 渡渉
(15:10) — アブラン(15:20) — クシュル
(16:20)

デンドゥンサの気温(6:30)6°C。午前6時と
11時に小雨がぱらつく。ゆるやかに上っていた道
は、オマタンゼを境に下りにかかる。チブラでやっ
と集落に出会った。昨日のタシトトレ以来である。
チブラの集落はドダ川をはさんでアクショの集落と
対峙している。しかし、対岸に渡る橋はない。チブ
ラと次のアブランの集落を合せて、家は30軒ほど。
アブランの集落のはずれに堂宇があった。アブラン
・ラカンである。チブラの近くになって、マニ塚が
めっきり増えてきた。そこには折り文の他に、仏像
・祖師像等を彫った石が見うけられるようになった。

7/1(曇)〔クシュル^{12 km}マンダ〕
クシュル(8:35) — ハミリン(集落10軒。
ゴンパ調査。9:30~10:35) — スキャガム
(19軒。11:00~15) — スキャガム・ゴンパ
調査(11:20~12:20) — 昼食(12:40~13
:20) — レマラ(14軒程。13:30) — レマ
ラ・ラカン調査(13:40~14:30) — マンダ
(15軒。15:00) — マンダ(17:00) — ク
ーテ・ゴンパ調査(17:25~50) — マンダ(18
:10)

行く先々に小さなゴンパ、ラカンが見受けられる
ようになった。集落があれば、かならずとってい
いほどゴンパカラカンがある。小さな集落が、ドダ
川をはさんで点在している。ハミリンの対岸にはバ

ーカルツェの集落(10軒)。レマラの対岸にはレン
ニャン(4軒)、マルツェの集落(7軒)が見える。
マンダのキャンプ地に着いて、これまでの記録の整
理、検討を行った。その後、岩山の中腹にあるクー
テ・ゴンパの調査に向った。夕刻、小雨が降る。

7/2(晴のち曇)〔マンダ^{13 km}トゥンリ〕
マンダ(8:25) — 渡渉(8:50) — ペー
(9:00) — ペー・ゴンパ調査(9:20~11:
05) — 渡渉(12:30~40) — ランタクシャ
(35軒。ゴンパ調査13:00~14:05) — シャ
モリン(5軒。14:30) — トゥンリ(18軒。
14:45) — トゥンリのキャンプ地(15:00)
トゥンリのキャンプ地(17:40) — トゥンリ・
ゴンパ調査(18:05~45) — キャンプ地(19
:05)

日中と夕刻に降雨。ペー・ゴンパは集落の上の高
い所にある。若い僧が堂内を説明してくれた。彼は
カルシャ・ゴンパの僧である。茶とチャパティを出
してくれた。小さな集落の小さなゴンパの方がかえ
って歓待してくれるものである。

7/3(晴)〔トゥンリ^{10 km}ランミ〕
トゥンリ(9:20) — 渡渉(9:30) — トゥラ
ハン(10軒。9:50) — トゥラハン・ゴンパ調査
(10:05~50) — カサル(14軒。12:25) —
テーツァ(8軒。昼食。12:50~13:55) — カ
サル・ゴンパ(14:50~15:40) — テーツェ
リン・ゴンパ調査(16:15~17:25) — ドルヂ
ェゾン・ゴンパ調査(18:00~18:40) — ラン
ミ(19:20)

トゥンリには対岸に渡る橋がある。ドダ川に沿っ

で多くの集落があるが、兩岸を結ぶのはトゥンリの橋だけである。これまで通ってきた道は2、3年先に完成予定の自動車道路である。この道はトゥンリの橋を渡って、ザンスカール最大の町バダンに至る。トゥンリで自動車道と別れて、急に狭くなった道をカルシャ方面に向かった。カサル、テーツェンリン、ドルジェゾンの各ゴンパは道からも、また集落からも相当離れた小高い山の上にあった。このうちカサル・ゴンパは誰も見当らず、調査ができなかった。

7/4(晴) [ラグミ $\frac{4 \text{ km}}{\text{---}}$ カルシャ — ランミ]
ランミのチョモブラン・ラカン調査(9:00~30) — チュクテジャル・ゴンパ調査(10:40~11:50) — カルシャ(集落。12:00) — ロンポー宅(12:15~14:00) — カルシャ・ゴンパ調査(14:20~17:30) — チュクテジャル・ゴンパ付近のチョルテン調査(18:05~50) — ランミ(19:30)

カルシャでは、この一帯での有力者であり、また有識者であるロンポーの案内で、カルシャ・ゴンパとチュクテジャル・ゴンパ付近のチョルテン調査を行った。調査に先立ち、訪問したロンポーの家では歓待された。このとき威力を発揮したのが、ポラロイドカメラである。

7/5(晴) [ランミ $\frac{13 \text{ km}}{\text{---}}$ サニ]
ランミ(8:45) — トゥンリの橋(11:20~40) — サニ(12:20)

サニの集落は約70軒あると聞く。運よく結縁灌頂の儀式にめぐりあわせた。灌頂壇はテントのすぐ近く、川原に設けられていた。石をきれいに敷き詰め、積み上げたものであった。サニはもとより、近

郷の村人が着飾って集まっていた。バダンの南のバルドン・ゴンパのラマがその儀式を行っていた。笛・太鼓等の鳴物と読経が川原に響き渡った。

7/6(晴) [サニ $\frac{9 \text{ km}}{\text{---}}$ バダン]
サニ(13:10) — 橋(13:40) — シトラ(14:10) — バダン(15:25)

午前3時降雨。サニ・ゴンパとカニカ・チョルテンの調査を行い、昼食後バダンに向かった。バダンにはゲストハウスもあったが、予想以上に粗末だった。結局、ハイスクールの校庭にテントを張り、そこを基点として、周辺の調査を行うことになった。

7/7(曇のち晴) [バダン $\frac{2 \text{ km}}{\text{---}}$ ピピティン・ゴンパ — バダン]
バダン(16:00) — ピピティン・ゴンパ調査(16:25~18:20) — バダン

バダンは人口600人で、その6割が回教徒、残りが仏教徒である。近くのオブティという集落とともに、この一帯では数少ない回教徒の住む町である。ピピティン・ゴンパはバダンの近く、小高い丘の上にある。周囲が平坦なこともあって、遠くからでも目につくゴンパである。

7/8(晴) [バダン $\frac{14 \text{ km}}{\text{---}}$ トンデ・ゴンパ — バダン]

バダン(6:05) — 吊橋(6:25) — クミ(集落の下。8:15) — トンデ(集落。9:30) — 昼食(9:45~10:20) — トンデ・ゴンパの調査(11:25~14:00) — 吊橋(18:15~35) — バダン(19:00)

バダンのすぐ近くにある吊橋は、3本のワイヤー

ロープと蔓を編んで作ったもので、歩を進めるたびに前後左右に揺れる。下は濁流である。トンデ・ゴンパは岩山の中腹にあり、急坂を上りつめなければならぬ。ゴンパからの眺望が素晴らしい。

7/9(曇)〔バダン滞在〕

バダン内のゴンパ及びチョルテンの調査。バダンにはゴンパとラカンがある。バダン・ラカンは集落の中であり、ゴンパはスタクリモ・ゴンパといって集落を見下す高台にある。バダン、カルシャー帯は川の合流点で、扇形の平地が広がっている。ゴンパからはカルシャ方面が手にとるように見える。

7/10(曇ときどき小雨)〔バダン $\frac{10}{km}$ バルドゥン・ゴンパ〕

バダン(8:35) — 橋(11:20) — 昼食(11:45~12:30) — バルドゥン・ゴンパ(13:00) — テント、食糧等を背に、われわれだけでバルドゥン・ゴンパとムネ・ゴンパの調査に向かった。日数の関係もあって、ムネの南のブクトル等のゴンパ調査は既に断念している。川に沿って、小道がへつるようになっている。突然、大きな一枚岩の上に立つバルドゥン・ゴンパが目に入った。若い僧が一人、もてなしてくれた。他の多くの僧はサニ・ゴンパへ行っているという。テントを張らずに彼の部屋に泊ることにした。彼と意気投合したわれわれは、少々チャンを飲み過ぎたようである。

7/11(晴)〔バルドゥン・ゴンパ $\frac{10}{km}$ バダン〕

バルドゥン・ゴンパ(7:30) — チョルテン調査 — 橋(10:10~15) — バダン(11:40) —

メンバーの一人が体調をくずし、下痢と嘔吐をく

りかえす。ムネ・ゴンパ行を取り止め、バダンに帰ることにする。途中の橋のところで休息し、二隊員が一足先にバダンまで戻り、迎えの馬を差し向けることにした。全員バダンに帰着したのは午後4時近かった。

7/12(晴)〔バダン滞在〕

バダン内の石仏の調査に時を費す。川に面した大きな岩に仏像が刻まれていた。まれに見るスバラシイ浮彫である。

7/13(曇)〔バダン $\frac{10}{km}$ サニ〕

バダン(12:25) — サニ(集落。15:00) — テルクンサ・ゴンパ(16:35~45) — サニのキャンプ地(17:00)

午前中、時々小雨。バダンで食糧と装備を整える予定だったが、穀類はまだしも、野菜は玉ネギしか手に入らなかった。しかし、これからの帰路、途中で食糧を調達するところはない。バダンにあるもので我慢しなければならない。とにかく、ザンスカールには食糧をはじめ物資が少ない。バダンを立つ前に、スタクリモ・ゴンパに行き、調査が十分でなかったところを補った。ゴンパでは丁度ニュネ(齋戒)の儀礼が行なわれていた。バダン周辺の調査も終わり、あとはゾンクル・ゴンパとその途中のゴンパ、ラカンの調査を残すだけとなった。

7/14(晴のち曇)〔サニ $\frac{13}{km}$ トクタ $\frac{4}{km}$ ゾンクル・ゴンパ — トクタ〕

サニ(6:45) — マルクム(2軒。7:35~8:00) — シャーカル(8軒。8:30~45) — シャーカルコンマ(6軒。9:00) — 渡渉(9:20)

～45) — ドカン(10軒。10:00) — アティン(8軒。10:05) — アティン・ラカン調査(10:20～10:40) — タン(1軒。11:05) — 橋 — トクタ(6軒。昼食11:10～12:00) — ゾンクル・ゴンパ調査(13:35～15:30) — トクタ(16:50)

気温(6:30) -3°C(サニ)。馬方達の意見で、出来るだけ早く出発した。今日のコースに水量の多い川があり、早朝でなければ渡れないと言っている。気温が上ると雪溶け水が増えるからである。馬方達は行き交う旅人とあるいはその土地の者と情報を交換しあう。川はやはり水量が多く、流れも急だった。トクタにテントを張り、谷あいの道をゾンクル・ゴンパに向かった。大きくえぐられた岩の下に三層のゴンパが建っていた。人里はなれたところである。夜、降雨。

7/15(曇のち雨) [トクタ $\frac{22 km}{}$ ペー]

トクタ(7:05) — アティン(7:35) — 渡渉(8:25～9:10) — シャーカルコンマ(9:30) — シャーカル(9:50) — マルクム(10:35) — 昼食(10:45～12:50) — トゥンリの橋(13:00) — シャムリン(13:25～14:40) — ペー(17:15)

気温(6:00) 1°C(トクタ)。これより帰路である。昨日、渡渉に苦労した川は一段と水量を増していた。昨夜の雨が原因らしい。渡渉する場所を探すのに手間どる。トゥンリの橋を渡り、ペーを目指した。ペーの集落近くになって降りだした雨はだんだん強くなり、キャンプ地に着いたときはずぶ濡れだった。ペーの対岸には、けき立ったトクタの集落が見える。橋があれば1日行程節約できるはずであ

る。

7/16(曇) [ペー $\frac{18 km}{}$ アブラン]

ペー(10:00) — 渡渉(10:10) — マンダ(10:25) — レマラ(10:45) — スキャガム(11:30) — 昼食(11:40～12:10) — ハミリン(12:40) — クシュル(13:45) — 渡渉(13:50) — アブラン(14:50)

気温(9:15) 12°C(ペー)。レマラで小雨。往路にくらべて、各河川の水量はめっきり減っていた。未調査だったアブラン・ラカンの近くにテントを張り、調査を行う。

7/17(曇のち晴) [アブラン $\frac{21 km}{}$ デンドゥンサ]

アブラン(9:25) — 渡渉(9:30) — チブラ(9:40) — テブルクルン(昼食。11:15～12:25) — オマタンゼ(12:35) — 橋(建設中13:40) — ギャラドゥ(14:15) — デンドゥンサ(15:10)

気温(8:15) 7°C(アブラン)。ラカンから少し離れたところにテントが張ってあった。そこから読経が聞こえてくる。チョルテンを作るらしく、寄進者が石を運んでいた。チョルテンを立てる地点には、護摩を修した跡があった。テントには僧が2名。カルシャ・ゴンパの僧だった。

7/18(曇のち晴) [デンドゥンサ $\frac{31 km}{}$ シュニザ
(近道をとる)]

デンドゥンサ(8:15) — 橋(8:25) — ボクス(8:35) — フォロキョク(橋。9:50) — 昼食(11:15～12:00) — ペンツェ・ラ(12:20) — ペンツェラランゴ(12:35～13:05)

— 橋 (13:55) — 橋 (14:15) — サムカシ
(15:15) — シュニザ (16:30)

気温 (7:00) 4°C (デンドゥンサ)。デンドゥンサ付近で蚊が出てきたことに気付く。ペンツェ・ラは道を離れてほぼ直登し、一気に下る。サムカシを過ぎたところで一時降雨。疲れているが、適当なキャンプ地がなく、シュニザまで来てしまう。タシトシレまで 5km の地点である。

7/19 (曇) (シュニザ $\frac{14}{km}$ ジュルドー)

シュニザ (8:05) — 渡渉 (8:20) — 渡渉
(9:15~45) — 橋 — ゴンチュン・ラカン調査
(10:05~25) — 昼食 (10:50~11:30) —
ランドン・ゴンバ (11:50~12:50) — 渡渉
(12:00~20) — 渡渉 (12:30) — 渡渉 (12:
:50) — ジュルドー (14:30)

気温 (6:00) — (シュニザ)。朝は非常に寒い。タシトシレの集落から離れて、ゴンジュン・ゴンバがあった。通り道ながら、見落していたのである。ランドン・ゴンバはニュンネの儀礼が終わったところで、村人が集まり、チャンを飲んでいて。ジュルドーの近くで雷雨。昨日会った旅行者の話によれば、ジュルドーまで車が入っていると聞いたが、車はなかった。今日はまだ来ていないという。

7/20 (晴のち雨) (ジュルドー $\frac{22}{km}$ シンモダンサ)

ジュルドー (9:05) — 橋 (9:25) — 昼食
(11:45~12:30) — シャルパ (13:25~40)
— ジョモトンゲ (14:15) — シンモダンサ
(15:05)

車に出会うところまで歩くことになった。シンモ

ダンサの手前で雷雨。風雨が強く、かなり濡れる。一時止んだ雨は再び降り出し、夜まで続いた。

7/21 (曇ときどき雨) (シンモダンサ $\frac{16}{km}$ パルカチ)

シンモダンサ (9:00) — 橋 (9:30) — テ
ーチャー (10:40) — パルカチ (12:30)

途中、道が崩れている所があった。バダン以来、雨の降る日が続いたが、ここ数日は特に天候が悪い。パルカチから少し行ったタンゴルというところで、橋が流されたそうである。2日前だという。車がないわけである。しかし資材運搬用のトラックが毎日その橋の手前まで来ているという情報を得た。

7/22 (雨のち曇) (パルカチ $\frac{85}{km}$ カルギル)

パルカチ (8:35) — 橋 (スル川 10:15) —
橋の流失箇所 (10:20~11:40) — タンゴル
(11:50)……以上徒歩。 タンゴル (13:25)
— パニカル (13:55) — サンクー (15:15~45)
— カルギル (17:30)……以上トラック。

雨の中を出発した。タンゴルでは丸木を渡して、橋の工事の最中だった。1、2時間で通れるようになるという。ここで荷物を整理し、二人の馬方に馬5頭分の支払いを済ませる。出来上がった橋を渡り、ほどなく着いたトラックに便乗した。雨季の交通の便はアテにならない。いつどこで道路の崩壊、橋の流失があるかわからない。結果的には予定より早くカルギルに着いたが、予定通り調査を終えて無事カルギルへ帰り着いたという方が当たっているかもしれない。

レー地域における前回未調査寺院

静 慈 圓

レー調査隊の調査は、ラダック地域におけるチベット仏教文化の調査となっている。具体的にいえば、①アルチ寺院の壁画の写真撮影 ②前回未調査寺院の調査がその仕事である。だが結果としては、①②に加えて ③リキル寺院における最勝護摩供養祭（トプチュ祭と呼ばれる）が加わり、護摩供養の実践を8ミリカメラとスライド写真の両方に収め、又護摩次第も全て持ち帰った。

なお、レー調査隊の今回の調査に関する全容は、チベット仏教文化研究会へ提出の次のものを見られたい。

①『第2回高野山大学チベット仏教文化調査』（1冊）。これにはアルチ寺院壁画の全容「西壁B面」等の壁の名称、または曼荼羅の各尊の位置などを示した。②『測量実測図』（1冊）。これにはアルチ寺院の各堂の測量、または曼荼羅各尊の大きさなどを示した。③『レー調査隊写真巻数別索引』（1冊）。これにはスライド写真各巻1コマずつその箇所を明示した。④スライド整理箱（キャビネット1箱）

レー地域における調査の内、ここでは「前回未調査寺院の調査」について報告したい。「アルチリゾン寺院」「サスポール寺窟院」「タンタック寺院」

「チョムデ寺院」「リゾン寺院」その他である。

アルチリゾン寺院

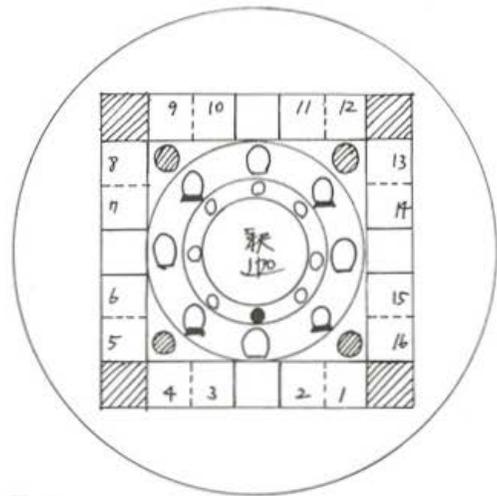
アルチ村にある「アルチ寺院」は、ラダック地方では最も古い寺である。11世紀の初頭に、リンチェンザンポによって建立せられたとの寺伝があり、ラダック地域の観光寺院の1つとして有名である。だがアルチ村には、この寺のほかにもアルチリゾン、アルチリキル、アルチヘミ、チョルテンマンポーの各寺院があり、いずれも各本山の末寺といった性格を保っている。ここで紹介の「アルチリゾン寺院」も、リゾンゴンパの末寺で、アルチ村にあるのでこの名で呼ばれている。アルチ寺院から徒歩で10分程度の山上にある。我々がアルチ村滞在の23日の間で、アルチに来た外国の観光団でこの寺を尋ねた者は、1人もいなかった。それほど一般には知られていない。在住しているラマもいない。諸堂のカギは、堂守の村人が持っている聞いたので、その人を捜したがなかなかわからない。隊員の中の誰か1人が暇を作っては、この寺に足を運んだ。前後8回ほどである。甲斐あって写真撮影に成功した。全体的に言えば、諸堂の中は、諸種の系統の曼荼羅で埋めつくされている。

堂は、中庭に面して鍵型に第一堂（仮称）と第二

堂（仮称）に別れる。第一堂は、三層堂になっており、中央は吹き抜けて三層に達している。第二堂は、1階建てである。特に第一堂は、雨もりの跡や壁面の剝脱がはげしく、新しく書きかえられた部分が目立つ。ただ、第一堂一層と第二堂は、各壁共に元は同じ様式であったと思われる。両堂の比較によって各壁の復元（特に曼荼羅）は可能となろう。第一堂の正面壁は、中央に観音像、左には三十尊が井然と画かれ、右には大小さまざまな尊が雑然と画かれる。これらはいずれも新しい。第二堂の正面壁は、中央に大小の尊、左に上下に曼荼羅が計2つ、右に大きな曼荼羅が1つある。正面壁は、第二堂の形式の方が古い形式であろう。左壁には、第一・第二堂共に曼荼羅が4つ画かれている。右壁には、7つの曼荼羅がある。入口の壁には、中央にマハーカーラを挟み、左右に4つつ計8つの曼荼羅がある。まさに曼荼羅のオンパレードである。

上記中、悪趣清浄軌曼荼羅が二例見られるのでこれを報告したい。第一堂一層の左壁の中央上と、第二堂の左壁の中央上にあるものがそれである。これらの曼荼羅は、アルチ寺院に見られる悪趣清浄曼荼羅と関連している。

次にアルチリゾン寺院の曼荼羅の特徴を述べたい。二例共にこの曼荼羅は、全体が四重の曼荼羅になっている（図1参照）。まず中尊は、黄色、赤袈裟、転法輪印で結跏趺座する釈迦牟尼である。（第一堂の尊には、両脇士がいる）。二重は、八葉の蓮弁で囲まれている。内東方の一葉蓮弁上に一尊のみが画かれ、他は蓮弁だけを画いている。第三重も八葉蓮弁で囲み、各一葉毎に一尊ずつ蓮座に座している諸尊が配せられている（第二堂の方の八尊は、全て袈裟をかけている）。これらの八尊は、悪趣清浄曼荼



（図1）

羅に説く釈迦牟尼を囲む八仏頂尊である。さらに第三重の四隅には、東南隅には白色、西南隅には黄色、西北隅には赤色、東北隅には緑色の尊が画かれている。「内の四供養」であろう。第四重は、その四隅に東南隅より白、黄、赤、緑の尊が画かれている。「外の四供養」であろう。さらに四方四門には、四摂菩薩が配せられている。次に東西南北に、それぞれに四尊ずつ十六尊が画かれる。

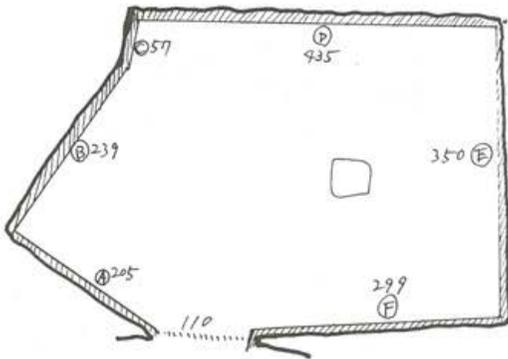
以上によって、アルチリゾン寺院にあるこの二例の曼荼羅は、共に悪趣清浄曼荼羅であることが理解できる。ただ、アルチ寺院の曼荼羅と比較するに、像容の細部ではかなりの違いがみられる。これは今後の研究課題である。

アルチリゾン寺院には、現に理解できるものとして、金剛界曼荼羅も見える。第一堂一層右壁の中央、第二堂右壁の中央は共に同じものであり、金剛界の曼荼羅である。アルチ寺院の第二堂2階の各曼荼羅と比較する必要がある。

サスポール寺窟院

サスポール村は、アルチ村よりジープで30分ほどのところにある。この村の北の山手に洞窟がいく

つか残されている。その中の1つ(図2参照)は特に保存状態がよく、壁画が色彩鮮やかに残っている。その窟院のE壁(仮称)には曼荼羅が3つ見える。ただしこの壁のものは、円形の内に諸尊を配置したものではなく、四角状に画かれている。



(図2)



(写真1)

この内悪趣清浄曼荼羅が二例見えるのでこれを報告しておきたい。一例はE壁の真中に画かれているものであり、中尊釈迦牟尼である。他の一例は左側のものであり、中尊サルバピッドである。各曼荼羅は、九尊が正方形上に大きく画かれる。九尊共に1尊ずつ蓮座に座している。

第一例。釈迦牟尼を中心とする曼荼羅。中尊は、黄色、赤袈裟、転法輪印、獅子座に結跏趺座する釈

迦牟尼である。釈迦牟尼を中心に10尊が小さく画かれている。10尊の内の四隅尊を見れば、東南隅に白色の両手を腰に安ずる尊、西南隅に黄色で両手に鬘を持つ尊、西北隅に赤色で琵琶を持つ尊、東北隅に緑色で舞踊する尊が配置されている。これは嬉・鬘・歌・舞の内の四供養であることが認められる。普通内の四供養は、八仏頂尊の外側の四隅に配されるが、ここでは内側に小さく画かれている、といった特色が見られる。

次に、東方尊は、白色、一面二臂、触地印。南方尊は、青色、一面二臂、施願印。西方尊は、赤色、一面二臂、定印。北方尊は、黒緑色、一面二臂、施無畏印の各尊である。以上四仏頂尊である。さらに東南尊は、白色で右手に日輪を持ち、左手を腰にあげている(威光仏頂如来)。西南尊は、赤黒色で如意宝幢を持つ(宝幢仏頂如来)。西北尊は、青色で右手に剣、左手に経典を持つ(利仏頂如来)。東北尊は、白色で、白傘蓋(剝落している)を持っている(白傘蓋仏頂如来)。以上の八尊は、悪趣清浄曼荼羅に説かれる八仏頂尊である。

以上によって、壁画のこの部分は、釈迦牟尼を中尊とする悪趣清浄曼荼羅であることが理解できる。そしてこの曼荼羅は、またアルチ寺院の第一堂西壁に見られる中尊釈迦牟尼の曼荼羅と一致する。

第二例。サルバピッド(晋明)を中心とする曼荼羅。この曼荼羅も第一例を同じく、九尊が大きく画かれ、各尊は蓮座に座している(写真参照)。中尊は、サルバピッド。白色、四面、定印で獅子座に座している。次に東方尊は、白色、一面二臂(以下各尊全て一面二臂)、定印の尊(一切悪趣王)である。南方尊は、青色、施願印の尊(宝花)である。西方尊は、赤色、転法輪印の尊(釈迦族王)である。北方

尊は、黒緑色、施無畏印の尊（最勝尊）である。いずれも乗り物は画かれていない。以上四仏頂尊である。さらに東南尊は、白色で右手に日輪を持ち、左手を腰にあてている（Locana）。西南尊は、青色で右手に金剛を持つ（Māmakā）。西北尊は、赤色で右手に蓮華を持つ（Pāṇḍarā）。東北尊は、黒緑色で両手にウトバラを持つ（Tārā）。以上四明妃である。

以上によって、壁画のこの部分は、サルバピッドを中尊とする悪趣清淨曼荼羅であることが理解できる。そしてこの曼荼羅は、またアルチ寺院の第一堂西壁に見られる中尊サルバピッドの曼荼羅とまたよく一致している。

以上の例示によって、アルチリゾン寺院、サスゴール寺窟院の壁画は、アルチ寺院と同じ系列に属している、といえるのである。

タンタック寺院

タンタック（タクチ）寺院、チョムデ（チデー）寺院は、中国との未確認国境地域にあるため、通常これらの寺を尋ねることはできない。もちろん観光寺院ではない。今回偶然にも調査の機を得たので、これを報告したい。タンタック寺院は、有名なラダック地域の東端の寺ヘミス寺院より、さらに東へ20キロほどである（途中左側の山上にチョムデ寺院が美しく見える）。道路は全くひどいガタガタ道である。ラダック地域の唯一のニンマ派の寺である。僧の数は五五人と聞いたが、尋ねた時は留守僧三人がいた。ヘッドラマは常住していない。

以下に示す記号で、①②③……は「壁画」、①②③……は、「像」を表わす。

〈ツォカン〉（図3参照）。壁画は全て新しい。左壁。窓が3つある。むかって左より。①祖師像4体。②③④は共に忿怒尊1体づつ。窓の上側には左

より一列に15尊が小さく画かれる。大部分祖師像である。正面壁。大小20尊あり。すなわち

⑥ saṅs rgyas gñis pa gu ru padma hbyun
 ⑨ bskal bjañ mam ḥdren bshi pa Śākyahi rgyal
 ⑫ ミロク ⑮ rgyal bañi rgyal tshabs chen po
 ma pham pa ⑰ sprul pañi gten chen grig
 ḥdsin rgod ltem mtshan の尊を大きく書き、他の祖師像を小さく画く。ただし④⑤は共に忿怒尊である。右壁。①観音像。②パドマサンバヴァ像。③ドルジェーバクモ像。①の壁には忿怒尊が8尊ある。入口壁。①忿怒尊8尊を画く。②入口上に2尊あり。③中央に大きな忿怒尊。左右に2尊ずつ4尊あり。

〈ハカン〉（図4参照）岩をくり貫いた洞窟である。正面外側壁①②には左右に四天王を画く。左壁。5体の尊があるが、剝落激しく黒ずんで見えず。正面壁。①イダム像。②厨子の中に仏陀像13体あり。③パドマサンバヴァ像。④ダクヘッドラマ。⑤観音像。右壁。5体の尊があるが黒ずんで見えず。

〈カンギユールハカシ〉（図5参照）左壁。ヤブユムが4体大きく画かれている。①ブルワ。③金剛薩埵ヤブユム。④ナムナンヤブユム。これら4尊の間に小さな尊が数多く画かれる。すなわち左側には忿怒尊、右側には諸菩薩、下段にはヤブユムが見られる。正面壁。ナルタン版ヤングール101帙。中央に三体の像がある。①Tsh dpag med ②śū kya thub pa ③che chog he ru ka 右壁。ヤブユム②③④が3体大きく画かれる。①は菩薩（不明）。この4尊を中心に、忿怒尊、諸菩薩、ヤブユムが適宜に配されている。入口壁。左右にヤブユムが大きく画かれ、中央上には忿怒2尊が画かれている。なおこの建物には明り窓の2階

があり。三方に36尊(一方は二段で12尊)が見える。他に、お堂1つ〈ブンラカン〉があり、ブン16帙。キューブン33帙。リンチェンスンブン5帙が所蔵されている。

チョムデ寺院

山すその村落よりじぐざぐ道を20分ほど登る。大寺である。多くの堂を有する中次の2堂を調査することができた。

〈ツォカン〉(図6参照)。大堂である。左壁。①②共に釈迦牟尼、転法輪印。この2尊を挟んで壁全体に千体仏が画かれている。正面壁。左右に曼荼羅AⓐBが画かれる。その中央①に両脇士を従えた触地印の釈迦牟尼を画く。その他の空間は全て千体仏で埋められる。壁画前に租師像2体、④タクツァンリンポチェー ⑤シャモナタリンポチェーあり。その右にチョルテン⑥がある。右壁。①②共に釈迦牟尼、転法輪印。この2尊を挟んで壁全体に千体仏が画かれている。入口壁。①②(入口上) ③共に釈迦如来、転法輪印である。各尊の間は千体仏で埋められる。

〈グルラカン〉(図7参照)。三方の壁には壁画なし。中央に9体が安置されている。①パドマサンバヴァ。②釈迦牟尼。③グルニマオゼル。④グタク。⑤シンドンマ。⑥ヤブユム。⑦blo ldan mchogs stes ⑧⑨観音。

「未調査寺院」の調査としては、以上に示した寺院の他に、以下の如き諸寺院の各部分の写真撮影を行なった。写真を撮影したのは、前回尋ねることができなかった寺院はもちろんであるが、前回尋ねた寺院で、取り残しのある部分の箇所を今回は補った。与られた紙面の関係で壁面を逐次示すことはできないので、次に大略を示す。

リゾン寺院。この寺の壁画は比較的新しい。

〈ハカン〉屋上には、護摩壇が2つ放置されている。〈ツォカン〉には、壁画と共に多くの尊像がある。またラサ版カンギュール107帙が収められている。他にブン、パルシンがある。〈ドゥカン〉には、壁画と共に多くの租師像を収める。

スピトク寺院。〈ツォカン〉1層・2層の壁画は共に最近画かれたものである。2層の壁には、現在存命のクショバクラリンポチェーの画や背広を着た信者を画いている。尋ねた寺院の中では一番最近の壁画である。ただチベットでは「十象図」なる噺がある。これは自己の本心を見出し、さとりをいたるまでの順序を噺によって示したものである。普通は、本心を牛に喩え、十段階に図示するので、「十牛図」という。チベットでは牛が象に画かれる、つまり「十象図」である。この図は版木にされ刷られたものは多い。今は〈ツォカン〉入口外側の右壁にそれが画かれている。

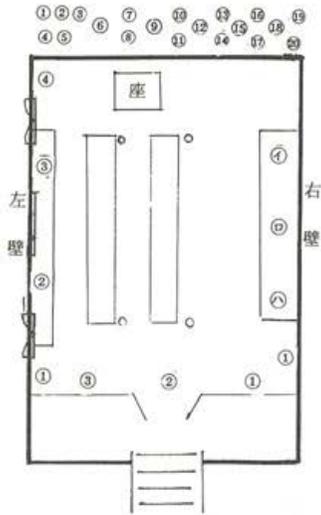
また十段階の過程を袈裟にたとえたものがある。これはスピトク寺院〈ツォカン〉入口外側壁左側。リキル寺院〈ハカン〉入口壁。サンカル寺院〈ツォカン〉2層に画かれている。いずれも撮影を終えた。

サブ一寺院。〈ツォカン〉の1層・2層を撮影。壁画は新しい。また多くの尊像を有する。

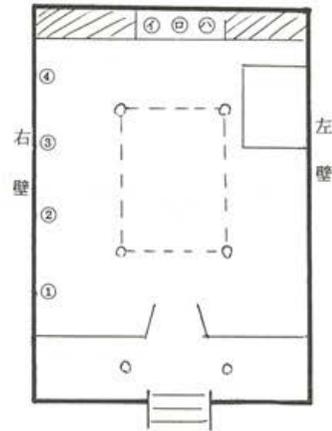
ヘミス寺院。外庭の84成就者を撮影。

サスポール寺院。壁画と像を撮影。

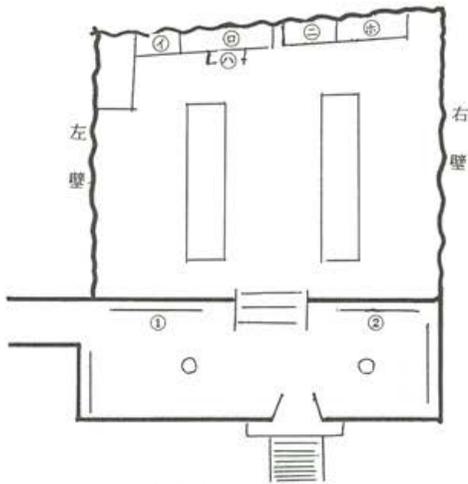
以上をもって前回未調査寺院の調査報告とした。



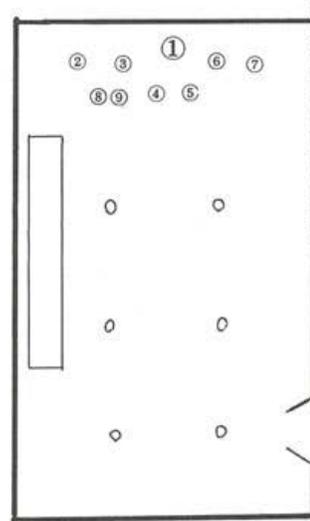
(図3) タンタック寺院(ツォカン)



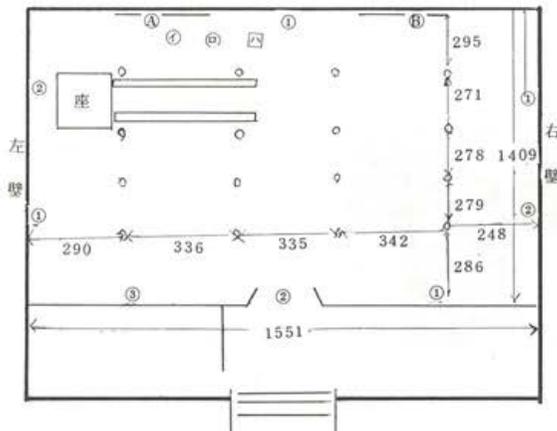
(図5) タンタック寺院(カンギュールハカン)



(図4) タンタック寺院(ハカン)



(図7) チョムデ寺院(グルラカン)



(図6) チョムデ寺院(ツォカン)

リキル寺の息災護摩について

塚本佳道

仏教がバラモン教の儀礼を大幅に摂取して、供養法・観仏法・結界作壇法の形式が確立し、護頂の儀式が入ったのはクシャーナ朝時代という。つづいてグプタ朝時代には、バラモン教の復興につれて、密教でも精緻な理論と修法体系が構成され整備されて密教儀礼を説かれるに到った。その中でも特に護摩の儀軌は、無上瑜伽密教の実践儀礼を理解するにおいて、大きな比重を持つものであろう。^①そして今日チベット圏(内)の地方には、今もなお根強く護摩等の密教儀礼が行なわれるのである。

さて今回、護摩修法(写真1)が行なわれたのは、リキル寺^②(ゲルー派)で、ちょうど最勝供養(sgrud mchod)祭^③の期間内に修法されたものである。初めにその最勝供養祭の日程^④と次第を示し、その中で修



(写真1) リキル寺護摩供養

法された息災護摩法について特に論じたい。

1. リキル寺の最勝供養祭の概要 (1978年7月20日~7月29日)

<日時>	<次第>	<場所>	<時間>
7-20	Sarvavid(kun rig)の最勝供養		
l	次 Kun rig gi bdag bskyed	集 会 堂	AM 8~11
7-22	mdun bskyed		
次	Kun rig gi bum bskyed	集 会 堂	AM 11~12
次	phyi rol mchod pa	集 会 堂 入 口	PM
		及 び 堂 内	12~12:30
次	Kun rig gi dbaṅ	集 会 堂	PM 2~5
7-23	Yamaṅtaka(hjigs byed)		
l	の最勝供養		
7-24	次 hjigs byed kyi bdag bskyed	集 会 堂	AM 8~11
	mdun bskyed		
次	hjigs byed kyi bum bskyed	集 会 堂	AM 11~12
次	phyi rol mchod pa	集 会 堂	PM
		及 び 入 口	12~12:30
次	hjigs byed kyi dbaṅ	集 会 堂	PM 2~5
7-25	次 hjigs byed kyi bdag bskyed	集 会 堂	AM
	mdun bskyed bum bskyed		8~10:45
次	phyi rol mchod pa	集 会 堂 入 口	AM 10:45
		及 び 堂 内	~11:30
次	shi bu abyin sreg.(息災護摩)	中 庭	PM 12~1
次	hjigs byed kyi dbaṅ	集 会 堂	PM 2~5
7-26	Guhyasamaja (gsaṅ ḥdus)		
l	の最勝供養		
7-28	次 gsaṅ ḥdus kyi bdag bskyed	集 会 堂	AM 8~11
	mdun bskyed		
次	gsaṅ ḥdus kyi bum bskyed	集 会 堂	AM 11~12
次	phyi rol mchod pa	集 会 堂 入 口	PM
		及 び 堂 内	12~12:30
次	gsaṅ ḥdus kyi dbaṅ	集 会 堂	PM 2~5
7-29	次 hjigs byed kyi bdag bskyed	集 会 堂	AM 8~10
	mdun bskyed		
次	btan rag bskan gso.	集 会 堂	AM 10~12

以上10日間に及ぶ供養祭は、大きく分けると四

段階になる。すなわち、普明^{Sarvavid}(7.20~7.22の3日間)の最勝供養、ヤマンタカ^{Yamantaka}(7.23~7.25の3日間)の最勝供養(この第3日目・7月25日に息災護摩が修される。)、秘密集会^{Guhyasamaja}(7.26~7.28の3日間)の最勝供養、そして最終日(7.29)にすべての供養(法会)を無事に終え、その感謝の気持ちをいいて観想する^{btan rag bskan gso}ですべての供養が終る。

以上の四段階であるが、その内容に関しては別の機会に譲る。ただこの供養は毎年、今頃の時期(6月~7月)に修されており、去年は一週間行い、その中で護摩修法は息災と増益の二種を修したとの事である。⑤またリキル寺では、一年の間に四つの大きな供養祭が、盛大にかつ厳粛に修法される。それはツォンカバの誕生祭、クトル(dgu gtor)祭⁷、パンチェンラマの死を慎み供養する法会⁸、そして今回修法された最勝供養祭の四つである。

ところで今回は、実際にリキル寺で使用される護摩儀軌を収集することができたので、そのリストを紹介すると、次の四種が存在する。

2. リキル寺に存在する護摩儀軌

① dpal rdo rje h̄jigs byed kyī shī rgyas kyī sbyin sreg gi nag ḥdon
 ≪吉祥金剛怖畏(ヤマンタカ)の息災・増益護摩の述説≫

② dpal rdo rje h̄jigs byed kyī shī rgyas dban gi sbyin sreg dan ḡshin pohi sbyan chog
 ≪吉祥金剛怖畏の息災・増益・敬愛・降状(調状)護摩と死者の清めの儀軌≫

③ rdo rje sgra dbyanḡs glin gi shul ḥdon
 dpal rdo rje h̄jigs byed chen pohi sgo
 nas dban gi sbyin sreg bya tshul

≪金剛タンリン寺⁹の読誦、吉祥大金剛怖畏について自在の護摩をなす方法≫

④ dpal rdo rje h̄jigs byed kyī shī bahi sbyin sreg bya tshul kyī cho gu

≪吉祥金剛怖畏の息災護摩をなす方法の儀軌≫

以上の四種類であるが、共通している点はいずれも吉祥金剛怖畏(ヤマンタカ)を主尊とする護摩儀軌である。これらは、すべてチベット人によって書かれた蔵外のものである。また、いずれも比較的新しいもので200~300年前のものとも推測される。

さて、息災護摩修法の実際の内容を儀軌(特に①の儀軌を中心)に添って論じたい。まず儀軌には大きく三つの修行(供養)段階が見られる。前行(前供養)と正行(本供養)と後行(後供養)である。「前行」とは、行者の本尊の修行(yogu)を最高に修習して、世俗(kun rdzob)のために供養し清めをなす行である。チベットを翻訳すれば、かつ土地の害悪すべてを行者自身によって摧破して、空そのものによって修習し、自分自身の勝義者(don dam pa)の清めをなす行のこと、となる。さらにまた、護摩壇をつくりそこに曼荼羅を描いたり、護摩修法に使う資具等を準備する段階でもある。「正行」とは、実際に資具等を入火し供養する行で、火天段・本尊段・諸尊段の三段法が用いられる。この後に修法されるのが、「後行」で、招請した火天等を還送する段階等であり、この次第をもってすべて終る。

以上の如く護摩は、三つの修行(供養)段階で構成されている。本稿では、原稿の枚数に制限があるので、前行(前供養)の部分に留めて解説し、報告とする。儀軌では、初めに日時の設定が示されている。

3. 前行（前供養）の日時

「前行は、四季の最初の月の満月になってくる最初の日等の朝の間である。」と説かれる。すなわち、チベット暦（旧暦）の四季とは、春（2月・3月・4月）、夏（5月・6月・7月）、秋（8月・9月・10月）、冬（11月・12月・1月）を示す。その最初の月であるから、春の2月、夏の5月、秋の8月、冬の11月になる。また、その満月になってくる最初の日とは、新月で、しかも朝の間（午前中）であると説明している。ところでリキル寺においては、先に日程を示したように、修法を始めた日が7月20日で、ちょうど7月とは旧暦で夏の5月にあたり儀軌に即している。しかし20日は、旧暦の上では満月であり、日の割り出しからすれば儀軌とは異なる。これは「護摩修法」が、本来は独立して行なわれるべきものであるのに、今は年間行事の一つである最勝供養祭という一連の法会の中に取り入れられ、供養祭の次第の中に組み入れられているためでもあろう。ただ、チベットでは満月の日は、常に何事にも好日の日とされている。この点からして、今回の「護摩修法」も、日時を選択としては配慮されたものといえよう。

4. 作壇法（曼荼羅の描き方）

次に、護摩壇を作るに際して、まず寸法（法量）が規定される。すなわち、寸法の単位には、次の三種類の方法が用いられる。指（sor）、磔手（^{ちやくしゅ}mtho gan）、肘（^{ちゆう}khru gan）の三つの単位ですべてまかなわれる。「指」とは、指一本の寸法で、四本で四指（sorgshi）となり、四指を通常計るめやすにする。ところが従来四指といえば指を伸ばした状態の四本の指先の寸法だけとしか知られていなかった。私がリキル寺のヘッドラマ（カチェン・ダルマバドラ）¹⁰師に授かった方法は、四指の寸法

に三通りあった。すなわち、小サイズ・中サイズ・大サイズの三種である。小サイズは、指先のサイズ（寸法）で従来知られていた方法である。今回もこの方法が用いられた。中サイズとは、指先の第2関節であり、大サイズは、指先の第3関節をいう。中サイズ・大サイズは、それぞれより大きな曼荼羅を描く時に使用されるが、一般的には小サイズが用いられる。「磔手」とは、従来手の平を広げて親指の先から中指の先までの寸法とされていたが、これも二通りある。それは、従来の親指の先から中指の先までの寸法と親指の先から人さし指の先の寸法の2種である。通常前者の方法が用いられる。また「肘」とは、一説にはひじから手のくりぶしままでとされている。だがこれにも二通りある。一つは、キャントッ（^{rykan}khru）といい、ひじから手の平を直すぐ伸ばした中指の先までの寸法である。他方は、クムトッ（^{skum}khru）といい、ひじから手をにぎりしめたその頂までの寸法である。通常キャントッの方法が用いられる。

以上の三種類の法量によって、作られた護摩壇とその炉に描かれた曼荼羅の法量の寸法を掲載した（写真2と図1を参照）。



（写真2）護摩壇に息災の曼荼羅を画いている所

次に、この法量に基づいて画かれる曼荼羅を説明

する。護摩壇の作壇法と曼荼羅を描く順序が次のように儀軌に説かれる。「まず土地を吉祥にして、四角(gru bshi)の壇をでこぼこのないように平らに作り、中央に円形の炉を幅一肘、高さ半肘の寸法に作る。次に墨打ち(btab thig)をし、次で円を描き、カケル(kha khyer)に金剛の瓔珞(phren ba)と円輪(hkhor lo)を描き、外の四すみには、半月の上に三分の三結金剛を描き、炉の中央に白い八葉蓮華、その中心(脐)に五結金剛(長さ八指・高さ一指)を描く。次に染めた白い粉(rdul tshon)や白い土そのもので色彩をつける。」とある。これは今回実際に作られた壇とも合致する。ただ色彩は白と赤の土の二種が使用され、白い土は金剛や八葉蓮華の主要部分に使い、赤い土は円線や外わくの線等のわくどりに使用されていた。息災護摩の場合には、白い土が基調となる。以上のように曼荼羅の炉が描かれる。

5. 壇木と牛の糞の配布

次に護摩をたく燃料には、壇木(bud 'shin)と牛の糞(bahi lei ba)が使われる。これは共に護摩壇の曼荼羅の周囲の上に置かれる。(写真3)のように、炉の周囲に牛の糞を積み上げて白いものを油彩し、壇木を図のように準備している。ところが儀軌



(写真3) 護摩壇準備完了(壇木と牛の糞配布)

では次のように説明する。「炉の周囲には乾燥して虫がいなく、しかも香りのよい壇木を円形に積み上げ、白い土を以って油彩(しっくい)して、それからその外回りに牛の糞を囲ぐらし、白い甘露(amṛta)を有する白い香料(dri)をふりかけ、白い花びら(sil ma)を散ずる。」とある。儀軌では、燃料はあくまでも壇木を主として使用し、牛の糞はその補助的な燃料として使用される。リキル寺での護摩の実際は、牛の糞を主とし、壇木は、少々加え点火の時に使用されただけである。これは現実問題として、ラタに木が不足しており、使用したくても使用出来ないという地域的な条件によるものであろう。本来は木を用い糞はその補助となる。また、高野山大学外人講師のニチャン・リンポチェ師の話では、「ラサでは、牛の糞よりもより清浄なヤクの糞が通常使用され、或は木のみによってその燃料となす場合も多くある。」とのことである。

6. 供養台の設置



(写真4) 供養台

護摩壇の準備が終わると、次に供養台 (mchod stegs), 資具台 (rdzas stegs), 礼盤, 脇机等を設置する。まず初めに供養台 (写真4) に置かれているものは、乳 (homa) を入れた器にトゥルワ草を浸しているものと米 (hbras chan) と三器 (bzed shal) に入っている乳だけであった。ところが儀軌では少し異なる。すなわち、「四水 (chu bshi), 三器 (bzed shal), 酒水に使う吉祥草の把, 清浄な水 (bsan chu), 水瓶 (las bum) を左方の manji 台に置く。」とある。リキル寺では、manji 台としてテーブルを使用した。(写真③)。ところが manji 台は、そのような簡単なものではない。「大変りっぱなもので、インドでも見た事がなく、ラタにもたぶんないでしょう。」とは、ニチャン・リンポチェ師の話である。それほどりっぱな台だけに、今回も確認できなかった。また清浄な水 (bsan chu) を成就する方法を儀軌に次のように説明している。「きれいな器 (snod) にきれいな水を入れ、そこにサフラン花 (dri bzan 香りのよい花) を入れておき、それを香炉の煙 (sbos) によっていぶしつつ、hrī, s'tī, の真言や、khangha dhrika の真言108度、或は7度誦して加持する。」と説かれる。今回は設置されなかった。この供養台は、宗派によっても、儀軌によっ



(写真5) 資具台

てもかなりの違いが見られるという。

7. 資具台の設置

次に、資具台 (写真5) の設置方法についても儀軌で説明されている。リキル寺の護摩では、その設置方法が全く儀軌の通りであり、資具もその通りに準備されていた。すなわち、供養の順序は左から右になされる。それは、左端の①乳木 (Yam 'shin) から順次右方に向けて、③の特殊な供物 (khyed par rdzas) まで二列に順序よく並べられる。ただ大きな器に入れられた同様の資具は、置き場に困ったのであろうか、台の右方や台の下に安置されていた。ところで、その資具の種類は13種 (トルマを入れれば14種) ある。次の如くである。

①乳木 (Yam 'shin)。儀軌では「一磔手の寸法で、白いベルブ (bal bu) など乳を有している木を用う。」となっている。儀軌の如くである。

②酥油 (mar khu)。準備している時は支具台の上に置いていたが、修法が始まるとすぐ護摩壇の上に移し変えられた。儀軌の順序としては、②番目となり①乳木と③胡麻の間に本来は置かれるはずである。また酥油を shun mar とも言い、mar khu は一般的な用語で、經典 (仏教) 用語としては、shun mar を用いるのがよい。

③胡麻 (tila)。実際は黒い胡麻を使用したがる儀軌では白い胡麻を使用するとなっている。

④トゥルワ (dur ba) 草。サンスクリット語の音訳で実際は禾本科植物の一種を使用している。

⑤米 (hbras)。もみ殻をとった米 (hbras ma grugs pa) と儀軌で説明され、その如くである。

⑥フスマ (sho zan)。禾本科植物で麦類のそぎつな粉である。

⑦吉祥草 (ku 'sha)。サンスクリット語の音訳で

ある。

⑧白芥子(yuñs dkar)。カラシナの種子。

⑨裸麦(soba)。大麦の一種である。

⑩大麦(nas)。

⑪豆子(sran ma)。

⑫小麦(gro)

⑬特殊なもの(khyed par rdzas)。実際は炒米(焼米)を使用している。

そして儀軌では、「その中に⑭供物(gtor ma)を並べる。」とあり、写真で見る限り左側の中央に4つ置かれている。

以上の13種(又は14種)を説いているが、①～⑬までの資具を上側と下側に同じように二列に並べてある。これは上側が出世間者に供養するもので下側が世間者に供養するものである。また、以上のように用意がなされると、すべての資具は、甘露(amṛta)のつぶ(ril bu)を入れた灑水器(naṅ mchod)によって、注酒水され清められる。

8. 礼盤と脇机の設置

次に、阿闍梨が座す礼盤(蓮華座)と、法具等を安置する脇机の設置がなされる。

まず脇机(写真6)には、水瓶(las bum)と酒水に使用される灑水器(naṅ mchod)、そして五銚金剛(rdo rje)(ただし写真では見えないが鈴とともに置かれる。)と鈴(dril bu)がある。その他、白い布(カタ)と米もある。儀軌では、金剛と鈴の意味を次のように解釈している。「金剛は方便(thu-bs)そのものであり、五智(Ye 'shes lña)の本性である。また鈴は般若(shes rab)そのものであって、空そのものの法(dharma)の音を鳴らす。両方とも勝義(don dam)の菩提心(byañ chub sems)そのものである。」と説かれる。

その他、儀軌では次のように説かれ、実際と対応する。すなわち、「火をつける用具(me gso bahi chas)と炉のカケル(kha khyer)に置く吉祥草も準備をなす。また、阿闍梨と炉の間にヒマラヤのような火を防ぐ壁(me yol)にbaṃ(𑖀)文字を書



(写真6) 礼盤(右)と脇机(左)

脇机の上にあるのは手前から上に白い布(カタ)・鈴・灑水器・米・水瓶である。礼盤の上に置かれているのは、阿闍梨の身につける荘身具である。

く。」となる。ただ相違する点は、図では阿闍梨の左側に法具を置く脇机が設置されているが、儀軌では、「自分の手前(正面)に置く。」となり少々異なる。

次に、阿闍梨の座す礼盤での座し方の作法について、次のように説明している。「礼盤は、やわらかくて楽な座で、あまり高くないようにして、座に白い八葉蓮華のみ描く。座り方は、両足を少し伸ばして両足をくっつけて蓮華の座り方によって顔を東方に向けて座る(つまり、椅子に座った普通の座り方のことである)。さらに、よけいな言葉を言わず、

金剛と鈴を加持することから始めて、護摩を終るまで手に金剛と鈴を離さず行を行なうべし。」と説かれる。

9. 総括

以上で前行(前供養)の部分を終え、次に正行(本供養)に入るが、今回の報告は前行のみにとどめたものであるが、ただその前行の最後に、先にも述べたように今回の護摩修法は、最勝供養祭の最中に行なわれたもので、最勝供養でも護摩修法ができると儀軌でも説明している部分があるので最後にそれを紹介する。すなわち、「そのように(今まで説いたように)、護摩儀軌の支分(Yan lag)など完全になす場合に、最勝供養や他の供養の時に於てもできる。また前に成就する方法(前供養)を修習した儀軌の相続(rgyun)ならばそれでもできるが、そうでないならば、灑水器(nan mchod)を加持する所から始めて、最後までダクケ(bdag bskyed)の行を完全に修習して護摩の修法を行うべし。」と説かれ、今回の最勝供養祭の中で修法された護摩供養は、ほぼ儀軌どおりに修されたことが確認出来る。

終りに、今回の護摩修法の調査にあたり、リキル寺のヘッドラマ、カチュン・ダルマパドラ師から、四種護摩(息災・増益・調伏・敬愛)の曼荼羅図(図1~4)の描き方やその作法等を伝授していただいた。また私のよき友人であり、アドヴァイザーとなっていたリキル寺のラマ僧、G.N.ギャツォ氏からは、護摩修法の依頼や護摩儀軌の収集等にたいして、惜しみない助力を得た。また、本学の外人講師ニチュン・リンポチュ師に多大な御教授を頂いた。共にあわせて深く御礼申し上げ私の報告を終りたい。

合掌

注

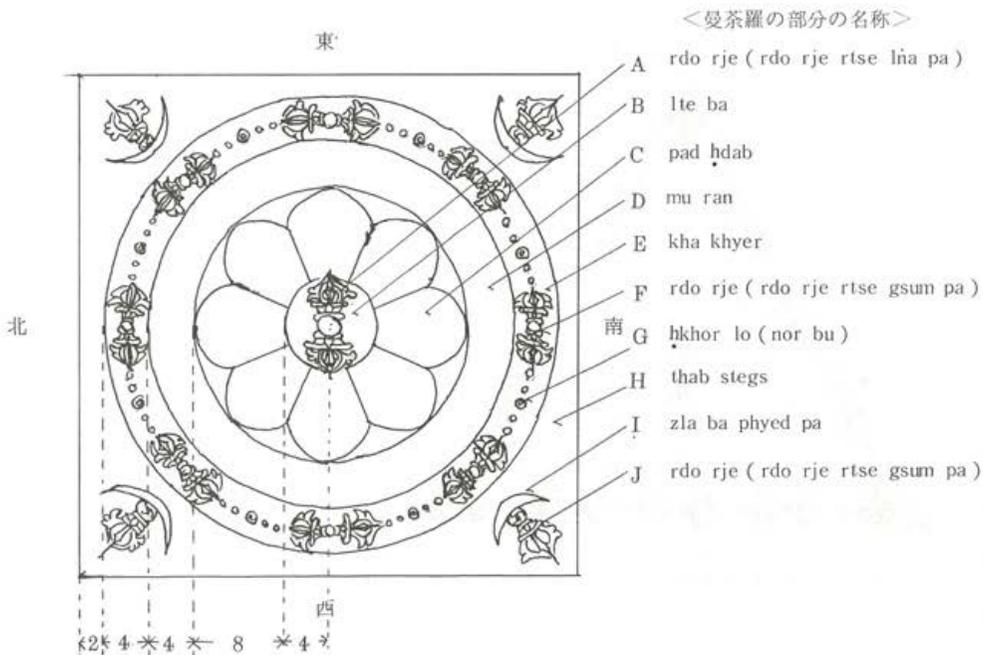
- (1) 護摩の研究については、頼富本宏「無上瑜伽密教の実践儀礼」(日本仏教学会年報第43号)と、宮坂宥勝「護摩儀軌」(インド古典研究Ⅱ)を参照されたい。
- (2) 本名は、カテンタルグリン(dkañ ldan dar rgyas glin)寺といい、レーから西5.2kmの所に位置する。ガーリ(mñah ris)リンポチュ(現在のドライラマの5人兄弟の一番末の弟)が存職するが、現在ダラムサーラに住み実質的な実務は、ロサンドゥンユ(blo bzan don yod)60才がなす。また、ラタ(la dvags)地方では、リキルゴンパ(klu hkyil dgon pa)と呼ばれているためラタ発音で記したが、ラサ発音では、ルキルゴンパとなる。
- (3) 「トブチュ」とは、一週間以上の大きな供養祭において名付けられる名称で、この上なくもっとも勝れた供養という意味で、「最勝供養」と仮に訳をつけた。
- (4) 日程の日時と次第は口答によって聞いたものが主で、実際に行って確めた日は、7月25、26、28、29日の4日間で、その外の日は時間が多少ずれているかもしれない。
- (5) 昨年の第一回報告書(P18)で越智淳仁講師がリキル寺の護摩壇二種(息災と増益)の写真を掲載されているのがそうである。また、来年(1979年)は、再び息災と増益の護摩を、1980年は、敬愛護摩を、1981年は、調伏(降伏)護摩を修法する予定。ただ調伏護摩は大変危険をとまなうので非常に困難であるとも、ラマ達はいう。
- (6) ガゲンガチュ(dgañ linn ina mchod)と言わ

れる。ツォンカバの10月25日の誕生日の一日のみ修されるが、夜中じゅうラタの町にはライトがつけられ、その誕生を祝う祭である。

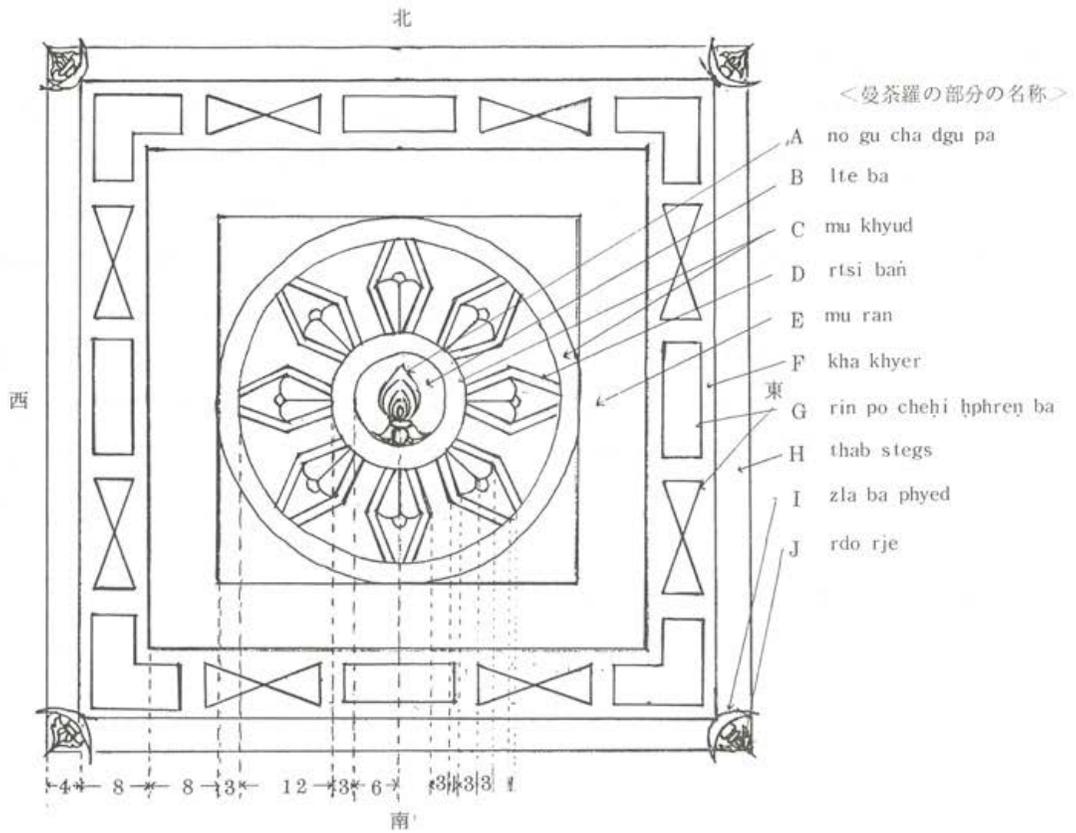
- (7) クトル祭とは、クトル(dgu gtor)と称するお供物を捧げる大祭りで、12月22日~12月31日まで10日間の法会があり、また、その期間中12月27・28・29日の3日間はダンス(仮面舞踏)があり、この日が本供養となる。また、祭りの始まる前一週間はダンスの練習をすると、ラマ達はいう。
- (8) パンチェンラマの命日にあたる4月13日を含め、前後3日間、慎しみやかに厳肅される。

また、パンチェンチュゲンゴンゾク(pan chen chos rgyan dgon's rdzogs)とも言われる。

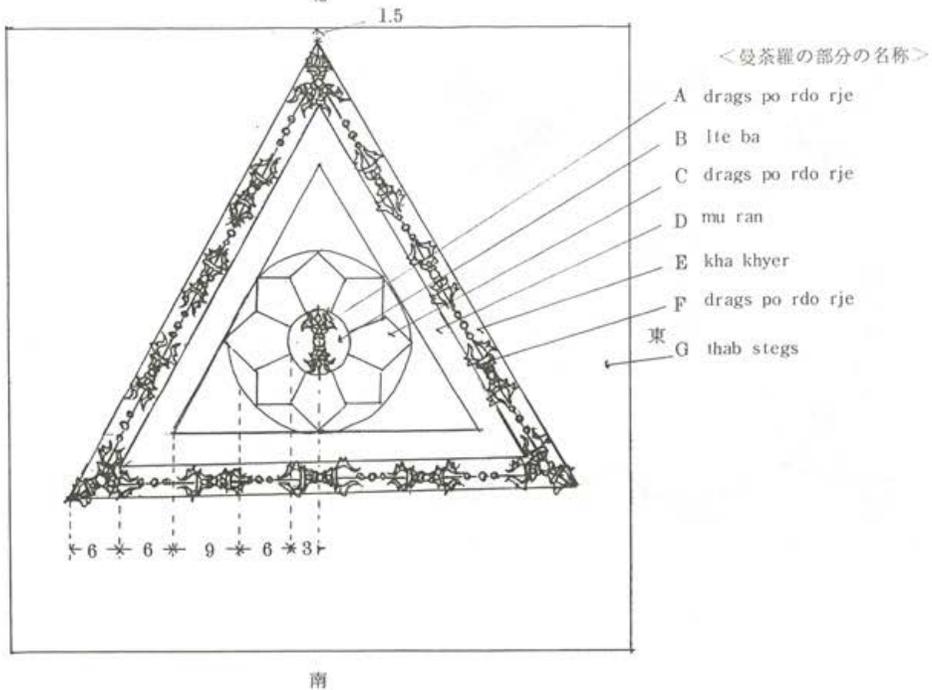
- (9) タヤンリン寺とは、ラサの近くにあるニンマ派の寺で、この寺で修されていた儀軌である。
- (10) カチユン・ダルマパドラ(dkañ chen dharma bhadra)⁶⁹才師は、シガツェのタシルンボ寺のパンチェンラマのもとで長く修行されていた学僧である。なかなかの博学の人で普明(kun rig)や秘密集会(gsañ hdus)等の経典を自分で書き出版している。また寺の中に学校を建て、子供達や弟子の教育に精進されている。



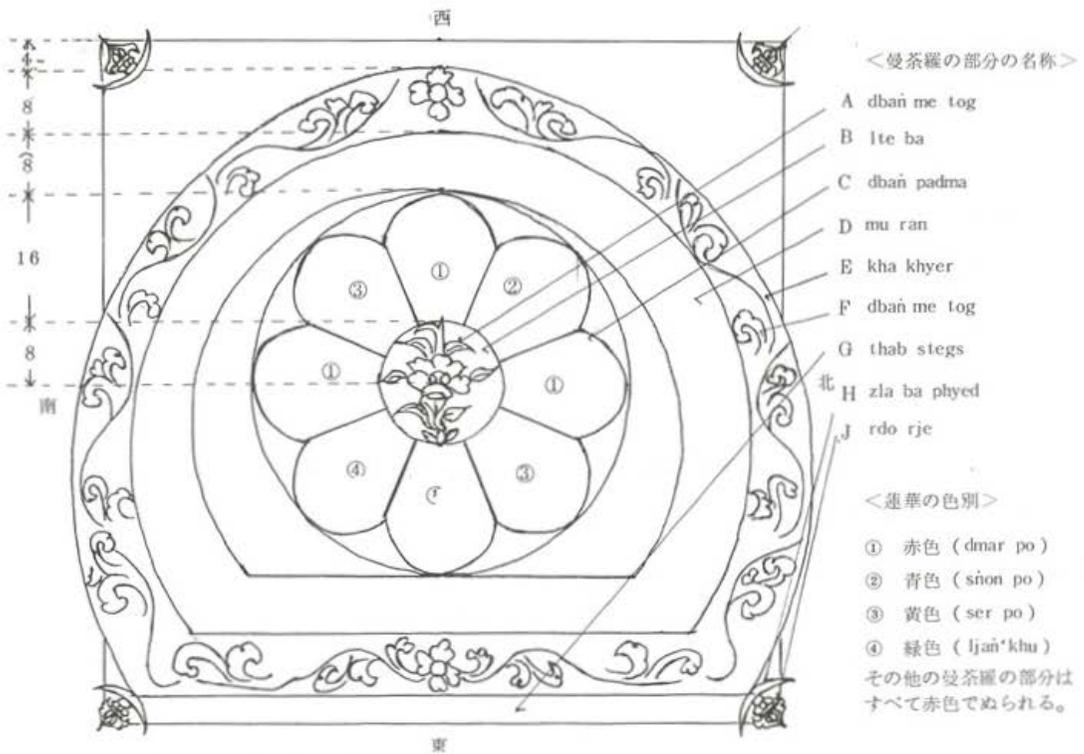
(図1) 息災(shi ba)曼荼羅(寸法は指(sor)の法量に基づく)



(図 2) 增益 (rgyas pa) 曼荼羅



(図 3) 調伏 (drag po) 曼荼羅



(図 4) 敬愛 (dbaṅ) 曼荼羅

アルチ寺院の曼荼羅

— 悪趣清浄曼荼羅について —

小林 暢 善

アルチ寺院には、都合28個の曼荼羅が描かれている。そして、これ程の数の曼荼羅は、レー周辺の諸寺院では見る事ができない。アルチ寺院の壁画が、11・2世紀に描かれた古いものである事と共に、数多くの曼荼羅が現存している点で各界の注目される所となっている。これらの曼荼羅のうち、第二堂二階の数個の曼荼羅が、中尊を智拳印のビルシャナとする金剛界曼荼羅であり、四仏等の像容に関しても儀軌に忠実である事を、第一回調査団長の松長有慶博士が図像学的に実証されている。^①

今ここに紹介する悪趣清浄曼荼羅は、初会金剛頂経の釈タントラとされる悪趣清浄軌に説かれる曼荼羅であり、第一堂・第二堂三階・第三堂に描かれている。この内、第一堂の曼荼羅が比較的鮮明であるので、これを例として経軌と共に眺めてゆきたい。

第一堂は、ハカン・ソマ(Lha-khar-soma)と呼ばれ、他の諸堂に比較して新しいものであるが、スネルグローブ博士は、「ラダックの文化遺産」の中で、内部の壁画から見て13世紀を下らないものと言われている。^② 5メートル四方の小堂であり、中央にチョルテンが安置されている。正面の北壁には、中央に黄色、転法輪印の釈迦牟尼を中心として、周囲に金剛薩埵や阿弥陀如来等の諸仏諸菩薩が描かれ

ている。東壁は、中尊を薬師如来とする千体仏となっている。入口のある南壁は上下二段に分かれ、上段には釈迦の千体仏、下段には仏伝等が描かれている。西壁には三つの曼荼羅が横に並んで描かれ、下段には金剛薩埵が数体あり、曼荼羅の周囲にも金剛界五仏がくまなく配されている。この三つの曼荼羅の内、中央と右端の二つの曼荼羅が悪趣清浄曼荼羅である。

悪趣清浄軌には、8世紀後半～9世紀中頃に存命したリンチェンチョク(rin-chen-mchog)の校訂になるものと、12世紀後半～13世紀前半に存命したチュージェーペー(Chos-rje-dpal)の校訂になるものの2本が、東北目録の483番と485番として存在する。前者は、デンカルマ目録323番に見られる数少ない瑜伽タントラの経典である。これらには、ブッダグヒヤの註釈書が2本、アーナンダガルバには5本の註釈書がある。2本の悪趣清浄軌では、説かれる曼荼羅が相違している。旧訳である483番では、11種の悪趣清浄曼荼羅が説かれている。^③ その内最初に説かれるSaravavid(Kun-rig)を中尊とする悪趣清浄曼荼羅が第一堂西壁石端の曼荼羅である。

この曼荼羅については、既に酒井真典博士が「八

輻輪曼荼羅について」(密文・87号)と題され、その概要を述べておられるが、次に少し紹介しておきたい。

〈東北版 483 2a^o~3b^s , 北京版 116 56b^s~57a^s〉

「中央の曼荼羅を墨打すべきは、法輪に等しくして、脐を伴いて十六輻輪也。三次第を具して、輻を二倍にすべし。中央の方に普明(Sarvavid)が螺貝とクムダ月と等しく、四面にして金剛の獅子座に住し、且つ三摩地の印を具して、一切の諸飾を以て飾られるを画くべし。その眼前に一切悪趣を厳淨する王を画くべきにして、両手を三摩地の法に交差し、満月と蓮花の色を具して、一切の諸飾を以てよく円満して、最勝丈夫として一杯に画くべし……」

以下、中尊を囲む諸尊が説かれる。即ち、西方に釈迦族王、南方に宝花、北方に最勝尊があり、東南等の四隅には四明妃である Locanā Māmakī Paṇḍarā Tārā が配せられる。次に十六輻輪には、金剛薩埵を初めとする十六大菩薩があり、四角には内外の四供養妃が安ぜられる。さらに四摂菩薩、十二独觉仏、十六羅漢が外重に配せられ、外輪には四洲があり、大自在天や帝釈天等が描かれる様説かれている。この内、中尊の普明(Sarvavid)とは、白色、四面、定印で獅子座に座すと説かれているが、三百尊図像集及び三百六十尊図像集では、Sarvavid Vairocana として、四面、定印にして、八輻金輪を持す像容が見られる。^④ 経軌には、中尊と東方尊の一切悪趣王の二尊については像容の説明が見られるが、他については見られない。また Raghu Vira L. Chandra 編の A New Tibeto Mongol Pantheon Part 13 には、11種の悪趣清浄曼荼羅の図版があり、その第一に Sarvavid を中尊とする同じ曼荼

羅が見られる。

以上の如く説かれる曼荼羅が、第一堂西壁右端の曼荼羅であるので、次にこの曼荼羅の概要を述べてみたい(写真1・2参照)。全体は五重の曼荼羅である。中尊の坐す内院は九分され、八尊が中尊を囲んでいる。第二重に十六尊があり、その四隅に四尊、第四重には、四隅と四方四門に各一尊、そして各方向に四尊ずつ計十六尊が四方を囲んでいる。さらに第五重では、四方四門に四尊ずつ、そして四隅を含めて周囲を都合二十八尊が囲んでいる。中尊の像容は白色、四面、定印にして獅子座に坐している。即ち普明(Sarvavid)である。この中尊を囲む八尊の内、四方尊の像容は、東方より順に東方(白色、定印、象座)→一切悪趣王。南方(青色、触地印、馬座)→宝花。西方(赤色、転法輪印、孔雀座)→釈迦族王。北方(黒緑色、施無畏印、金翅鳥座)→最勝尊。となっている。次に東南等の四隅は、東南(白色、日輪)→Locanā。西南(青色、金剛)→Māmakī。西北(赤色、蓮華)→Paṇḍarā。東北(黒緑色、ウトバラ)→Tārā。の如く四明妃である。また第二重の十六輻輪には、東方に白色で金剛と鈴を持す金剛薩埵を初めとする十六大菩薩が蓮座に坐している。それらの像容は、初会金剛頂經金剛界品に出生する十六大菩薩の像容と一致する。第三重の四隅の女性尊は、東南(白色、右-金剛、左-鈴)を初めとする内の四供養妃である。第四重には、その四隅に四女性尊があり、その像容から外の四供養妃であるとわかる。そして四方四門には各々四摂菩薩が次第の如く配せられている。また、各方向には、四摂菩薩をはさんで二尊ずつ金剛薩埵が四尊あり、東方四尊は白色、南方四尊は黄色、西方四尊は赤色、北方四尊は黒緑色となっている。第五重には、四方

四門に四尊ずつ四色の色をした門護である十六忿怒神があり、周囲を十二独覺仏と十六羅漢の都合二十八尊が囲んでいる。以上よりアルチ寺院の第一堂西壁右端の曼荼羅は、悪趣清浄軌の旧訳（東北483・北京116）に説かれる11種の曼荼羅のうち、中尊を普明（Sarvavid）とする悪趣清浄曼荼羅であるといえる。

今一つ第一堂にある悪趣清浄曼荼羅は、前述の曼荼羅の左隣りにあるので、中尊を釈迦牟尼とする曼荼羅である（写真3・4参照）。この曼荼羅は、旧訳に於いて普明の曼荼羅に次いで説かれているが、新訳（東北485・北京117）に説かれる曼荼羅の方が、尊数、像容に於いてアルチ寺院の曼荼羅に適合している。次に新訳に説かれる、釈迦牟尼を中尊とする悪趣清浄曼荼羅を説く部分を見てみたい。

この曼荼羅は、初会金剛頂経に説かれる三種三摩地のうち、第二の曼荼羅最勝王と名付けられる三摩地を成就する為に説かれる観想曼荼羅である。釈迦牟尼が一切罪障を除く三摩地に入り、法輪の印を結んで、御心の阿字より月輪を生じ、真言と共に金剛仏頂以下金剛鈴に至る諸尊を出生してゆく。

<東北_展485 108b⁷~110b², 北京_展117

107b⁷~109b⁸>

「内の曼荼羅の東方蓮花月に住し給ふ金剛仏頂如来は、一切有情を利益せん為、御心より出生し住し、身色白く焰え、触地印に正しく住す。……中略……南の幅によく住する蓮花月の中央には、宝仏頂如来が御心よりよく住して、仏の相によりて正しく飾り、身色青にして極めて美わし。……中略……次に西の幅に住す蓮花上月輪に種子の光により円満せる蓮花仏頂如来を御心より出生して、後に示す相に住すとは、黄銅蓮花の光焰え、禪定印によりよく住し給ふ。

……中略……北方は、幅より蓮花上月輪に、御心より出たる仏は、種々（羯磨）仏頂如来也。身色緑色にして光焰え、この印は施無畏也。

以下東南の威光仏頂如来（白赤色、右手一日輪、左手一安腰）。西南、宝輪仏頂如来（赤黒色、如意宝輪）。西北、利仏頂如来（青色、右手一劍、左手経典）。東北、白傘蓋仏頂如来（白色、白傘蓋）。の四仏頂尊が像容と共に説かれ、都合八仏頂尊が出生する。次に内外の四供養妃が、各部族の身色を以って出生する。さらに慈氏菩薩を初めとする賢劫十六尊が以下の如く見られる。

「慈氏は御胸甚だ清浄にして、身色は黄色の光。右手は花のある龍樹、右手は浄瓶を把る也。第二は不空見にして、身色は黄色の光に焰え、右手の蓮花は眼にありし、左の手は腰の側に安じたり。第三の菩薩は、御名を悪趣捨破棄と言ひ、身色白光に輝きて、印は鉄鉤を持す。第四は一切闇苦悩を決定して破する慧にして、同様に白と黄の混色に輝き、印は杖を持し、左手は拳にして腰側に安ず……」

以下、南方に香象、勇行、虚空蔵、智幢の四菩薩あり、西方には、甘露光、月光、賢護、網光の四菩薩、北方に、金剛蔵、無尽意、弁積、普賢の四菩薩が配せられ、各々の像容と共に理解できる。次に四摂菩薩の説明が、チベット文には欠如しているが、この新訳の翻案とされる宋、法賢の訳になる「仏説大乘観想曼荼羅淨諸悪趣經二卷」（大正藏_展939）には、前述した諸尊と同様の像容の説明と、四摂菩薩も次第の如く見られる。この漢訳が翻案である事を、酒井真典博士は、「悪趣清浄軌について」（密文・123号）と題され発表されている。また氏家昭夫助教がネパールより請来された梵本の写本に基づく「悪趣清浄曼荼羅とその観想」（密教学研究・第七

号)の中で述べられた曼荼羅は、この新訳及び漢訳に適合するものである。

以上の如き曼荼羅が第一堂西壁の中央にあり、諸尊の像容は経軌に全く一致している。しかし、一個所だけ相違する点がある。それは、経軌では、中尊とそれを囲む八葉蓮弁上の八仏頂尊しか説かれていないが、アルチ寺院のは一様に八葉蓮弁が二重あり、内の八葉蓮弁上の東方第一尊に、一面四臂の女性尊が描かれている。これは般若波羅蜜母と思われるが、どんな意味を持っているのか定かではない。これは今後の研究課題としたい。この釈迦牟尼を中尊とする悪趣清浄曼荼羅は、Nispannayogāvalīの中に説かれる曼荼羅とも諸尊の像容は一致している。^⑤ さらに、A New Tibeto Mongol Pantheon Part 13にもその図版が見られる。

以上、アルチ寺院第一堂の二つの曼荼羅を例として、それらが各々普明と釈迦牟尼を中尊とする悪趣清浄曼荼羅である事を述べた。アルチ寺院には、他に釈迦牟尼を中尊とする悪趣清浄曼荼羅が、第二堂三階、第三堂東壁右に見られ、その左には、白色一

面二臂、定印のビルシャナを中尊とする、普明の曼荼羅に類似する曼荼羅が見られる。この様にアルチ寺院では、第二堂二階の金剛界曼荼羅を初めとして、同じ瑜伽タントラである悪趣清浄曼荼羅がここに見られ、松長有慶博士の指摘される様に、アルチ寺院の曼荼羅は瑜伽タントラの曼荼羅が主流であるという事が言える。

以上に関して詳しくは、密教学研究第11号を参照されたい。

注 ① 密教学研究第10号「金剛界曼荼羅について」

② D. Snellgrove: [The Cultural Heritage of Ladakh] P79

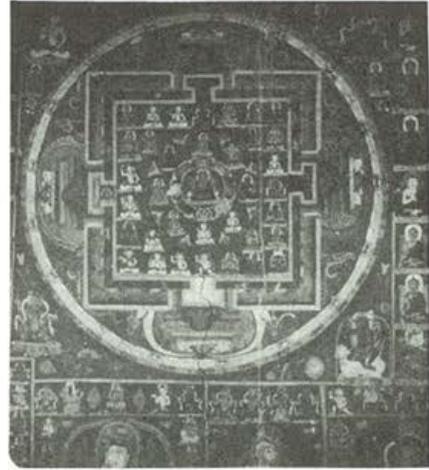
③ G. Tucci: Indo Tibetica III §38
Raghu Vira, L. Chandra: A New Tibeto Mongol Pantheon Part 13 の中にも11種の悪趣清浄曼荼羅の図版がある。

④ L. Chandra: Three Hundred Icons of TIBET №76。; Two Lamaistic Pantheons, P114

⑤ 東北3141番 133a²~



(写真1) アルチ寺院第1堂西壁右の普明
を中尊とする悪趣清浄曼荼羅



(写真3) 第1堂西壁中央の釈迦牟尼を中
尊とする悪趣清浄曼荼羅



(写真2) 同曼荼羅の中尊である普明と四仏、四明
妃



(写真4) 同曼荼羅の中尊である釈迦牟尼と八仏頂
尊

アルチ寺院の仏伝壁画考

長 田 実 生

古来より仏伝は、釈尊 (Gotama Buddha, Śākyamuni) の偉大な所行を追憶し讃嘆し、それを後世に伝えて如来の功徳に浴せしめんがためのものであった。チベット仏教においても釈尊伝は重要視され、各種の歴史書の中で伝えられている。^① 今回、調査を行なったラダック地方のアルチ寺院。(A leidgon pa)においても、この釈尊伝と思われるものが存在した。

アルチ寺院には、釈尊にまつわる壁画が数種、認められる。同寺院は、西の端に位置する堂から東に向かって、順に1から5までの番号が付されている。壁画はその第1堂 (Lhakhang Soma), 第2堂 (Sum tsek) の弥勒仏の腰衣の部分、及び第3堂 (Du khang) の前堂になる壁画に描かれている。

アルチゴンパは、11世紀代の高僧であるリンチェンザンポ (Rin chen bzang po) によって創建されたと伝えられている。しかしながら、釈尊にまつわる壁画は、その光沢や剥落の程度からみて描かれた年代を、創建年代とすることは、はなはだ危険である。現存の壁画は、創建年代をかなり下った時代に描かれたものと推察する。

以上の三つの壁画のうちで、最も判別が可能と思われるのは、第1堂の壁画である。第2堂、第3堂

の釈尊にまつわる壁画は、判別がしにくく不明な点も数多くあるので、今回は第1堂の壁画に絞って少しく考察を加えてみることにしたい。

第1堂内の南壁に描かれたこの釈尊にまつわる壁画は、釈尊の生涯を伝える「仏伝」と思われる。この仏伝図を古来、印度において伝承され、また南方に伝わった仏伝と、どの様に合致しているか、また相違しているかを併せて見てゆくと、この壁画がより明らかになると思われる。

写真1は、第一堂の南壁の左方を示すものである。仏伝図はその下半分に、6段に区分されて描かれている。壁画には光沢があり、かつ亀裂と剥落が激しいので、壁画そのものにおいて判別が困難な箇所もあるが、できうる限り仏伝図の解明を行うことにする。

写真2は、仏伝図の最初の部分である。この部分は、その後々にある図との関連において「天宮説法」を示したのではないかとと思われる。この天宮とは、兜率天宮 (Tuṣi ta-bhavana) を指すものと思われる。そしてこの内院は将来、仏となるべき菩薩の住処とされ釈尊もかつてここで修行し、現在、弥勒菩薩がここで説法していると説かれている。^②

写真3は、「五事観察」の場面ではないかと思わ

れる。ここでの五事とは、「時を觀ずる事」「国土を觀ずる事」「種姓を觀ずる事」「血統を觀ずる事」「母となるべき徳ある女性に就て觀ずる事」とされている。^③ 第一に「時を觀ずる事」とは、「既に海塵と生れし時、宝蔵如来に人寿百歳の時成仏せんと誓ひ、又燃燈仏^④以来総べての如来も同じく授記せられし如く菩薩も思念し又十方の諸仏よりは此五濁悪世の衆生は完全なる依処を失へる者なれば、是れか依所たらん、為めに速かに降生せらるべしと請はれて当に臚部洲^⑤に降生すべき時、来れりと觀じ給へり。」^⑥ということである。

第二に「国土を觀ずる事」とは、「仏陀の出世は唯だ世の衆生の利益の為にのみ出づる者なり。而して其所化の衆生の主となる者は、神と人との二種類なるが、若し仏にして神の国に出世せんか、人間は彼処に到るの力なき故に彼等を利益し得ざるのみならず、神等は仏に遇ひ難しとの心を生ぜず。神等自身の娛樂多き為に厭世の念生せざれば戒徳の器となり難し。且つ神等にして法を聴かんと欲すれば、臚部洲に至ることを得べし。されば人間界に生るこそ當を得たる者なれ。其人界の中に於ても臚部洲以外の三洲は財産豊富なれども求法の精進心に乏し。臚部洲の人々は貧にして短命なれども、信心の機能鋭くして出塵念力の堅固なる者生じ易し。猶ほ臚部の土には中道を悟り得るに勝れたる丈夫烈女多し。されば此土に顯密二教を広布せんと、是れ菩薩が國に就て觀じて、此土を択んで成仏の行相を示さんと決せられし所以なり。」^⑦ということである。

第三に「種姓を觀ずる事」とは、「諸仏の応身出世する時は、王族或は婆羅門族を択んで降生せらるるなり。而して菩薩は世情に順ふて王族に生れんと觀じ給へり。」^⑧ということである。

第四に「血統を觀ずる事」とは、「王族の中に於ても、菩薩の父母たる人の血統は毫も穢れざる者を択ぶことなり。淨飯王^⑨は国初の王より、連綿たる王統にして、其後摩耶夫人^⑩は又清潔なる王族の出なれば、先づ此王と后とを父母とせんと觀ぜられる。」^⑪ということである。

最後に「母となり得る徳ある女性に就て觀ずる事」とは、「摩耶夫人は前生願力の徳を具へて、仏陀の母たるに相応したれば、夫人を母として降生せんと觀じ給へり。」^⑫ということである。

以上はチベット仏教の黄帽派の伝燈史といわれる「ラムリム、ギュッペー、ラーメー、ナムタル、ガバ(Lamrim rGyudpai Lamai rNamthar ngapa)」の仏伝よりの引用である。そしてこの後、菩薩は位を弥勒菩薩に授けるわけである。写真3はその位を授ける場面を表わしているのか、また「五事觀察」の第五である「母となり得る摩耶夫人」についての事なのかは理解しがたい。

ただ、壁画においては釈尊と思われる方が、ひざまずいている者に何かを説いている所である。その左右には四人の菩薩が、供養をしている。この場面は、もしひざまずいている者を「摩耶夫人」とすれば、ここは第五の「觀察」になる、と思われるのである。

写真4は、「降兜率」と「托胎靈夢」の場面を描いていると思われる。「降兜率」の時には、光明を放ち、大地が震動し、悪魔はすがたを隠し、日月星辰も光を失い、天龍などの異類も驚怖し、五端を示す、とされ「托胎靈夢」の時に、前生の釈尊は6牙の白象に乗って^⑬兜率天から下り、母、摩耶夫人の右脇から入って宿ったとされている。^⑭先に掲げた「道順伝燈史伝ガバ」^⑮には、この箇所を克明に

説明しているが、多分に神話的要素を含んでいる。¹⁶

次に仏教の古い典籍には、この「降兜率」という箇所が少しばかりある。まず一般に古層の經典とされる「経集」¹⁷の第955偈には、以下の如くである。

「尊者サーリプッタはいった、——わたくしは、未だ見たこともなく、また、誰にも聞いたこともない。——このように、ことば美わしく衆の主なる師（ブッダ）が、トッシタ天から来りたまうたことを。」¹⁸

また、「長老偈経」¹⁹の第968偈には「6牙の象」の偈がある。中村元博士は著書「ゴータマ・ブッダ」の中で、この「降兜率」の箇所を「伝説」とされ、先に述べた「五事観察」も、後世の成立とされている。²⁰

写真5は、いよいよ「誕生」の場面である。「道順伝燈史伝ンガバ」では、前の「降兜率」「托胎靈夢夢」と同様に、神話的な叙述となっている。誕生の場面は、

「……一行の藍毘尼苑²¹に到着するや、摩耶夫人は宝車より出で、林苑より林苑にと歩み給ひ、一々の樹を見て進み給ふに、平坦なる地上に細軟なる青草繁生せり。中に樹王あり。無憂樹と云ふ。其花天上人界の莊嚴にして、美香馥郁たり樹幹枝葉は諸宝を以て成れる如く、威容堂々たるものあり。時に摩耶夫人は右手を延ばして、其樹枝に掛け給ひ、空を見給ひしに、夫人の右脇よりして、黄金塊、百千日光の潤光あるもの、頓に出でたりと見るや、仏身誕生あらせられたり。」²²

とある。ここで摩耶夫人は、「無憂樹」²³という樹に手を掛けられた時、釈尊が御誕生になられたということであるが、この無憂樹という樹は、花は鮮か

な赤色で人目をひき、瑞兆を現わす花だといわれている。²⁴しかし、中村博士の著書²⁵によるとこの場合、摩耶夫人が手を掛けられた樹は「ビッパル樹」²⁶なりしは「シャーラ樹」²⁷となっている。

古来よりインドには、樹木にまつわる話が多くあるがこの場合、摩耶夫人が手を掛けられた樹が相違しているのは、伝承上のことであろうか。²⁸

この後、壁画はさらに続くのであるが、最初に述べた如く、亀裂と剥落が激しいため判別が難しくまた、不明な点も数多くあり解明は困難である。

アルチ寺院の仏伝壁画は、おそらく「道順伝燈史伝ンガバ」等々の伝燈史に基づいて描かれたものと想像できるが、詳細は今のところ解からない。以下、仏伝として一般に伝承されている項目を記すと、

「双龍灌頂、阿私陀仙²⁹占相、修学、試芸、四門出遊、納妃、出家踰城、苦行、牧女奉乳糜、吉祥草奉獻、降魔成道、樹下静観、文隣龍王守護、梵天勸請、四天王奉鉢、初転法輪、三迦葉教化、頻婆沙羅王³⁰礼仏、伊羅葉龍教化、帝釈窟說法、祇園精舎建立、波斯匿王³¹礼仏、父子合会、為母說法、彌猴³²奉蜜、阿闍世王³³礼仏、大般涅槃、舍利八分」

である。以上はチベット仏教による伝承であるが、他に資料として、トッチ博士の著者³⁴と、多田等親氏請来のもの³⁵を参照したが、共にタンカ(Thang-kas)形式であり比較は困難であった。

注 ① 西藏伝印度仏教歴史上(釈迦牟尼伝)河口慧海著 序 2~4頁

② 中村元著 仏教語大辞典 下巻 995頁

③ 河口前掲書 目次6頁及本文43頁

④ 過去世に出現して、釈尊に未来には成仏する

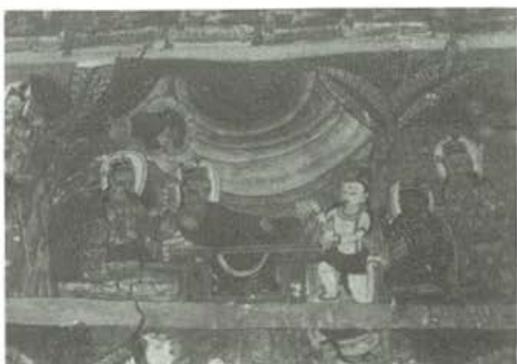
- と予言した仏。(skt. Dīpaṃkara Tathāgata)
- ⑤ 閻浮提に同じ。インドのこと。
(skt. Jambūdvīpa)
- ⑥ 河口前掲書 43~44頁
- ⑦ 河口前掲書 44頁
- ⑧ 河口前掲書 44~45頁
- ⑨ 釈尊の父であり、釈尊族の王。
(skt. 'suddhodana, pāli. suddhodana)
- ⑩ 釈尊の母。産後まもなく亡くなったといわれている。(中村元著『ゴータマ・ブッタ』59~60頁)
(skt. pāli. Māyā)
- ⑪ 河口前掲書 45頁
- ⑫ 河口前掲書 45頁
- ⑬ 道順伝燈史伝ンガバ ラサ・ボトラ版
河口前掲書 目次 2~6頁
- ⑭ 写真では象は黒く、六牙がない。また鼻が赤く描かれている。
- ⑮ 中村前掲書 下巻 209頁
- ⑯ 河口前掲書 46~49頁
- ⑰ (pāli. Sutta-nipāta) 955
- ⑱ 中村元訳『ブッタのことば』172頁
- ⑲ (pāli. Theragāthā) 968
- ⑳ 中村元著『ゴータマ・ブッタ』521頁及
61頁注③
- ㉑ (skt. pāli. Lumbinī ルンビニー園
- ㉒ 河口前掲書 50頁
- ㉓ (skt. 'āsoka) 過去7仏の一人であるヴィバ
レン仏がこの樹の下で成道したといわれている。
(中村元著『仏教語大辞典』下巻1315
頁)
- ㉔ 中村元著『仏教語大辞典』上巻 5頁
- ㉕ 中村元著『ゴータマ・ブッタ』45頁(小活
字部分)
- ㉖ (skt. pippala) 一般に菩提樹といわれている。
- ㉗ (skt. 'śāla) 沙羅樹。幹は長く、材質は堅固
である。葉は長楕円形である。淡黄色の小さ
な花をつける。(中村元著『仏教語大辞典』
上巻 604頁)
- ㉘ 誕生に関しては、中村博士の『ゴータマ・ブ
ッタ』44~52頁に詳しく述べられている。
- ㉙ (skt. Asita)
- ㉚ (skt. Bimbisāra) マガダ国王。
- ㉛ (pāli. Pasenadi) コーサラ国王。
- ㉜ (1) 猿 (2) 古代チベットの諸種族。(中村元
著『仏教語大辞典』下巻 1259頁)
- ㉝ (Skt. Ajātaśatru) ヒンビサーラ王の息子。
後のマガダ国王。
- ㉞ GIVSEPPE TVCCI:TIBETAN
PAINTED SCROLLS,
- ㉟ 多田等観 請来『チベット仏像仏画図録』



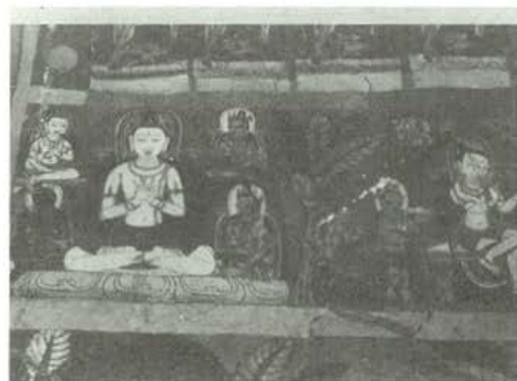
(写真1)



(写真3)



(写真4)



(写真2)

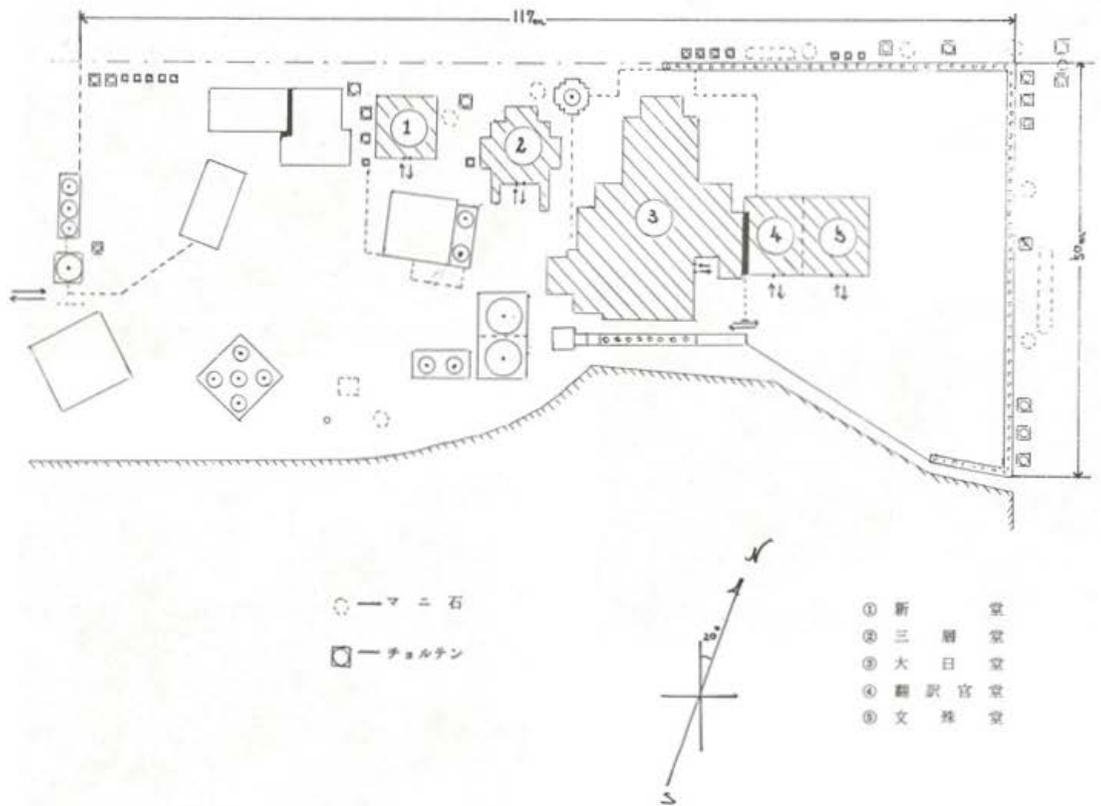


(写真5)

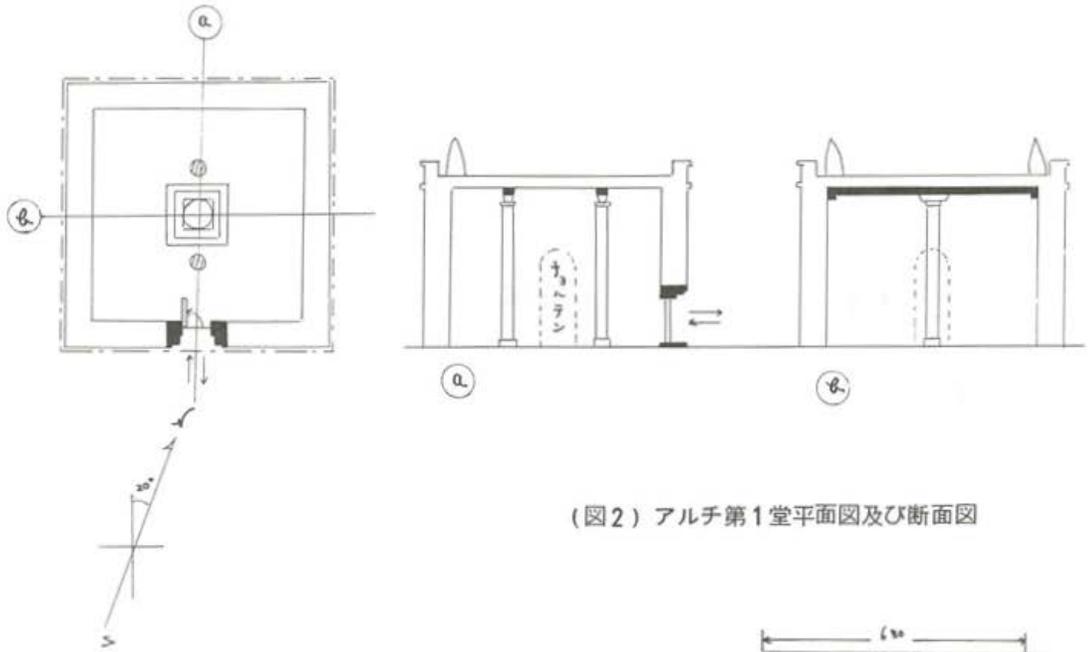
アルチ寺院の伽藍・堂宇の実測

付・マンダラ分布図および実測表

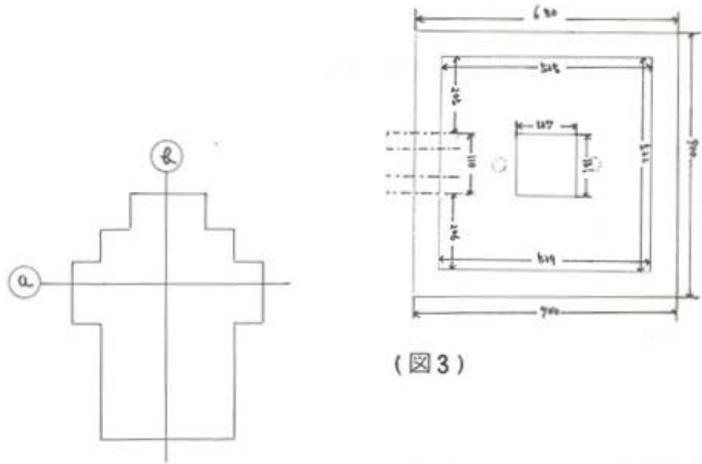
南門明定



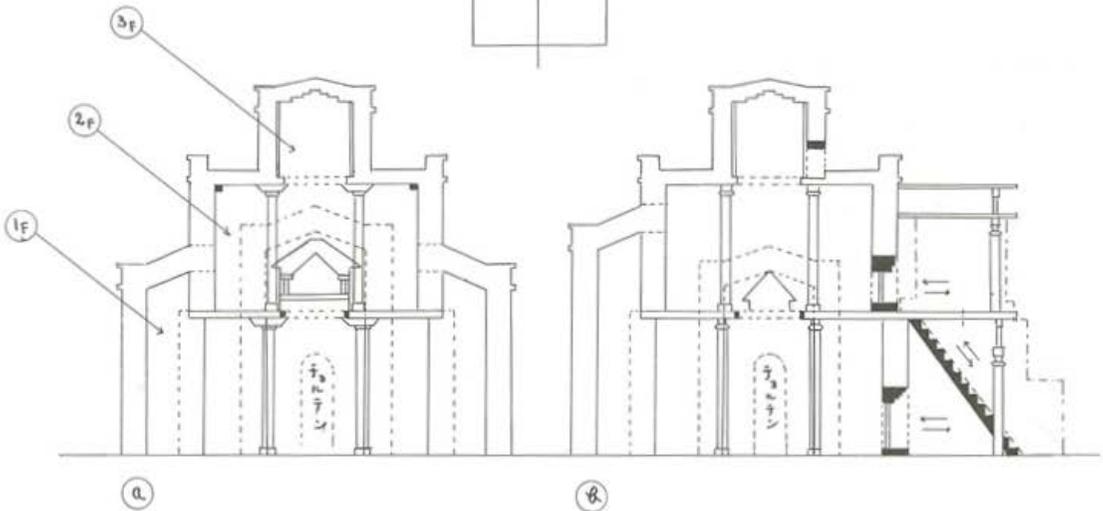
(図1) アルチ伽藍配置図



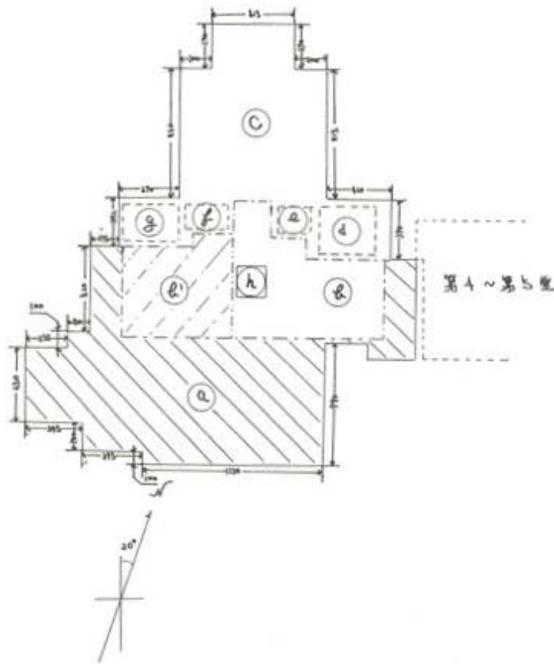
(図2) アルチ第1堂平面図及び断面図



(図3)

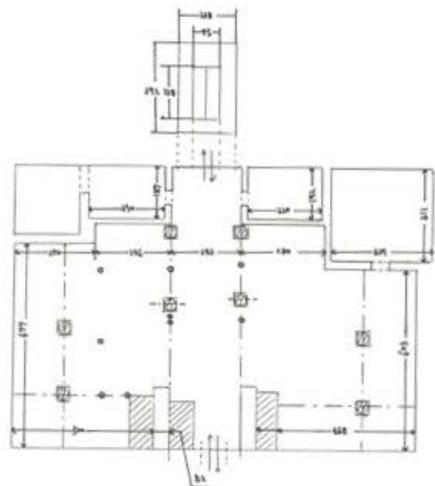


(図4) アルチ第2堂断面図

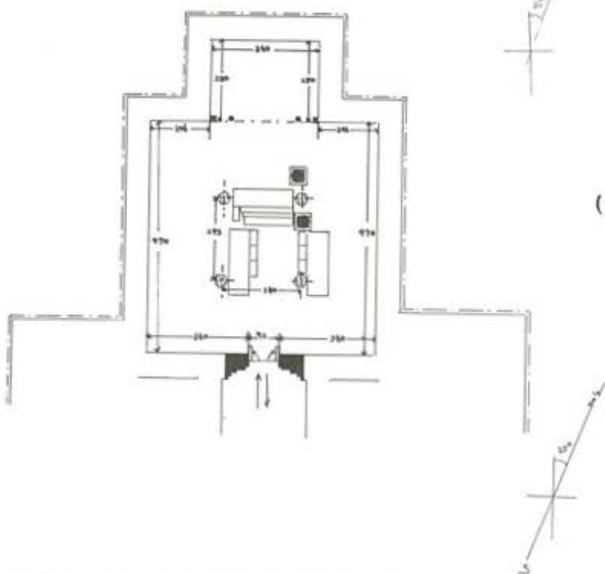


- Ⓐ 廊
- Ⓑ 和室（無屋根階）
- Ⓒ 和室（有屋根階）
- Ⓓ 和室
- Ⓔ 巨大な襦袢戸を開く部屋
- Ⓕ 襦袢戸三体を安置する部屋
- Ⓖ 白傘置他仏像2体を安置する部屋
- Ⓗ 倉庫
- Ⓘ チョルタン

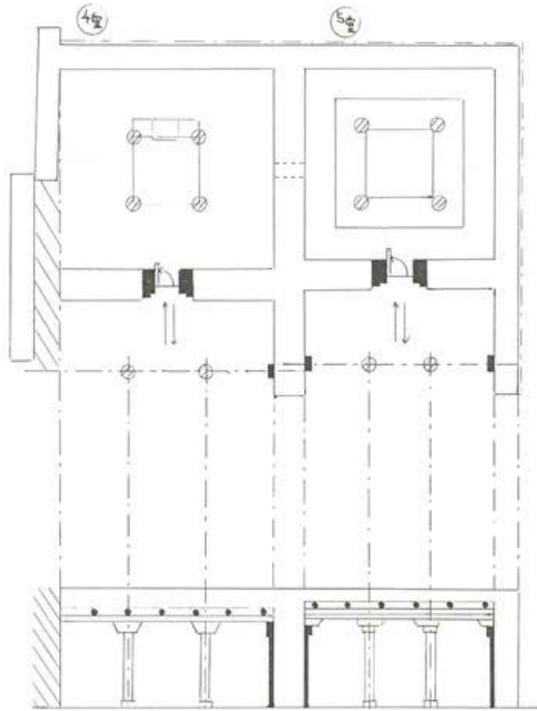
(図7) アルチ第3堂平面図



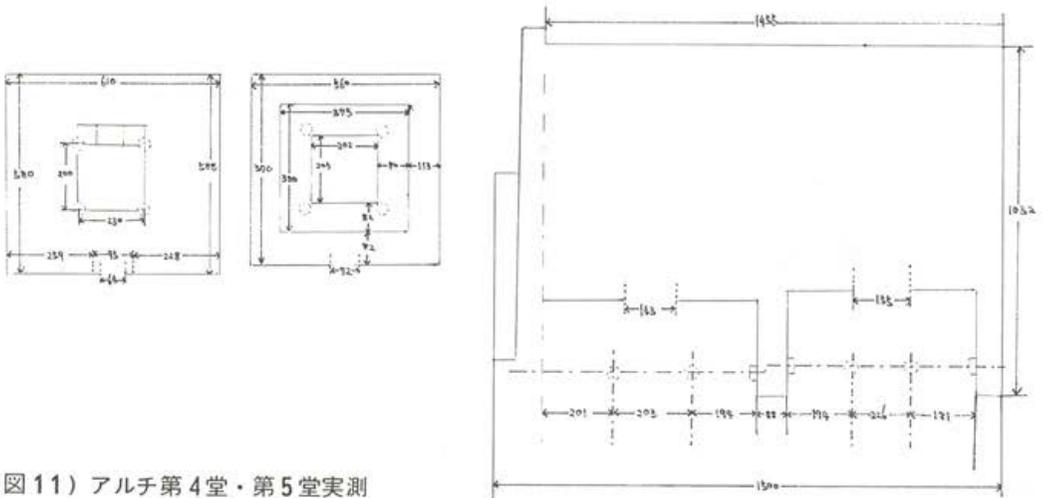
(図8) アルチ第3堂(前室)平面図



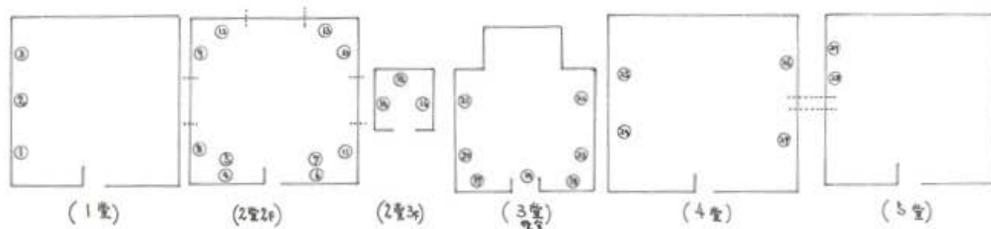
(図9) アルチ第3堂(後室)平面図



(図10) アルチ第4堂・第5堂平面図及び正面図



(図11) アルチ第4堂・第5堂実測



(図12) アルチ第1堂～第5堂マンダラ分布図

	壁面	通し 番号	マンダラの直径(cm)	中尊の像高(cm)	備 考							
第1堂	西	1	1 2 9	1 4								
		2	1 5 4	1 8								
		3	1 7 6	1 4								
第2堂 (2F)	南	4	1 3 5～1 3 7	1 3～1 8								
		5										
		6										
		7										
	西	8	2 1 3～2 1 5	2 3～2 4					四 仏 の 像 高	2 3	四 明 妃 の 像 高	1 3～1 4
		9										
	東	10	1 7 7	2 2					2 2	1 4		
11												
北	12											
	13											
(3F)	西	14	実 測 な し									
	北	15										
	東	16										
第3堂	南	17	2 9 1	2 5								
		18	2 7 4	2 1								
		19	実 測 な し	1 4								
	西	20	3 7 0～3 7 5	1 9								
		21		2 5								
	東	22		2 8								
		23		2 8								
第4堂	西	24	1 3 0	1 6								
		25	1 4 0	1 6								
	東	26	1 2 1	1 8								
		27	1 1 9	1 8								
第5堂	西	28	実 測 な し									
		29										

(図13)

アルチ寺院の壁画撮影備忘

付. アルチ各堂壁画スライド索引

坎 宥 行

レー調査隊の主な目的は、アルチ寺院の壁画を、研究資料として使える様に撮影することであった。ここに、その作業についての準備と実際そして整理についてまとめておきたいと思う。

(一) 出発までの準備

アルチ寺院の壁画については、昨年第1回調査の時に、成作年代の古いものが良く保存されているという事で、学術的に大変価値があると報告された。昨年は、大まかながらほぼ全部の壁画の写真を撮影して来たので、今回の調査では、その壁画の仏を一尊ずつフィルムに収めて、細部にわたる比較研究ができる様な資料集を作ろうという事にした。

我々が最初に集まった4月初旬には、撮影の方法・機材の選択・技術の不足等の問題が山積みしていた。まずは技術の問題である。6人のうち3人は、今までカメラなどほとんど扱った事も無かった。又、数年の写真歴を持つ者もいたが、暗い中で、補助光を用いて仏画を大量に写す作業に、誰も自信が無かった。まず我々は、費用・重量の問題から、又技術的にも多少とも使い慣れているという点から、大型カメラの使用はやめ、35mmカメラを用いる事にした。補助光についても、装備の増化を避け、昨年実績

もある、ストロボ2灯を用いる事にした。フィルムについては、色の識別も重大な問題なので、カラーフィルムを用いなければならない。主に保存性の点で、主としてスライド用フィルムを用い、研究時の簡易性を考えてのカラーネガフィルムとした。補助として、出版・印刷に便利な白黒ネガフィルムを使用し曼荼羅の五仏・四明妃・四摂等重要と思われる尊のみを写すことにした。この様に、計画の概要が決まった時点で、技術・装備面では一番写真に詳しい長田隊員を中心に、どこをどう撮るかという手順と、その記録・整理については、昨年調査団に加わった小林隊員を中心に準備を進める事にした。

技術的には、学内で写真に詳しい蜜波羅先生に御指導いただき、撮影方法の確立と技術の向上を旨として写真撮影練習を行なった。合計4回の練習を行ない、フィルムの色調について、露出の決定、また被写体とストロボの距離と角度について等のテストをくりかえしながら撮影の練習をした。その結果スライドフィルムは、コダック・エタクローム(ASA64)を用いる事にし、カラープリントもそれに準じてコダックを用いる事にした。露出については、シャッター速度、しほり値はそれぞれ $\frac{1}{125}$ ・8の一定とした。カメラよりストロボが後に来る

様にし、被写体とストロボの距離が約1mの時はガイドナンバー16、同じく2mの時は22、同じく4mの時は34として、ストロボの距離及び光量を変える事にした。またストロボの角度については、被写体の面から45度よりやや少な目の角度、すなわちカメラから見れば両側に各々45度よりやや開きぎみに位置した方が、ハレーションをおこす危険が少ない事が解かった。また、壁画は三脚を伸ばし切ってもとどかない高所のものもあり、それに対しては現地でテーブル状の台を成作して、その上に三脚をのせ、なるべく水平に被写体をとらえて撮影する事が出来る様に考慮した。実際の撮影を想定して、暗い室内での練習や、霊宝館や金堂等の広い室内での練習も行なった。これにより、撮影者の両脇に二人のストロボ持ちがいて、その二人の内の一人がトーチライトで被写体を照らし撮影者はピントを合す。また誰か他の者が記録をとり、合計三、四人で撮影に当ることになった。隊員は一応どの役もこなせる様に練習したが、ある程度の統一を保つために、撮影者は小林・長田・坎の各隊員が順番に行い、記録は主に静隊長と塚本隊員が受け持つ様にした。

この練習と平行して、壁画撮影の順番とその具体的な箇所を定め、全体の枚数をつかむ作業も行なわれた。まず最初に、スネルグロブ著の“ The Cultural Heritage of Ladakh ”に収められているアルチ寺院の平面見取図を参考に、入口に向かって左から、1～5の番号で呼ぶ事にした。スネルグロブはそういう名称を用いていないが、これは各堂の入口にペンキで書かれている番号であり、一部では昨年調査の時から用いられていた。つまり、新堂(Lha khan so ma)は第1堂、三層堂(Gsum brtsegs khan)は第2堂、ビルシャナ堂(Rnam

snan khan)は第3堂、翻訳官堂(Lo tsha ba lha khan)は第4堂、文殊堂(H jam dpal lha khan)は第5堂である。これらのうち第2堂はさらに1階、2階、3階に分け、第3堂は本尊の安置されているお堂と、壁画のある前庭の部分とを分けて、後室、前室と称す事にした。そして、第1堂より、第2堂1階、2階、3階、第3堂後室、前室、第4堂、第5堂、さらに寺院前の壁画のあるチョルテン(3基)の順番に撮影する事にした。これらのお堂の壁面を東(入口側)、南(左側)、西(正面)、北(右側)の四つの壁に分けて、南壁、西壁、北壁、東壁の順に撮影する事にした。そして、これら8つの南西北東の各壁ごとに、昨年写真を参考に、壁面の略図を作成した。第2堂3階等の小さなものや、第5堂の様に構図の簡単な壁面を除く大部分の壁面は、さらに、上段左から右へそして下段左から右へを原則に、A面、B面、C面、……の名称を与えて壁面を分割した。つまり、第2堂1階西壁ならば、西壁全体図と西壁A図、西壁B図、西壁C図、西壁D図、西壁E図の如く、全体図と5枚の部分図を作った訳である。これら部分面の分け方は、曼荼羅や仏伝図等のモチーフ別を原則に分けた。この部分図は、昨年写真を見て、諸尊の数とその位置をできる限り正確に記した。この作業によって、少数の写真の無い壁面や一部の写真に壁画全体が写っていない部分を除いて、各壁面にはどこにどれだけ仏が描かれているか前もってはほぼ判明した。さらに、その諸尊の配置図ともいべき略図(我々はこれを「親カード」と称した)の上に、写真の写す箇所を、赤色で、1・2・3……等の番号を附した。これは、曼荼羅の場合は、中尊の1とし、その下を2、その左を3、その上を4、という具合に、左まわりに中

中央から外側へ向って、螺旋状に番号を付けた。曼荼羅以外の場合は上段左から右へ、下段左から右へという風に行なった。曼荼羅の場合はほぼ全ての尊を一尊ずつ、その他小さな尊の場合はある程度まとめて一つの範囲として番号を付け、まず全体図を撮り、次にその番号順に撮影する事にした。第2堂二階西壁を例にとれば、まず西壁全体図を撮り、次に西壁A面全体図、続いてA・1, A・2, A・3……A・46, B面全体図, B・1, B・2, B・3……B・13, C面全体図, C・1, C・2, C・3……C・46, といった具合である。この様にして、細かく撮影箇所を決定した。その枚数は、約2,350枚で、全く数に入れていないチョルテンや略図不明の箇所も含めれば、約2,500枚見当となる。この枚数の見当がついた所で、日程の問題もあり、補助に用いる白黒・カラーのプリントフィルムは、主に白黒のみによる曼荼羅の五仏撮影に限定し、それ以上は現地で時間があれば行なう事にした。また、親カードをもとに撮影の諸元（対物との距離・シボリ・シャッタースピード）とその箇所の記録と、帰ってからの整理、さらには、尊の特徴を記して尊名判定に役立たせるために、写真1コマにつき1枚あての「記録用カード」を作成した（これは「子カード」と称した）。この様にして、我々は約23日間で、平均して1日に36枚取りフィルムで3本ずつ、アルチ寺院の壁画を撮影するという計画をたてて出発した。

（二） 現地での実際

実際現地ではその計画は意外にハードなもので、1日6時間、多い日はそれ以上のハードスケジュールで長期間の撮影が強行された。現地で我々を一番悩ませたのはほこりである。もとより乾燥した土地であるが、堂内はさらに乾いており、機材とともに

右往左往する我々に砂塵が舞いあがるため、時には撮影をなげうって堂外へ新鮮な空気を求めて脱出しなければならぬ時が多々あった。このため機材の保管、取り扱いにも注意が必要であった。又高所撮影用の三脚置き台は、レーでテーブル状の台を大工にたのみ作成したが、当初の計画では大台の上に中台をのせて2段、もしくは小台をのせて3段にする予定であったが、現地では1つ作るのがやっとであった。このため、台の高さがたらずに撮影の一部ではかなりアオリの状態となったり、三脚を用いず写さなければいけない様になった。しかし、この台は、狭い入口を通らねばならず組立式としたため多少不安定ではあったが、非常に役立った。この他に、スリナガルで念のために脚立状のものを2台作って持って行ったが、これはあまり役に立たなかった。また、現地で初めて解かったのだが、我々は方向を決めるのに、スネルグローブの本の平面図に記されている方向に基づいて決めたが、その方向がまちがっていた。各堂は東面していると思っていたが、現地での計測では、約10度ほど西に傾いているが南面している事が解かった。しかし、現地での変更は混乱をまねくので、撮影に際しては日本で決めた方向を用いて、帰国後それを正すことにした。撮影順については、寺院の維持の僧の都合で第3堂は後まわしにして、第4堂を先にしなければならなかった。このため第5堂のあとに第3堂を撮影することになった。また、第5堂の撮影途中で、急に「サスポールの祠窟」を調査する事になったので、第5堂の途中でサスポールの祠窟の写真が入ってしまった。アルチ寺院以外には、昨年末調査で写真の無かった、アルチリズン寺院、サスポールの祠窟、タンタック寺院、チョムデー寺院の壁画や、昨年撮れなかった

所、「リキル寺院の護摩修法」の様子等を写真に収め、合計76巻のスライドフィルム（内アルチ寺院分約61巻）と、主にアルチ寺院の曼荼羅の主尊を撮った白黒フィルム5巻、その他に経典を撮影した4巻（白黒3巻、カラー1巻）、都合85巻のフィルムを持ち帰った。

（三） 帰国後の整理

9月になり、フィルムの現像もでき、我々は整理にあたる事になった。スライドは仕上りのバラバラの状態であったので、まず最初に、スライドに現地記録の子カードと合わせ、それにフィルム巻数とコマ数を入れた。これは例えば69巻目の24コマ目ならば、69-24の如く記し、スライドの右下に記入した。これは、現像をたのむ時点で、各フィルムの巻数とさらに各コマの番号を入れてもらうようにしたため、比較的簡単に行なえた。また、スライドは20枚入りのシートに収めてそれをスチール製のキャビネットに収め保存する事にし、番号を入れながらフィルム1巻につき20枚入りシートを2枚ずつ用いてシートに収めた。つまり2枚目のシートの最後が4コマ分空白になる訳である（35枚しか撮れなかったり、37枚撮った時もあるので実際は3～5コマ余る）。この時に、現地でストロボが両方もしくは片方が光らなかった場合等、同じ箇所を取りなおした部分の失敗のフィルム（真黒ばかりでなく写っている時もある）も抜き取らず、そのまま番号の中に入れシートに収めた。また、その失敗のコマには、オレンジ色のシールをはって識別した。計画では、親カードをそのまま索引とする様に考えていたが、細部で撮影箇所を変更した所があり、寸法の実測値も記入したために見にくくなり、さらに全て方向が違っているためこれをそのまま索引とする事はできなくなった。

そこで新たに親カードを作りなおしたのだが、索引として使える様に従来の略図の横にその面の1・2・3……に相当するフィルム番号を記入する欄を設けた。例えば、第2堂2階、西A・1は11-33、A・2は11-34、A・3は11-35……という具合である。当然方向も改め旧方向では撮影順に南壁、西壁、北壁、東壁となっていたのを、西壁（左側）、北壁（正面）、東壁（右側）、南壁（入口）と正しくなおした。そして各フィルムには、第2堂2階西壁A面1ならば「2・2F西・A・1」の如くの略号を用いて、撮影箇所を明示した。また、フィルム巻数のままの順番だと第3堂があとまわしになり、さらに第5堂の途中に「サスポール洞」が入っているので、「サスポール洞」の部分を抜き取り後にまわし第3堂の分を第2堂と第4堂の間に挿入した。さらに、これら略図の索引とは別に、フィルム1巻につき1枚ずつの「巻数別の索引」も作成した。つまり略図の索引は第2堂2階西壁A面1は11-33に当たるというものだが、巻数別の索引は11巻目の33コマ目は、2・2F・西A・1を写したものであるとする逆の索引である。これらは「アルチ寺院」及び「サスポール洞」、アルチリゾン寺院については両方を作成したが、その他は、巻数別の索引のみ作成した。写真の写り具合は概して良好で、第3堂の曼荼羅全体図や壁面の全体図等大きな被写体の場合に光量不足や不具合もたまに見られたが、重点的に練習して行った至近距離での撮影は極一部の例外を除いて全てきれいな画像が得られた。また、子カードは尊名判定にも使える様に作って行ったが、結局諸元と撮影箇所の記録に用いたのみで、尊名判定には利用し難い状態となった。

今回の調査団は総本山金剛峯寺を始め多数の方々

の御援助と御協力によって出発し調査を遂行できたのであるが、「アルチ寺院」撮影に関しては、撮影技術指導をしていただいた蜜波羅先生、「アルチ寺

院」の難持ちははじめとするラマ僧達、アルチ村のロンポー一家の人々の御協力による所が多かった。ここに記して心から感謝の意を表したい。

＜レー調査隊写真一覧表＞

凡

1. この表は、レー調査隊が撮影したカラースライ
ドフィルム(36枚どり)76巻分の一覧表である。

1. 撮影の諸寺院は次の如し。

アルチ寺院。アルチリゾン寺院。サスポール
窟院。リキル寺院。スピトク寺院。サブー寺
院。タンタック寺院。チョムデー寺院。ヘミ
ス寺院。サンカル寺院。護摩修法(リキル寺
院)。リゾン寺院。サスポール寺院。

アルチ寺院

第1堂	1-1~7-14		
西壁	全体図	1-1	
A面	1-2~1-20	曼茶羅	
B面	1-21~2-8	曼茶羅	
C面	2-9~3-1	曼茶羅	
D面	3-2~3-4		
E面	3-5~3-8		
F面	3-9~3-11		
北壁			
A面	3-16~3-22		
B面	3-23~3-34		
C面	3-35~4-6		
D面	4-7~4-17		
E面	4-18~4-35		
東壁	全体図	5-1~2	
A面	5-3~5-4	千体仏	
B面	5-5~5-7	千体仏	

例

1. 配列の順序は次の如し。

例：第1堂1-1~7-14 全76巻中の第1
巻1枚目から第7巻14枚目までに第1堂
が収まっている。

例：第1堂、西壁、B面、1-21~2-8曼
茶羅 全76巻中第1巻21枚目から第2巻
8枚目までに第1堂西壁B面が収まって
いる。このB面には曼茶羅が画かれている。

C面	5-3~5-10	千体仏	
D面	5-11~5-12	千体仏	
E面	5-13~	千体仏	
F面	5-14~5-15	千体仏	
南壁	全体図	5-16~18	
A面	5-19~5-21	千体仏	
B面	5-22~5-23	千体仏	
C面	5-25~6-11		
D面	6-12~7-2	仏伝図	
E面	7-3~7-14		
第2堂1F	7-17~11-30		
西壁			
A面	7-17~7-19	阿弥陀千体仏	
B面	7-20~7-25	左脇士	
C面	7-26~8-12	観音像	
D面	8-13~8-19	右脇士	
E面	8-20~8-22	阿弥陀千体仏	

北壁
 A面 8-23~8-26 阿弥陀千体仏
 B面 8-27~8-34 左脇士
 C面 8-35~9-26 弥勒像
 D面 9-28~9-36 右脇士
 E面 10-1~10-3 阿弥陀千体仏

東壁
 A面 10-4~10-6 文殊千体仏
 B面 10-7~10-15 左脇士
 C面 10-16~11-1 文殊像
 D面 11-2~11-8 右脇士
 E面 11-9~11-12 文殊千体仏

南壁
 A面 11-13~11-14 釈迦千体仏
 B面 11-15~11-18 マハーカラ
 C面 11-19~11-20 釈迦千体仏

天井とチャルテン
 11-21~11-30

第2堂2F 11-31~27-1

西壁 全体図 11-31
 A面 11-32~13-6 曼荼羅
 B面 13-7~13-22 十一面観音
 C面 13-23~14-35 曼荼羅

北壁 全体図 15-1
 A面 15-3~16-2 曼荼羅
 B面 16-3~16-25 釈迦
 C面 16-27~17-32 曼荼羅
 D面 17-33~18-1 A面の下
 E面 18-2~18-18 B面の下

東壁 全体図 18-19
 A面 18-20~20-12 曼荼羅
 B面 20-13~20-22 ターラ

C面 20-23~22-6 曼荼羅
 南壁 全体図 22-7
 A面 22-8~22-36 曼荼羅
 B面 23-1~23-33 曼荼羅
 C面 23-34~23-35 マハーカラ
 D面 24-1~25-6 曼荼羅
 E面 25-7~26-21 曼荼羅

天井と柱
 26-22~27-1

第2堂3F 27-2~28-36

西壁 27-2~27-15 曼荼羅
 北壁 27-30~28-23 曼荼羅
 東壁 27-16~27-29 曼荼羅
 南壁 28-24~28-29

第2堂入口
 28-30~28-36

第3堂後室 39-14~57-15

西壁
 A面 39-14~42-13 曼荼羅
 B面 42-14~45-7 曼荼羅

北壁
 A面 45-8~45-31 千体仏
 B面 45-34~46-5 左脇士
 C面 46-6~46-26 四面大日
 D面 46-27~47-8 右脇士
 E面 47-9~47-26 千体仏

東壁
 A面 47-27~50-20 曼荼羅
 B面 50-21~52-11 曼荼羅

南壁
 A面 52-12~54-14 曼荼羅
 B面 54-15~55-11 マハーカラ

C面 55-12~57-15 曼茶羅
 第3堂前室 57-16~62-18
 東壁 全体図 57-16
 A面 57-18~57-26
 B面 57-27~57-35
 C面 58-1~58-5
 南壁 全体図 58-6, 58-28, 59-23
 A面 58-7~58-12
 B面 58-13~58-19
 C面 58-20~58-27
 D面 58-29~58-33
 E面 58-34~59-2
 F面 59-3~59-18 六道図
 G面 59-19~59-22
 H面 59-24~59-28
 I面 59-29~60-5
 西壁 全体図 60-6
 A面 60-7~60-10
 B面 60-11~60-16
 C面 60-17~60-23
 D面 60-24~60-29
 北壁
 A面 60-30~60-33
 B面 60-34~61-3 左脇室
 C面 61-4~61-27 後室への入口
 D面 61-28~61-31 右脇室
 E面 61-32~62-18 文殊像の室
 第4堂 29-2~33-29
 西壁 全体図 29-2
 A面 29-3~29-4 千体仏
 B面 29-6~29-24 曼茶羅
 C面 29-25~29-33 阿弥陀

D面 29-34~30-23 曼茶羅
 E面 30-24~30-25 千体仏
 F面 30-26~30-27 千体仏
 北壁 全体図 30-28
 A面 30-29~31-8 祖師
 B面 31-9~31-18 釈迦
 C面 31-19~31-30 観音
 D面 31-31~31-35
 東壁 全体図 32-1
 A面 32-2~ - 千体仏
 B面 32-3~32-4 曼茶羅
 C面 32-5~32-11 釈迦
 D面 32-12~32-35 曼茶羅
 E面 32-36~33-1 千体仏
 F面 33-2~ - 千体仏
 南壁 全体図 33-3
 A面 33-4~33-5 千体仏
 B面 33-6~33-9 マハーカラ
 C面 33-11~33-12 千体仏
 2F
 西壁 33-13~33-16
 北壁 33-17~33-21
 東壁 33-22~33-25
 南壁 33-27~33-29
 第5堂 34-1~39-12 (除35-9~37-36)
 西壁 全体図 34-1~2
 A面 34-3~34-10 曼茶羅
 B面 34-11~34-13 千体仏
 C面 34-14~34-18 千体仏
 北壁 34-19~34-33 千体仏
 東壁 34-34~35-8
 南壁 -

A面	38-1~38-9	新壁画
B面	38-11~38-14	マハーカーラ
C面	38-15~38-19	千体仏
中央文殊像		
西(A)	38-20~38-25	白
北(B)	38-26~38-30	赤
東(C)	38-31~38-35	青
南(D)	38-36~39-4	金
天井	39-5~39-12	
諸堂外景		
	33-31~33-36	
	62-19~62-22	
ロンポーハウス横のチョルテン		
	62-1~63-1	
チョルテン1		
	63-2~63-20	
チョルテン2		
	63-2~64-21	
チョルテン3		
	64-22~64-37	
アルチリゾン寺院		
第1堂	65-1~66-7	
第2堂	66-8~67-29	
サスポール窟院		
	35-9~37-36	
リキル寺院		
ツオカン曼荼羅		
	68-1~68-6	
ハカン		
	68-7~68-36	
スピトク寺院 ツオカン		
	69-1~69-36	

サブ寺院 ツオカン	
	70-1~70-22
タンタック寺院	
ツオカン	
	70-24~71-1
洞窟	
	71-3~71-7
ハカン	
	71-8~71-11
チョムデー寺院 ツオカン	
	70-20~72-8
ヘミス寺院35仏と84成就者	
	72-11~73-16
サンカル寺院 ツオカン2 F	
	72-18~73-27
護摩修法 (於リキル寺院)	
作担風景	
	73-28~74-1
資具	
	74-4~74-11
ツオカンでのプージャ	
	74-13~74-27
護摩風景	
	74-28~75-37
リゾン寺院	
ハカン	
	76-1~76-9
ツオカン	
	76-13~76-19
ドゥカン	
	76-20~76-30
サスポール寺院	
	76-31~76-35

日 程 表

3 / 27	計 画 発 足	
4 / 13	隊員初会合，計画案発表。	
4 / 18	打合会，以後毎週火曜日を会合日とする。各分担決定。	
4 / 19	写真撮影練習開始。（毎週木曜日）	
4 / 27	全隊員会合。実行計画書発表，調査資料配布。チベット語会話練習開始。	
5 / 6・7	アルチ寺院壁画の撮影用略図作成。	
5 / 14	登山関係装備購入	
5 / 15	パスポート全員取得。ビザ，保険，航空券を旅行社に依頼。	
5 / 29	写真関係装備品購入。医療関係装備完了	
6 / 7	壮 行 会	
6 / 9	食糧，おみやげ品購入	
6 / 10	共同装備分配	
6 / 12	最終打合会	
6 / 14	大阪太閤寺集合，最終点検	
6 / 15	大阪空港（10：30）バンコック空港着（17：30，現地時間）	
6 / 16	バンコック発（10：30）デリー空港着（14：30）団費換金，スリナガル行航空券購入。	
6 / 17	デリー発（9：30）スリナガル着（12：00） 現地旅行社と接触，バスチケット手配，テント借用 依頼。	
6 / 18	装備，食糧品購入	
6 / 19	装備，食糧品購入。換金。2隊おわかれ会。	
6 / 20	レー調査隊出発（8：45）カルギル着 （19：45）	ザンスカール調査隊，コック，ジープ運転手契約。
6 / 21	カルギル発（6：10）レー到着（18：0 0）	スリナガル出発（8：00）バス，ジープに分乗。 カルギル着（8：30）
6 / 22	休養日	ジープ2台に分乗カルギル出発（11：30）サンクー で入域登録。パニカル着（4：00）荷馬手配。
6 / 23	食糧，装備品購入	ジープ先発（10：00）パルカチの先で停止（11： 30）これより徒歩，二上隊員高山病，パルカチにも どる。キャンプ。

6 / 24	食糧購入	休養日，川で洗濯。
6 / 25	レー出発（9：00）アルチ村入り（11：40）アルチ寺見学	バルカチ出発（10：00）シンモダンサ着（15：45）16km
6 / 26	写真撮影開始	出発（8：45）ジュルド着。（18：00）22km
6 / 27	第1堂撮影終了	乗馬4頭を加え出発。ランドン・ゴンバ調査。タシトンレ泊。9km
6 / 28	第2堂撮影開始。	ペンツェラ峠越え，ペンツェラランゴ着（16：40）20km
6 / 29		出発（9：50）ディンドゥンサ（14：00）16km
6 / 30	祭り	出発（7：50）チブラ，アブラン，クシュル着（16：20）25km
7 / 1	休養日，魚釣（不漁）	出発（8：35）ハミリン，スキヤガム，レマラ，マング泊（15：00）クーテ・ゴンバ。12km
7 / 2	州知事来訪	出発（8：25）ペー，ランタクシャ，シャモリン，トゥンリ（14：45）13km
7 / 3	第2堂撮影終了	出発（9：20）トゥラハン，リージン，カサル，テータ（12：50），ドルジェゾン，ランミ村着（19：20）10km
7 / 4	種智院大学隊来訪	ランミ滞在。チュクチージャル，カルシャ・ゴンバ調査
7 / 5	第4堂撮影終了	出発（8：45）トゥンリの橋を渡りサニ村（12：20）13km 灌頂の儀式（3日目）
7 / 6	サスポール洞窟調査，レーへ食糧買出	出発（13：10）パドゥン着（15：25）10km
7 / 7	第5堂撮影終了	ピピティン・ゴンバ往復（片道2km），パドゥン滞在。
7 / 8	第3堂撮影開始	パドゥン発（6：05）トンデ・ゴンバ（11：25着，14：00発）パドゥン（19：00）28km
7 / 9		パドゥンのゴンバ，チョルテン調査
7 / 10		出発（8：35）バルドゥン・ゴンバ（13：00）ゴンバ泊10km
7 / 11	政府視察団来寺（アルチ寺院補修保存工事のため）	出発（7：30），途中越智団長，発熱下痢のため前進不能。バダムより救援帰着（15：45）

7/12	アルチ・リゾン寺へ行くが入れず。	休養日 石仏調査
7/13	第3堂撮影終了	スタクリモ・ゴンバ再調査。パドゥン発(11:00) サニ村先の河原(17:00)11km
7/14	アルチ・リゾン寺調査	出発(6:45)アティン、トクタ着(11:20)12km ゾンクル・ゴンバ往復(片道4km)
7/15	休養日	出発(7:05)トゥンリの橋を渡りペー着(17:05)23km
7/16	整理、あとかたづけ。村民とお別れ会	出発(10:00)アブラン(14:50)18km
7/17	アルチ出発、リキシル寺調査。レー帰着	出発(8:30)ディンドゥンサ(15:10)21km
7/18	シャンカル寺、チャンスバ・チョルテン調査	出発(8:15)ペンツェラ峠越えシュニザのキャンプ地26km
7/19	シェー寺、フィヤン寺、スピトク寺調査	出発(8:05)タシトンレ、ランドゥン・ゴンバ再訪、ジュルドー着(14:30)14km
7/20	ティクセ寺、サブー寺調査	出発(9:05)シンモダンサ(15:05)22km
7/21	タントック寺、チョムデー寺、ヘミス寺調査	出発(9:00)バルカチ(12:30)16km
7/22	休養日	タンゴル村まで歩く。6km。トラックでカルギルへ出る。
7/23	スタクナ寺、マトォ寺調査。マトォのリンポチェと会見	バス便にてスリナガル帰着。久しぶりの入浴。
7/24	休養日、市内見学、装備整理	休養日。
7/25	リキシル寺護摩調査。リキシル寺泊	ナギン湖ハウスボートで休養。
7/26	リキシル寺発。リゾン寺、サスポール寺調査。仏教哲学学校訪問。レー着。	同上。
7/27	レー出発、カルギル着。	ダル湖ハウスボートで調査整理。
7/28	カルギル発、スリナガル帰着。ザンスカール隊と合流。	同上。
7/29	スリナガルにて解散。団員順次帰国。	8/10 越智団長、肝炎発病。 9/5 在山団員再会。
	今後の作業についてうちあわせ。健康診断。	9/18 写真整理作業開始。報告会うちあわせ。
10/4	学内報告会、慰労会。	10/6 報告書内容決定。 11/18 日本密教学会で小林、酒主隊員発表。
	12/20 写真整理作業、ほぼ完了。	

装 備 ・ 食 糧 ・ 医 療 に つ い て

装 備

装備面では、昨年同様現地調達を原則とした。日本から持ち出したものは、小数・軽量化が計られ、撮影・調査機材、食糧に限ったため、現地までの移動は、スムーズに行なえた。(共同装備分担重量1人約7kg、全重量70kg)カメラ関係では、レー隊では昨年から使用しているストロボ2台が、使用過多のためか後半から作動が一時不能になる事があり、帰路処分した。また、ザンスカール隊にも、ストロボはやはり2台持って行きたかった。アルカリ電池も十分のつもりだったが、充電待ちの時間ロスもかなりあった。今回は隊装備以外の個人持ちとして、ザンスカール隊に2台、レー隊に1台の8mmカメラがあったが、これらは調査に非常に役立った。ただ、はこり・震動に弱く対策を充分に行なう必要がある。持って行くなら、重いカメラは不向きであり、室内ライトも必携である。また、テープレコーダーも個人持ちとしてレー隊に1台有ったが、これも護摩修法調査の時に有効であった。小型・軽量化がポイントとなるが8mmカメラと共に、各隊に各1台は持って行っても便利だろう。コンパス、高度計は、普及品だったが、特別精密な観測をした訳ではないから充分であった。レー隊ではメジャーを3種類持って行った。寒暖計は、両隊ともすぐに壊れてしまった。もう少し精密で丈夫なものを持って行くべきである。また、湿度の測定もできるものも持って行きたい。ザンスカールは地図の未整備な所なので、万歩計等でおよその距離をつかむ事も考えても良かった。

テントは昨年売却したものをスリナガルで借用でき、両隊ともテント2張とツェルト1張の全く同じ装備となった。ザンスカール隊では、4人用に2人ずつ寝たので居住性は良く、荷物の収容も含めて合理的に行なえた。ツェルトはコック・炊事に用いたが、途中入口を燃やしてしまった。軽いものであるから予備が有っても良かった。レー隊では、アルチ村に昨年無かったホテルが有り、炊事・機材保管用に1室借りて、非常に便利だった。

炊事具、日用品は全てインド製を用いたが、全体的に使い勝手が違うので多少とまどった。圧力鍋は便利であったが、圧力が上りすぎて爆発する事があるので、特に使用法を注意する必要がある。炊事用石油ストーブは、インド製は粗悪であり、足がとれたり、石油もれが頻繁におこった。毎日分解して移動するザンスカール隊では、特にひどく何度も修理をくりかえした。購入の際、火を付けてテストするだけでなく、強度を確かめて大量にスペアパーツを買うか、むしろ中古の使用中的のものを手に入れた方が信頼できるかも知れない。また、懐中電灯や水筒も壊れやすかった。全体的にもっと高級品を選んで買った方が良かったかも知れない。食器類も失くすことを考慮に入れて余分に持って行きたい。他にポリタンクの栓等小さなものの紛失も多少あった。管理をよくする事も重要であるが、移動の場合は大切なものは予備を用意した方が良い。ザンスカールに於ては、どぶの様に濁った水を用いなければならない場合もあったので、濾過器の簡単なものも必要であろう。撮影用トーチライトは電池6本入りを用いたので電池の消費が早かった様に感じた。むしろ4本入りの方が長持ちしたのではないか。撮影用の足場はスリナガルで作って行った脚立より、レーで作らせたテーブル状の台が役に立った。

装備のうち、テント2張、サーチライト2台、三脚2台、メジャー、コンパス、高度計等は、デリーのツーリスト・オフィサー・ラジ・クマール氏に預けて来た。その他、持ち帰った撮影機材を除く大部分の装備は、現地にて全て処分した。

備考：パダンのバザールで入手できる物

ローリク、マッチ、石ケン、電池、鍋、食器、針、糸、粗悪な衣類、靴、その他小間物、
石油（パダンの政府石油直売所で）トイレットペーパーは入手不可能。

装 備 表

1. 日本持ち出し分

品 名	数・サ隊	数・レ隊	品 名	数・サ隊	数・レ隊
テント、4人用 ^フ ライ ^イ 付 ^フ レーム	2		ビニールテープ	5	5
高 度 計	1		ガムテープ	1	1
コンパス	1	1	接 着 剤	1	1
寒 暖 計	1	1	ビニール袋（大・中・小）	100	50
メジャー10m（ビニール製）		1	マチック・インキ（大・中）	2	5
5m（メタル製）	1	1	ボールペン（赤・黒）	10	20
2m（布 製）		1	ホッチキス		1
サーチライト		2	クリップボード		2
電 卓	1	1	医療セット	1	1

2. 撮影装備（※印は個人所有）

a. ザンスカール調査隊

品 名	数	品 名	数
カメラ、ミノルタXE	※ 1	ブローブラシ	1
レンズ、28mm F.2.8	※ 1	フィルムカラーズライド用コダック	20
50mm F.1.4	※ 1	カラープリント用コダックASA100	20
200mm F.4	※ 1	カラープリント用コダックASA400	5
ストロボ	※ 1	モノクロプリント用フジASA100	5
アルカリ電池（単3）	8	モノクロプリント用コダックASA400	5
水銀電池（予備用）	2		

b. レー調査隊

品名	数	品名	数
カメラ、ニコンFE	1	水銀電池(予備用)	2
ニコンFM	1	三脚	2
レンズ、28mm F.3.5	※ 1	自由雲台	2
35mm F.2.8	1	マグニファイヤー	1
マイクロ 55mm F.3.5	1	レリーズ	2
ズーム 80~200mm F.4	※ 1	ブローワー・ブラシ	2
フィルタースカイライト	4	アルミ・バック	1
(U, V, P, C)	各1	フィルムカラーズライド用コダック	80
ストロボ	2	カラープリント用コダック ASA100	20
ストロボ延長コード	2	カラープリント用コダック ASA400	5
ストロボ増照灯	2	モノクロプリント用フジ ASA100	20
アルカリ電池(単3)	84	モノクロプリント用コダック ASA400	5

3. 現地調達分

a. ザンスカール調査隊(スリナガルにて購入)

(Rはインドルピー)

品名	数	単価	品名	数	単価
ツェルト	1	借用	石油ポンプ	1	2R
石油ストーブ(調理用)	2	65R	マッチ	1打	1.5R(1打)
同上スベアパーツ	1式	5R	懐中電灯	2	21~12R
石油タンク(10ℓ)	4	15.5R	同上予備球	2	2.25R
石油	40ℓ	約1.6R(1ℓ)	同上電池(単1)	20	2.25R
水タンク(10ℓ)	2	15.5R	ドライバー(-)	1	2R
圧力ガマ	1	165R	ラジオペンチ	1	6R
鍋(大・中・小)	3	42R(3ヶ)	針金	10m	4.5R
フライパン	1	18R	ロープ(ザイル風)	33m	2R(1m)
皿	6	3.5R	細紐	10m	1R(1m)

鉢	6	4.5R	ロープ(梱包用)	2kg	20R(1kg)
ティーカップ	6	3R	梱包用袋	8	3R
スプーン	6	2.5R	グラウンドシート(4m×1.5m) (ビニール製)	1	24R
フォーク	6	2.5R			
包丁	1	1.5R	洗濯石ケン(固形)	2	2.25R
茶こし	1	1.5R	トイレットペーパー	10	5.5R
麵棒	1	2R	ばねばかり	1	28R
お玉杓子	1	2R	にわとり用カゴ	1	2.5R

b. レー調査隊(レーにて購入、※印はスリナガル)

品名	数	単価	品名	数	単価
テント4人用 ^{フライ} フレーム付	2	借用	お玉杓子	1	
ツェルト	1	借用	ポリバケツ	1	17R
石油ランタン(圧縮型)	1	130R	たらい	1	17R
石油ランタン	1	15R	水タンク(10ℓ)	2	20R
石油ストーブ(調理用)	2	50R	たわし	2	7R
同上スペアパーツ	1式	5R	クレンザー(Vim)	2	3.5R
石油タンク(20ℓ)	1	借用	マッチ	1ダース	1.5R(1打)
石油	40ℓ	2R(1ℓ)	洗濯石ケン(箱入)	2	6R
圧力ガン ※	1	175R	洗濯バサミ	10	
鍋(大・中・小)	3	54R(3ヶ)	トイレットペーパー	35	5R
フライパン	1	12R	電池(単・1)(トーチ用)※	60	2.5R
やかん	1	15R	電池(単・1)(トーチ用)	30	2R
皿	6	25R	細紐	30m	1R(1m)
鉢(大)	6	3R	毛布	6	5.5R
鉢(小)	6	1R	グラウンドシート(4m×1.5m) ※	1	16.5R
ティーカップ	6	2R	ドライバー(ー) ※	1	2R
スプーン	6	2R	ラジオペンチ ※	1	6R

フォーク	6	3R	ハンマー	1	7R
包丁	2		シャベル	1	13R
茶こし	1		脚立(撮影用)	2	100R
縄 棒	1		撮影用台	1	190R
カン切り・栓抜き	1				

4. 個人 装 備

品 名	数	品 名	数
上 着	2	ゴムぞうり	1
ズ ボ ン	2	雨 具	1
半ズボン	1	水 筒	1
下着(上・下)	各3	洗 面 具	1
セーター	1	時計・ライター	各1
ヤッケ	1	サングラス	1
ソックス	3	ヘッドランプ	1
帽 子	1	常 備 薬	
ザ ッ ク	1	リップクリーム	1
サブザック	1	ノート・筆記具	1
寝 袋	1	鍵・鎖	1
(軽)登山靴	1	パスポート	

(以上 次 記)

食 糧

ザンスカール調査隊は、スリナガルでコックをやとい、全行程の食事をまかせた。それに対し、レー調査隊は、アルチ村での23日間、毎日二人ずつの食事当番が三食の調理をした。インド人のコックは当然、毎日カレー料理を作るのに対し、日本人が作るレー班の食事は日本風の献立だった。男ばかりの所帯だから作れるメニューは限られているが、結構文句もいわずに調査、写真撮影を終えることができた。表を比較して見てもらえば、この二隊の食生活の違いに気がつかれると思う。

ザンスカール隊では、スリナガルから持って行った野菜がすぐに底をついたが、玉ネギカレーかニワトリ・マトン等の肉カレーを食べていた。朝はチャパティにバターとジャムをつけて、紅茶を飲む。昼はチャパティか昨日の残りの御飯にカレーがつく。夜は御飯とカレー、持っていったニワトリを殺してローストチキンやスキヤキ風のおかずを楽しむこともある。コンビーフ・サラミなどもあってたん白質はなんとか足りている。

これに対しレー班の食事は玉子の使用もあるがかなりたん白質系の不足である。レーのバザールで売っているマトンの肉は隊員が気味悪がって食べなかったようだ。そのかわりさすがに野菜・果物類を多量にとっている。朝・昼・晩、三食とも御飯が多かったようで、ザンスカール隊と比べて、ビスケット等の菓子類・糖分も少ない。少々栄養不足だが味噌汁と御飯の日本的食生活だったように思う。毎日壁画の撮影を決められたスケジュールに従ってこなしていく間の食事は、むしろリクレーシヨンの役割を果たしたのだろう。運動量が比較的少ないから、何とかこれでしのげたのだと思う。それでもスリナガルでお会いした時、皆さん少々やせていた。

ザンスカール隊の食糧は、さすがによく消費している。こちらもむしろ食糧不足に悩まされたのだが、ビスケット・キャンデーもよくとっているし、砂糖の消費量はレーの3倍だ。油（ギー）も同様チャパティを焼いたり、カレーにも毎日使っているので9kgも使っている。野菜、果物が無かったのは少々痛い、基礎栄養だけは足りたのだろう。ただビタミン類の不足は病気等への導火線となりやすい。高山病に対してもビタミンCは有効だというし、今後の問題だろう。

それにしても、ザンスカール班は毎日20km平均歩いている。3000m以上の高所、強い日射の下での体力消費は予想以上に著しい。糖分はこれでいいとしても、たん白質と脂肪はもう少し欲しい。スリナガルでもレー隊と同様、ザンスカール隊もやせていた。現地コックのカレー料理は私などは大変おいしくいただけただけの、もう少し日本食のメニューも考えないといけなかった。事情が許せば市販の缶詰弁当も利用したいと思う。

食糧表

ゼンスカール隊(5名30日間) レー隊(6名23日間)

品名	購入量	中途追加	備考	購入総量	備考	単価 (キロあたり)
米	60kg		5kg程残	60kg	一回追加	1~3R
小麦粉	20kg	5kg	チャパティには よく消費	8kg	大部分余る	2R
じゃがいも	17kg	不能	不足	24kg	一回追加	2R
たまねぎ	9kg	14kg	カレーには 大量に消費	10kg	一回追加	2~6R
きゃべつ	3kg	不能	不足	18kg	くさりやすい	1~2R
にんじん	6kg	"	しなびる	2kg		2~5R
きゅうり	7kg	"	生野菜としてうまい	9kg	くさりやすい	2.5R
カリフラワ	2kg	"	不足			2.5~5R
なすび				4kg	つけもの用	4R
さやえんどう		1ヶ月程 後可能	試験的に栽培	3kg		4R
レモン	1kg	不能	日持する			8R
マンゴ	3kg	"	くさる			6R
スイカ	5kg(一個)	"	すぐ食べる	2コ	(マクワウリも)	1.5R
すもも		"		7kg		4~6R
チェリー		"		4kg		12R
りんご		"		1kg		6R
トマト		"		2kg		5R
かぶらとなっば		"		8kg位		7R
ニワトリ	7羽(10kg)	3羽	入手難しい			11~40R
マトン肉		6kg程	入手難しい			
玉子		30コ程	入手難しい	90コ		1個1R位
魚缶	6缶			7缶		6~9R
缶詰スープ					チキンスープ トマトスープ等	
ミルク		適当	缶ミルク要		使わない	
ダヒー(ヨーグルト)		"			"	
(チャンアラ) 地酒		"	全体に入手難	一回	たのんで作らせる	
ダール豆	5kg		パダム入手可			4~6R
カレー粉	5パック1kg	2パック 追加	パダム入手可	0.6kg		10~16R
砂糖	3.5kg	6kg	紅茶用に消費	3kg		6~7R

品名	購入量	中途追加	備考	購入総量	備考	単価 (キロあたり)
ギ (粗製バター)	4 kg	5 kg	大量に使う	2 kg	サラダ油も使う	14~20 R
塩	1 kg	0.5 kg		1 kg		1~3 R
こしょう	0.2 kg			0.5 kg		20 R
ケチャップ	1本		不足	1ビン		1ビン5 R
ウスターソース	1本		インドのカレー にもあう	2ビン		1ビン7 R
ジャム	4本		不足	4本位		1ビン7 R
バター	2缶	1ポンド		1 kg		約35 R
紅茶	0.5 kg	0.5 kg	バダムで入手可	0.5 kg		約40 R
コーヒー			個人持	0.2 kg		約50 R
ビスケット	30箱	42箱	バダム・ ジュルド入手可	4箱		3.5~5 R
キャンデー	6 kg	2 kg	ほとんど 村人に配る	1 kg位		
板チョコ	26枚		うまい	14枚		1枚2.5-3.5 R
干菓子類	2 kg	1 kg	バダムで 若干入手可		ア ン ズ	
ハチミツ				2ビン		1ビン6 R
果物缶詰	4個		うまい	3個		7~10 R
クッキー	50枚		こわれる	18枚		1枚2.5 R
食パン				2斤		1斤3.5 R
ココナッツ				13 R 分		
レモンジュース	2ビン		粉末	2ビン	濃縮液	1ビン8 R
スパゲティ	2袋		粉になった			
缶チーズ	1缶					
サラダ油				1ビン		10 R

以上現地購入分(単価はスリナガル、レー・バダムなどで高低がある)

品名	ザンスカール隊	レー 隊	品名	ザンスカール隊	レー 隊
サラミ・ソーセージ	5本(1 kg)	6本(0.7 kg)	日本茶	300 g	450 g
コンビーフ	5缶(0.7 kg)		コブ茶		一缶
粉みそ	0.5 kg	0.8 kg	味付のり	100 g	100 g
みそ		0.5 kg	ふりかけ	2袋	2袋
しょうゆ	500 CC	500 CC	即席ラーメン	2袋	
粉しょうゆ	100 g	100 g	干大根	1袋	

だしの素	15袋	30袋	干しいたけ	1袋	
コンソメの素	50個	60ヶ	ひじき	1袋	
かつおぶし		30パック	とろろこんぶ		1袋
味の素(缶)	100g	100g	はんとうふ	1箱	1箱
即席スープ	3袋 4箱	2箱	ねりしょうが	1本	1本
乾ワカメ	200g	200g	茶づけのり	5袋	

以上日本購入品

(常多記)

医療品表

用途	薬品名	レー隊〔6名〕	ザンスカール隊〔4名〕	当薬の効果的症狀
強心剤	六神丸	50錠	50錠	高山病
抗生物質	サワシリン	60C	60C	} 細菌性諸疾患, 高熱, 肺炎等 { (ビタミン剤と併用)
	クルペン	16C	16C	
	グリペニン-D	20C	20C	
鎮静・鎮痛剤	サリドン	40C	0	頭痛, 発熱
	グランドール	12C	12C	
	パドリン	80錠	80錠	
	仁丹	6袋	0	
酔止め	トラベルミン=シニア	10錠	10錠	
抗ヒスタミン剤	プリペラン	30錠	30錠	食欲不振
消炎鎮痛剤	ソラントール錠	30錠	30錠	頭痛, 発熱, 化膿どめ
	ボルタン錠	20錠	20錠	
	ブタゾリン=ソフト	12錠	12錠	
感冒薬	プレコール錠	60錠	60錠	高山病によるかぜ
	プレコール咳止め	20錠	20錠	
胃腸薬	マミオスA	32包	32包	腹張, 腹痛
	グリーン	30包	30包	腹張
下痢止	ワカ末A錠	60錠	60錠	下痢止め
緩下剤	アミロン	24錠	24錠	
ビタミン剤	チオクトミン	200錠	200錠	
	ノイロピタン	30錠	30錠	
目薬	サンテ	二本	二本	乾燥地

外用消毒	希ヨーチン	一本	一本	}一般のきず、消毒
	オキシドール	一本	一本	
皮膚軟膏	ケミセチンデキサ 〔10g〕	一本	一本	かぶれ
	オイラックス軟膏 〔10g〕	一本	一本	虫による、かゆみ
	キシロA軟膏〔25g〕	一本	一本	外傷
	スピーネ=クリーム 〔80g〕	一ケ	一ケ	肌あれ、日焼止
	リップクリーム〔個人〕			くちびるのあれ
外用湿布剤	サロシバ	80枚	80枚	}筋肉痛
	フジバ	12枚	12枚	
殺虫剤	のみ取粉〔二種類〕	二本	二本	のみ、ダニ、南京虫等の殺虫
衛生材料	サビオ〔カット判〕	100枚	100枚	きずの保護
	ガゼ	一包	一包	
	ホータイ	二ケ	二ケ	
	フリーホータイ	一本	一本	
	カット綿	一ケ	一ケ	
	体温計	一本	一本	発熱
	浣腸〔小〕	二本	二本	

上記の薬品は、常多隊員の実父、常多忠男氏の御好意により、当調査団に寄贈された。

(長田)

第二回チベット仏教文化調査団収支報告

予算総額 6,490,000 (単位円)

支出総額 6,490,000

<内訳>

本山援助金	2,000,000
大学援助金	1,000,000
寄付金	1,890,000
自費参加隊員負担金(4名分)	1,600,000

<内訳>

写真機材フィルム購入費	424,590
装備機材購入費	115,193
遠征費	4,281,677
帰国整理費	490,024
報告書作成費	550,000
事務費	190,695
次年度遠征隊繰越金	437,821

<支出明細>

写真機材フィルム購入費	424,590	
フィルム費※	178,800	
カメラ2台購入費※	119,600	
レンズ3台購入費※	71,500	
三脚2台購入費※	22,000	
その他カメラ付属品※	32,690	
装備機材購入費	115,193	
テント2張り購入費※	46,000	
フライ2張り購入費※	17,000	
その他野外装備品※	33,530	
食料購入費(日本購入分)※	18,663	
遠征費	4,281,677	
旅費(大阪→デリー→スリナガ ル往復)(217,640円×10人)	2,176,400	
	ザンスカール隊 (4名分)	レー隊 (6名分)
滞在費(47日間)	435,787	686,795
ジープチャーター費	114,399	131,927
人件, 馬輸送費	185,982	0
謝礼, 土産費	27,429	83,759
自炊装備購入費※ (現地購入分)	47,365	67,408

資料購入費(経典, 書籍代等)	146,190
為替差損	178,236
帰国整理費	490,024
フィルム現象費	198,314
フィルム焼付費	123,940
カメラ修理費	4,400
スライド写真収納庫購入費(2台)	42,200
ツィンオートキャビン購入費(1台)	31,000
ライトボックス購入費(4台)	16,000
スライド用ファイル費	43,770
アルバム費(大小15冊分)	15,900
シャーレー式(護摩の資具収納器)	8,700
カード製本費	5,800
報告書作成費 印刷費(1500部)	550,000
事務費	190,695
コピー代	90,695
写真撮影研究会費	16,770
電話・通信費	5,860
交通費	59,520
雑費	17,850

(※印の明細は72頁以下参照)

第二回チベット仏教文化調査団々員名簿

団長 越智淳仁

<レー調査隊>

隊長	静慈圓（密教学科講師）	和歌山県伊都郡高野町高野山清涼院
調査渉外	小林暢善（密教学修2）	広島県尾道市東久保町20-28
装備	坎宥行 [※] （密教学科卒）	和歌山県伊都郡高野町高野山宝善院
食糧	南門明定 [※] （密教学科卒）	奈良県大和郡山市矢田町3505矢田寺
調査会計	塚本佳道（仏教学修1）	広島県深安郡神辺町東中条1664
医療写真	長田実生 [※] （仏教学修1）	香川県三豊郡豊中町大字本山甲1445

<ザンスカール調査隊>

隊長	越智淳仁（密教学科講師）	和歌山県伊都郡高野町高野山文化通り318
調査記録	酒主照之（仏教学博退）	福島県いわき市小名浜字古湊188
調査装備	二上寛弘 [※] （仏教学修退）	大阪市港区築港一丁目13-3
渉外会計	常多昇（仏教学科3）	大阪府茨木市庄一丁目20-1

※印は自費参加隊員

昭和 53 年度寄付者御芳名

金拾萬円

高峰秀海

中川善教

酒井真典

院内講

三宝院

藤田研道
(愛媛県吉祥寺)

金五萬円

高野山本山役職会

稲葉義猛

高室院

内海有昭

伊藤真城

近藤本昇

無量光院

亀位宣雄

久利隆輔

静盛暁

添田隆俊

藤田光輔

持明院

本王院

繪持院

上池院

宝善院

増福院

態谷寺

北室院

密厳院

不動院

光明院

西南院

金三萬円

安養院

地藏院

大明王院

(順不同 敬称略)

チベット仏教文化研究会会則

- 第 1 条 本会はチベット仏教文化研究会と称し、事務所を高野山大学内に置く。
- 第 2 条 本会はチベット仏教文化の研究と調査を目的とする。
- 第 3 条 本会は右の目的を達成するために、左の事業を行う。
1. 研究会の開催
 2. チベット仏教文化の現地調査と資料の収集
 3. 研究と調査の成果刊行、その他
- 第 4 条 本会の主旨に賛同する者をもって会員とする。
- 第 5 条 本会の会員を分けて左の二種とする。
- 正会員
- 賛助会員
- 第 6 条 本会は寄付金および賛助会費をもって運営し、賛助会費は別に定める。
- 第 7 条 本会に左の役員を置く。
- | | |
|-----|-----|
| 会 長 | 1 名 |
| 副会長 | 1 名 |
| 参 与 | 若干名 |
| 委 員 | 若干名 |
| 幹 事 | 若干名 |
- 第 8 条 役員の仕事、選出、任期は左の通りである。
1. 会長は高野山大学学長が当り、本会を代表して、会務を統理する。
 2. 副会長は高野山大学学監が当り、会長を補佐する。
 3. 参与は委員会の求めに応じて、本会の事業を遂行するための助言を行う。
 4. 委員は委員会を組織し、本会の事業を遂行するための企画、運営に当る。
 5. 幹事は本会の事業遂行に関する事務を担当する。
 6. 参与、委員、幹事は会長が委嘱し、任期は2年とするが重任をさまたげない。
- 第 9 条 本会の規則変更、その他事業計画は役員会の決議によって行う。
- (本規定は昭和53年3月13日より施行する)

(原文縦組)

チベット仏教文化研究会収支報告（54. 2. 3.現在）

（収入の部）

賛助会費（53年度納入分）	370,000円
壮行会会費	44,000
御祝金	10,000
報告書（1冊分）	600
53年度繰越金	437,821
小計	862,421

（支出の部）

壮行会費用	92,620円
会費（含報告会費用）	41,590
コピー代	3,500
通信費	1,220
文房具	1,960
見舞金（越智氏御見舞）	10,000
赤字補修（52年度報告書分）	6,566
小計	157,456円

（残高 54年度繰越金） 704,965

53年度賛助会員

本覚院	西南院	遍照光院
高室院	南院	正智院
宝城院	西禅院	明王院
竜光院	親王院	総持院
安養院	一乘院	北室院
普門院	本王院	福智院
蓮華定院	西室院	普賢院
大円院	成福院	持明院
桜池院	赤松院	熊谷寺
恵光院	上池院	不動院
三宝院	西門院	天徳院
常喜院	増福院	金剛三昧院
蓮花院	遍照尊院	宝善院

編集後記

小チベットとも称される秘境ラダックは、テレビ等による当地の紹介や仏教壁画などの出版によって、昨今では単に仏教関係者に留まらず、一般の人達にも大きな関心をよんでいる。昨年のラダックは調査隊や観光客によって空前のブームに沸いたそうである。本学の第1回ラマ教文化調査団の報告書を送ってほしいという手紙が思わぬ方面から後をたたないのも願けよう。

昨年の第2回チベット仏教文化調査団の報告書がここに上梓をみた。実質2カ月たらずの現地調査であったが、隊員諸氏にとっては前年度の調査結果を踏まえたより効果的な調査と成果を目指して、昨年当初から出発間際まで、その準備に忙殺された。そして、帰国後のこの調査報告書の完成によって、やっとその任から解放されたのである。およそ1年間に亘る隊員諸氏の熱意と努力に対して、心からその労をねぎらい、感謝の意を表したい。

思えば一昨年の第一回学術調査は一つの大きな試金石であった。専門学的立場から現地調査の必要性を痛感し、資金のほとんどを自己負担でまかなうという財政的困難を乗り越えてもたらされた調査報告は、斯学会に大きな反響をよんだ。これらの調査報告、成果に基づき、昨年は宗門関係の大学、研究機関から派遣された調査隊が教隊にのぼったと聞いている。わが宗団においても、本山当局はこの種の学術調査の継続調査の必要性に理解を示し、今後数次に亘る海外調査の資金援助を約束した。大学当局も積極的にこの計画を推進するにあたって、学術調査隊派遣の母体となる「チベット仏教文化研究会」を設立し、賛助会員による資金援助も得て、徐々に組織づくりが進められた。このような経過をへて第2回調査隊が本会の企画のもとに派遣され、ここにその調査報告書がまとめられたわけである。この報告に基づき、現在、本会では来年度の第三次調査の地域、対象、方法、人選等の検討に入っている。先達によって蒔かれた種子は着実に芽を出し、根を張り、大きく育とうとしている。今後の会の発展を心から祈って止まない。

(チベット仏教文化研究会)

第二回高野山大学チベット仏教文化調査団報告書

1979年2月20日 印刷

1979年2月28日 発行

編集・発行所

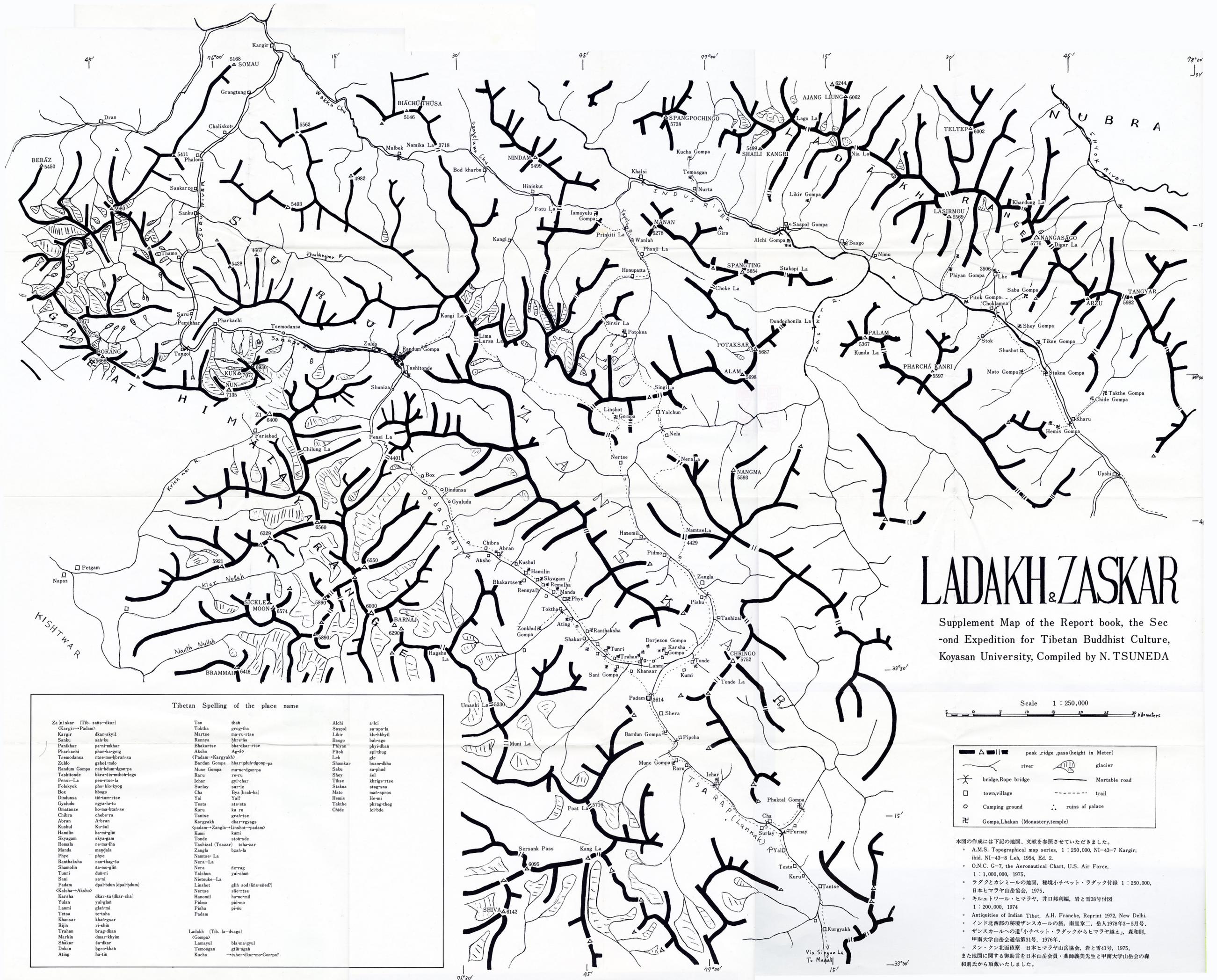
チベット仏教文化研究会

〒648-02 和歌山県伊都郡高野町高野山
高野山大学内
TEL 07365-6-2921 (代)

印刷所

正美社印刷所

〒601 京都市南区唐橋門脇町6
(非売品)



LADAKH & ZASKAR

Supplement Map of the Report book, the Second Expedition for Tibetan Buddhist Culture, Koyasan University, Compiled by N. TSUNEDA

Scale 1 : 250,000
 0 10 20 30 40 kilometers

▲	peak, ridge, pass (height in Meter)
—	river
⊗	bridge, Rope bridge
○	town, village
□	Camping ground
⌘	Gompa, Lhakhan (Monastery, temple)
⊞	glacier
—	Mortable road
---	trail
⋯	ruins of palace

本図の作成には下記の地図、文献を参照させていただきました。
 ・ A.M.S. Topographical map series, 1 : 250,000, NI-43-7 Kargir; ibid. NI-43-8 Leh, 1954, Ed. 2.
 ・ O.N.C. G-7, the Aeronautical Chart, U.S. Air Force, 1 : 1,000,000, 1975.
 ・ ラダクとカンミールの地図、秘境小チベット・ラダク付録 1 : 250,000, 日本ヒマラヤ山岳協会, 1975.
 ・ キルトワール・ヒマラヤ、井口邦利編、岩と雪38号付図 1 : 200,000, 1974
 ・ Antiquities of Indian Tibet, A.H. Francke, Reprint 1972, New Delhi.
 ・ インド北西部の秘境ザンスカールの旅、南里章二、岳人1978年3~5月号。
 ・ ザンスカルへの道「小チベット・ラダクからヒマラヤ越え」、森和則、甲南大学山岳会通信第31号, 1976年。
 ・ メン・クン北面偵察 日本ヒマラヤ山岳協会、岩と雪41号, 1975。
 また地図に関する御助言を日本山岳会員・薬師義美先生と甲南大学山岳会の森和則氏から頂戴いたしました。

Tibetan Spelling of the place name

Za (n)skar (Tib. zans-dkar) (Kargir→Padam) Kargir Sanku Panikhar Pharkachi Tsemodansa Zuldo Randum Gumpa Tashitonde Pensi-La Folokyok Box Dindunsa Gyaludu Omatanze Chibra Abran Kushul Hamilin Skyagam Remala Manda Phye Ranthaksha Shamoln Tunri Sani Padam (Kalsha→Aksho) Karsha Yulan Lanmi Tetsa Khanasar Rijne Trahan Markin Shakar Dokan Ating	Tan Toktha Martse Rensya Bhakartse Aksho (Padam→Kargyakh) Bardun Gumpa Mune Gumpa Raru Ichar Surlay Cha Yal Testa Kuru Tantse Kargyakh (padam→Zangla→Linshot→padam) Kumi Tonde Tashizal (Tsazar) Zangla Namtse-La Nera-La Nera Yalchun Nietsuke-La Linshot Nertse Hanomil Pidmo Pishu Padam	thaa grog-tha ma-rur-tse hbre-ma bha-dkar-rise Ag-so hbar-gdub-dgomp-pa mune-dgomp-pa reva gyr-char sur-le Bya (bcab-ba) Yal ste-sta ku ru gran-tse dkar-rzyags kumi stob-sde tshaz-zar bzab-la skiyangam reva-ma mandala phye ran-thag-sa sa-moglin dutrri sani dpal-bdun (dpal-bdum) dkar-sa (dkar-cha) yul-glat glab-mi tet-saha khar-gsar rishiuh brag-dkan dmar-khyim sard-dar ngro-khan bat-tin	Alchi Saspol Likir Basgo Phiyen Pitok Leh Shankar Sabu Shey Tikse Stakna Mato Hemis Takthe Chide a-lei sa-spo-la klu-khyil bab-sgo phyi-bhan spi-thug gle bsam-dkha sar-phud sel khriga-rtse stagan-na mar-spros Hemi phrag-theg lci-bde	Ladakh (Tib. la-dvags) (Gompa) Lamayul Temosgan Kucha	bla-ma-gyul gitir-gaga →tshard-dkar-mo-Gompa?
---	--	---	---	---	---

